仙台市文化財調査報告書第68集

南小泉遺跡

都市計画街路建設工事関係第3次調査報告

昭和59年3月

仙台市教育委員会

南小泉遺跡

都市計画街路建設工事関係第３次調査報告

仙台市教育委員会

序　　文

3ヶ年に渡りました都市計画街路・川内ー南小泉線建設工事に伴う発掘調査も、無事、皆様方のご協力を得て終了することができました。

今回、この報告書は、第3次調査の報告のみならず、3ヶ年の総括として、また近年調査資料が増加しております南小泉遺跡全般についても考えてみようと試みたものであります。紙数及び期間に制約があり、充分な検討ができたとは言えませんが、南小泉遺跡の概要を把えていただけるものと思っております。皆様のご批評をいただきまして、今後の検討課題としていく所存でありますので、よろしくご指導の程、お願いします。

さて、仙台市内には、このような埋蔵文化財が数多く存在し、郷土の歴史を知る貴重な文化遺産として位置付けられております。このような遺産を保護・保存して後世に継承していくことは、現代に生きる私達の責務でもあります。

しかしながら開発により消滅していく遺跡も多数あり、文化財保護行政にたずさわる者にとりまして、そのようなものをどのようにして継承していけるか、いかに開発と環境を調和させていくかなど、問題点も山積みされております。今後とも皆様のご理解とご協力の程、よろしくお願い致します。

なお本書が多くの方々の活用に寄与できれば幸いに存じます。

昭和59年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　　黎

例　　言

1．本書は都市計画街路、川内・南小泉線建設工事に伴う第3次調査（最終調査）の報告書であり、3ヶ年間の総括的内容も含むものである。

2．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1：25,000仙台東南部地形図の一部である。

3．本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1973) を使用した。

4．本書中の方位の表記は磁北に統一してある。なお、仙台では磁北方向は真北に対して西偏7°0′である。

5．本書中における遺構番号は、3ヶ年の都市計画街路の調査における、通し番号である。

6．黒色処理されている土師器については、その実測図にスクリーントンを貼って表現した。

7．本書の作成に際して、陶磁器の一部については名古屋大学の楢崎彰一先生、元東北大学教授である芹沢長介先生の御教示をあおいだ。また鳥獣骨については東北大学文学部の高橋理氏に鑑定していただいた。人骨（歯）については獨協医科大学の茂原信生、馬場悠男先生に原稿をも含めてお世話になった。

8．本報告の執筆分担は次のとおりである。

結城慎一　　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ(1)、(2)、(3)−2)、3)、Ⅴ(1)

佐藤　洋　　Ⅳ(3)−1)、4)、(4)、Ⅴ(2)、(3)

9．本報告書の編集は結城が担当した。

10．遺物の写真撮影は佐藤が担当した。

11．本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

本 文 目 次

調査要項
Ⅰ、遺跡の位置と環境…… 1
Ⅱ、地区設定と調査箇所…… 3
Ⅲ、調査経過…… 7
Ⅳ、第3次調査概要…… 8
(1)地区設定…… 8
(2)基本層位…… 9
(3)発見遺構と遺物……10
1)弥生時代……10
弥生土器……10
石器……22
南小泉遺跡出土の弥生時代初期の土器について……25
編年的位置……27
2)古墳時代の遺構、遺物……30
第21号住居跡……30
第22号住居跡……32
第23号住居跡……37
第24号住居跡……40
第25号住居跡……41
第46号溝跡……42
第19号土壙……46
第21号土壙……46
第22号土壙……46
第24号土壙……46
第25号土壙……47
3)平安時代の遺構、遺物……47
第19号住居跡……47
第20号住居跡……52
第27号土壙……55
第28号土壙……55
4)中世、近世の遺構、遺物……59
第1号掘立柱建物跡……59
第2号掘立柱建物跡……59
第3号掘立柱建物跡……59

第４号掘立柱建物跡……64
第５号掘立柱建物跡……64
No.６柱穴……64
第１号土倉跡……67
第２号土倉跡……68
第44号溝跡……69
第45号溝跡……73
第47号溝跡……74
第13号土壙……81
第14号土壙……81
第15号土壙……81
第16号土壙……81
第23号土壙……82
第１号墓壙……84
(4)第１次調査区補遺……85
第６号掘立柱建物跡……85
第７号掘立柱建物跡……85
第８号掘立柱建物跡……85
第９号掘立柱建物跡……85
第１次調査区の建物跡群について……87
Ⅴ、まとめと考察……88
(1)古墳時代～平安時代の南小泉遺跡……88
(2)関東系土器出土の意義とその問題点……98
(3)中世の南小泉遺跡について…… 100
南小泉遺跡出土の中世人骨…… 109
（表１、図１あり）

図・表・写真目示

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 2
第２図　発掘調査区とその周辺…… 4
第３図　調査区グリット配置図…… 5、6
第４図　路線内グリット配置と第４次調査区… 8
第５図　基本層位図…… 9
第６図　調査区西側断面図……11、12
第７図　調査区南側断面図……13、14
第８図　弥生土器(1)……15
第９図　弥生土器(2)……16
第10図　弥生土器(3)……17
第11図　弥生土器(4)……18
第12図　弥生土器(5)……19
第13図　石器(1)……23
第14図　石器(2)……24
第15図　弥生土器片グリット別出土集計……28
第16図　石器グリット別出土集計……28
第17図　調整痕のある剥片グリット別
出土集計……29

第18図　フレーク、チップグリット別出土集計……29
第19図　第21号住居跡平、断面図……31
第20図　第21号住居跡出土遺物……32
第21図　第22号住居跡平、断面図……33
第22図　第22号住居跡カマド実測図……34
第23図　第22号住居跡出土遺物……35
第24図　第23号住居跡平、断面図……38
第25図　第23号住居跡出土遺物……39
第26図　第24号住居跡平、断面図……46
第27図　第24号住居跡出土遺物……41
第28図　第25号住居跡平、断面図……41
第29図　第25号住居跡出土遺物……42
第30図　第44～47号溝跡断面図……42
第31図　第46号溝跡出土遺物……44
第32図　第24号土壙平、断面図……47
第33図　第25号土壙出土遺物……47
第34図　第19号住居跡平、断面図……48
第35図　遺構配置図（古墳時代～平安時代）……49、50
第36図　第19号住居跡出土遺物Ⅰ……51
第37図　第19号住居跡出土遺物Ⅱ……52
第38図　第20号ａ、ｂ住居跡平、断面図……53
第39図　第20号住居跡出土遺物……54
第40図　第28号土壙出土遺物Ⅰ……56
第41図　第28号土壙出土遺物Ⅱ……57
第42図　第１号掘立柱建物跡実測図……60
第43図　遺構配置図（中世～近世）……61、62
第44図　第２号掘立柱建物跡実測図……63
第45図　第３、４、５号掘立柱建物跡実測図……65、66
第46図　第１号土倉跡平、断面図……67
第47図　第１号土倉跡出土遺物……68
第48図　第２号土倉跡平、断面図……69
第49図　第49号溝跡出土遺物……70
第50図　溝、土倉跡の断面図位置と方向……71
第51図　第45号溝跡出土遺物……72
第52図　第44、45、47号溝跡断面図……75、76
第53図　第45、47号溝、１号土倉跡断面図…77、78
第54図　第47号溝跡出土遺物Ⅰ……79
第55図　第47号溝跡出土遺物Ⅱ……80
第56図　第13、14、15号土壙平、断面図……82
第57図　第16号土壙平、断面図……83
第58図　第23号土壙平、断面図……83
第59図　第１号墓壙平、断面図……84
第60図　第１号墓壙出土遺物……85
第61図　第１次調査区掘立柱建物跡……86
第62図　第４、15号溝跡出土灰釉陶器……87
第63図　遺構配置図（古墳時代～近世）…89、90
第64図　南小泉遺跡出土土器集成(1)……91、92
第65図　南小泉遺跡出土土器集成(2)……95、96
第66図　南小泉遺跡出土の中近世陶磁器……103、104
第67図　遺構外出土遺物……106

表１　弥生土器属性表……20
表２　弥生時代石器属性表……25
表３　南小泉遺跡（都計街路）中世遺構一覧……100

図版１～11　遺構写真……113～122
図版12～22　遺物写真……123～134

調 査 要 項

遺跡名	南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号C－102）
調査場所	仙台市古城三丁目地内
調査面積	第1次調査　第1次調査区　約700㎡（対象面積約2,000㎡） 第2次調査区　約800㎡（対象面積約2,500㎡） 第2次調査　第3次調査区　約550㎡（対象面積約1,000㎡） 第3次調査　第4次調査区　約600㎡（対象面積約1,500㎡）
調査期間	第1次調査　昭和56年4月13日～9月3日 第2次調査　昭和57年6月22日～8月12日 第3次調査　昭和58年5月9日～7月26日
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係 第1次調査　結城慎一　渡辺忠彦 第2次調査　結城慎一　工藤哲司 第3次調査　結城慎一　佐藤　洋
調査、整理参加者	〈第1次調査〉　松本寿一、只野宗一、小沢勝久、千葉博美、甲田恵子、芦野ヒデ子、菅野三郎、吉田俊一、村上まつえ、佐々木由紀、佐藤和子、兼子ミヨ子、斎藤啓子、黒滝ふくえ、高平智恵子、渡辺浩一、板橋うめよ、佐藤慶一 〈第2次調査〉吉田俊一、菅野三郎、黒滝ふくえ、鈴木悦子、村上まつえ、渡辺みつえ、芦野ヒデ子、兼子ミヨ子、佐々木由紀、松本寿一、只野宗一、佐藤和子、佐藤愛子、小林広美、赤間郁子、神尾恵美子、神尾紀以子、渡辺紀雄、能谷峯子、菊地雅之、相沢尚子 〈第3次調査〉吉田俊一、菅野三郎、黒滝ふくえ、村上まつえ、渡辺みつえ、芦野ヒデ子、兼子ミヨ子、佐々木由紀、只野宗一、佐藤和子、佐藤愛子、松坂浩、佐々木慎一、毛利貴洋、田中敦子、平照子、大槻明美、石井多賀子
調査協力	仙台市建設局道路部建設課、仙台市市長室和談課、仙台市財政局用地課、地元町内会、㈱丸正吉田店、菅原栄治

Ⅰ．遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は国鉄仙台駅の南東約3.5㎞のところに位置している。仙台市は段丘及び沖積平野からなりたっていると概観でき、当遺跡は、沖積平野奥部の自然堤防上(標高約11m)に存在する。沖積平野は、深沼層、霞ノ目層、福田町層、岩切層の4層からなりたっており、南小泉遺跡一帯は霞ノ目層に当たる。この層は土器、石器、古代の植物種子を含む偽層砂岩、ローム層からなっていて、霞ノ目飛行場周辺に典型的に発達している。

仙台市は本州としては冷涼気候に属しており、びわや無花果、ざくろなどは殆んど北限に近い。茶は宮城県の北部まで栽培が見られるから、勿論仙台でも植栽されるが、柑橘類は全く適しない。もうそう竹は盛に生育する。仙台の気象をもう少し述べると6月～9月は海洋性気候の支配をうけて暖湿であり11月～3月の間は大陸性気候の影響によって低湿乾燥であると言える。

仙台市街の東南部にあたる古城、即ち昔の若林城を中心とした一円の地域を、藩政時代は若林と称した。それより先き、仙台城下町創設の頃、この地方は既に小泉村と呼ばれていた。
小泉村は、当時南目村・荒巻村及び根岸村などと入会になっていた大村で、今の南小泉地区は旧小村の一部であり、明治維新後、宮城郡高城郷(松島地方)の小泉村と混称を避けるため、高城郷の方を北小泉、今述べている国分郷小泉村を南小泉と改称した。
南小泉遺跡に当たるところは最近の住居表示による区画によれば、南小泉一丁目～四丁目、遠見塚一丁目～三丁目、古城一丁目～三丁目、南小泉字門山東、伊藤屋敷、遠見塚西、村東、霞ノ目を含む東西約1,600m、南北約900mの広域である。

昭和14年に、この地に霞ノ目飛行場(仙台飛行場)が建設された。この飛行場は戦中の昭和14～16年に拡張され、その際、多くの遺物や竪穴住居跡などが発見され学界から注目されるようになった。これより前、耕作等により弥生土器片、土師器片が出土し、採集されることが松本源吉氏により注目されていた。しかしながら本格的な調査は昭和52年度に行なわれた範囲確認調査が最初であり、昭和56年度都市計画街路に伴う調査が開始されてから、他の調査も重なり史跡遠見塚古墳の環境整備に伴う調査とも合せてようやく南小泉遺跡の遺構と遺物の様相が一端であるが明らかになりつつある。当地も仙台バイパスが開通する昭和43年ごろから市街化が進み、現在、農地として残っているところは少なくなってきている。

この付近には遺跡が多く、当南小泉遺跡のほぼ中央には主軸110mの前方後円墳である遠見塚古墳があり、仙台地方5世紀初頭における中心地として位置付けられる。これより西方約1㎞には法領塚古墳、猫塚古墳があり、かつては大小の古墳群を形成していたと思われる。またその後、これより約1.5㎞北方に陸奥国分寺、尼寺が建立される。遠見塚古墳の北方、東方、

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

南方には一部条里遺構が残っており、「二の坪」「三の坪」の地名も残っている。中、近世に至っては、遠見塚古墳から見て、西方約1kmに近世の若林城跡（中世には国分氏の居館であったといわれる）、東南方向約1kmには中世館である沖野城跡があり、弥生時代から近世に至るまで仙台地方の一つの拠点として位置付けられる地域である。

Ⅱ．地区設定と調査箇所

今回の調査対象となった都市計画街路（川内、南小泉線）は遠見塚二丁目から古城三丁目の仙台バイパスまでの部分である。この部分の計画街路中心線にバイパス側より100mごとにNo.0、No.5、No.10、No.15、No.20、No.25のコンクリート杭が打ってあり、また、この中を20mごとに分割する木杭（57年度以降はコンクリート製の幅杭）が打たれていたので、これを利用して地区設定を行った。また、単年度の発掘調査でなく2～3年の調査になるだろうと予想されたため、対象街路全体にメッシュをかけて地区を設定しておいた。まず路線軸に沿って、No.0～No.5をⅠ区、No.5～No.10をⅡ区、No.10～No.15をⅢ区、No.15～No.20をⅣ区、No.20～No.25をⅤ区とした。そして、その中をそれぞれ10mごと区切り、1～10の小区を設定した。次に路線幅については、計画街路幅員が歩道を含めて36mであるので中心軸を基準として5mずつ区切り、それぞれa、b、c、d、e、f、g、hとした。これによって出来る各個のグリットの呼称はⅡ－4d区、Ⅲ－2c区などとなり、一つのグリットは5×10=50（㎡）の範囲となる。

これに基づく各年度各調査区の調査箇所は以下のとおり表示できる。

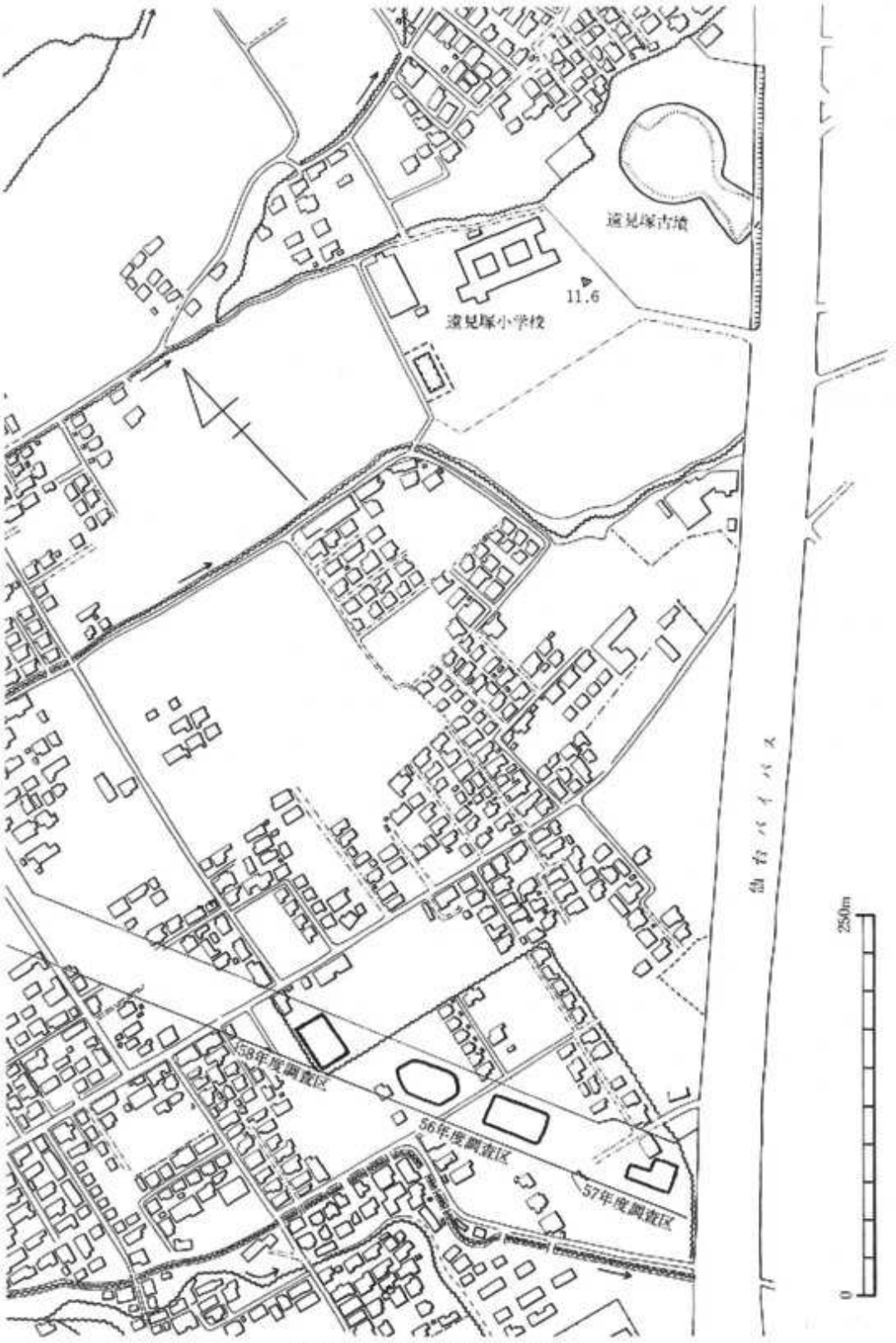
第1次調査　第1次調査区　Ⅱ－10のc～f区の一部、Ⅲ－1～3のc～f区

　　第2次調査区　Ⅱ－3～6のc～f区

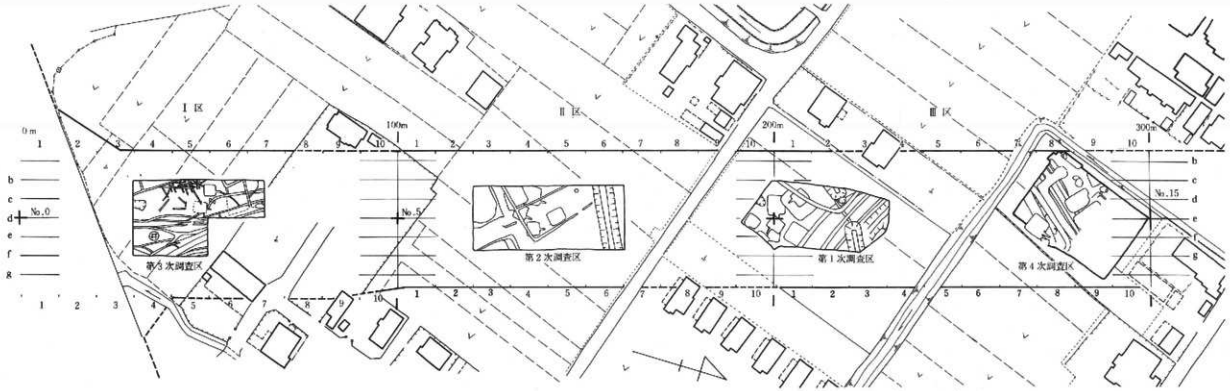
第2次調査　第3次調査区　Ⅰ－4.5のc～f区、Ⅰ－6、7のc、d区

第3次調査　第4次調査区　Ⅲ－7～10のa～f区内に別個設定。

調査区は極力路線に平行して設定したが、現在使用している道路、水路及び排土処理の問題、既設水道管の問題等があり、その調査面積、形状が決定された。特に昭和58年度（第3次調査）の第4次調査区は、現実に調査可能なところがL字に曲がる用水路に囲まれた三角地であり、第1、2次調査時のように、道路中心軸に沿った地区設定が不可能で、前述したⅢ－7～10のa～f区の範囲内に地形にあわせた調査区を別に設定した。ここにおける個別のグリット配置は後述することにする。



第２図　発掘調査区とその周辺



第3図　調査区グリット配置図

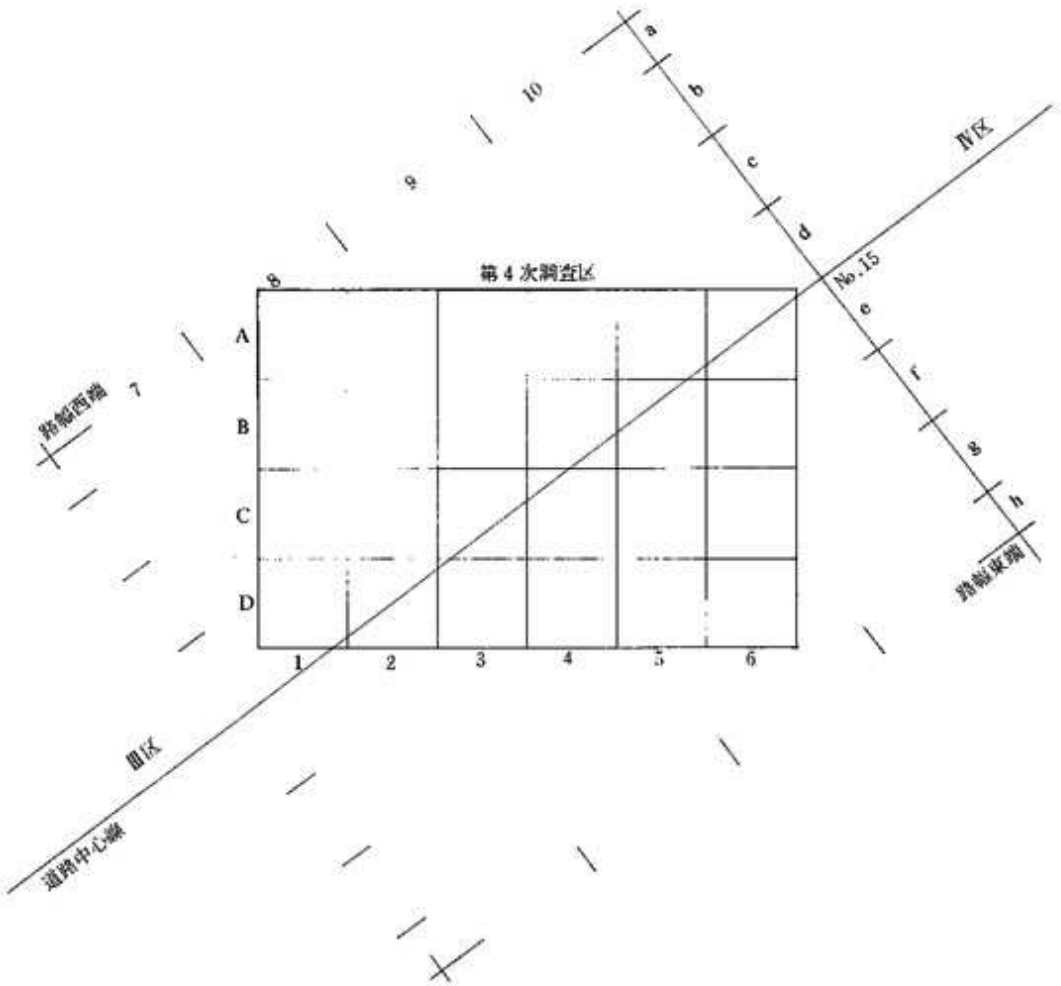
Ⅲ．調査経過

都市計画街路、川内南小泉線は仙台市の内環状線となるものであるが、これが古式土師器の標式遺跡として著名である南小泉遺跡の南辺付近を横切ることになり、市の道路部及び財政課と当社会教育課文化財調査係で協議を行った結果、道路部の協力を得て、調査にかかる経費は教育費から支出することとして事前調査を実施する運びとなった。第１次調査は昭和56年４月13Ｈから９月３Ｈまで延べ実働Ｈ数87Ｈで調査を行い、第１次調査区からは中・近世から平安時代、古墳時代遺構、第２次調査区からは古墳時代、平安時代遺構が発見された。遺物整理、図面整理を行い、第１次調査の結果は昭和57年３月「南小泉遺跡」(仙台市文化財調査報告書第35集）に報告している。第２次調査は昭和57年６月22日から８月12Ｈまで実働Ｈ数38Ｈで実施した。第３次調査区からは平安時代と近世の遺構、が発見された。遺物整理、図面整理を行い、その結果は昭和58年３月「南小泉遺跡」(仙台市文化財調査報告書第52集）に報告してある。第３次調査第４次調査区は昭和58年５月９日から７月26日まで調査を実施した。調査面積約600㎡のうち半分近くは撹乱されており、残り300㎡について精査を実施した。その結果、古墳時代から中・近世に至る遺構多数が発見された。遺物は弥生土器、土師器、陶磁器等出土している。これらの中には、当遺跡では初めて確認された関東系の遺物も含まれている。これら第１次から第３次調査結果の分類、分析及び第３次調査の報告は、今回この報告書の中でまとめてある。

Ⅳ．第３次調査概要

（1）地区設定

前述したが第３次調査第４次調査区は、都市計画街路全体に配した地区で見るとⅢ－７～10のａ～ｆ区内に該当する。しかしながら地形等の理由から前記区内に別個のグリットを設定し、調査することにした。新設したグリットは５ｍのメッシュで長辺、南北方向へグリットを設け、１～６の番号を付した。また短辺、東西方向へは４グリットを設け、Ａ～Ｄ（一部拡張のためＥのところもある）のアルファベットを付した。よってグリット名の呼称も前年までとは異なり単に１－Ａ区と言うようにした。調査区南北方向ラインと磁北との関係はＮ－20°10′－Ｅとなっている。



第４図　路線内グリット配置と第４次調査区

（2）基本層位

第4次調査区の基本層位を把握するため、調査区南東コーナー（1－D、E区）に1×1mの調査壕を設け、深さは表土から約170cmまで掘り下げた。その結果、大きく3層に、細くは8層に分かれて把握された。以下に説明する。

Ⅰ層：層厚約40cmで次のように細分できる。

1．耕作土

2．天地がえし

Ⅱ層：層厚約60cmである。この層以下は地山となっており、天地がえしなどがなされ、旧表土が削平されていた関係で、遺構検出面はこの層の上面になっている。

1．10YR⅞　明黄褐色シルト　やや粘性あり

2．10YR⅝　にぶい黄橙色砂質シルト

Ⅲ層：層厚70cm以上で次のように細分できた。

1．10YR¼　褐色砂

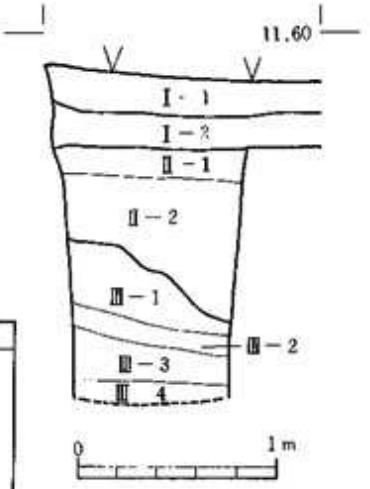
2．10YR⅝　にぶい黄褐色砂　やや粘性あり

3．10YR¼　褐色砂

4．10YR¾　暗褐色砂

また、今回調査の第4次調査区南側に当たる昭和56年度調査の第1次調査区、第2次調査区では、Ⅱ層とⅢ層間に砂礫層が見られる。旧表土は57年度調査の第3次調査区の耕作土の下に一部、層厚10～20cmで残っていた。天地がえしを含む耕作土の厚さはほぼ一定であるが、シルト（第1次、第2次調査区ではロームと記した）、砂礫、砂層のレベル、層厚などがまちまちであり、現在ほぼ平坦なこの地域も、地山形成段階で広瀬川などによる多くの自然堤防と後背湿地が形成され、起伏が多かったものと思われる。

このように南小泉遺跡は、自然堤防上に形成された複合遺跡と把えられる。



第5図　基本層位図

基本層位図

層	土色	土性	備考
Ⅰ－1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	しまりあり
Ⅰ－2	褐色（7.5YR5/3）	粘質シルト	しまりあり
Ⅱ－1	明黄褐色（10YR7/6）	シルト	やや粘性あり
Ⅱ－2	にぶい黄橙色（10YR6/4）	砂質シルト	きめこまかい
Ⅲ－1	褐色（10YR4/4）	砂	
Ⅲ－2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	砂	やや粘性あり
Ⅲ－3	褐色（10YR5/3）	砂	
Ⅲ－4	暗褐色（10YR3/4）	砂	

（3）発見遺構と遺物

調査の結果、調査区のほぼ50%が深く撹乱されていることがわかり、1～4－A～D区の精査を行った。ただ5－A区に撹乱よりさらに深く遺構（第27、28号土壙）が残存していることがわかり、最終日、雨中、土壙の掘り下げ、写真撮影、遺物取上げを実施した。

発見遺構は竪穴住居跡が第19号～第25号まで8軒（第20号はa、bに分れている）、溝が第44～47号まで6条（第45号はa、b、cに分れている）、土壙が第13号～28号まで13基（第17、18、20号土壙は改称ならびに誤認のため欠番）、墓壙が1基（第1号）土倉が2軒（第1、2号）、掘立柱建物跡5軒（第1～5号）、その他、ピット多数である。

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、中近世陶磁器、石器類、金属製品などである。

1）弥生時代

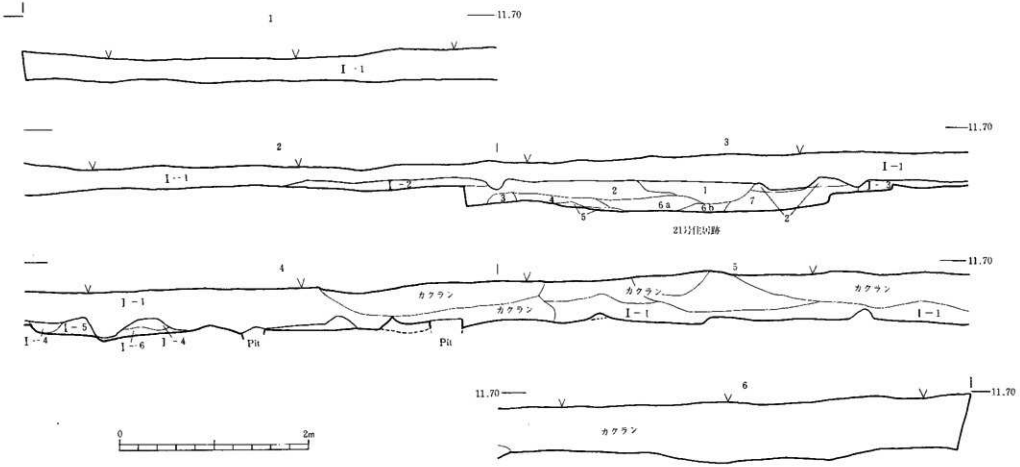
南小泉遺跡における都市計画道路の調査は、今回で3年目をむかえ、この間、計4ヶ所の調査区を調査した。今回の4次調査区を除けば、弥生土器の出土は極めて少量であり、時期的にもほぼ樹形図式、桜井式のものに限られている。また遺構は、都市計画街路の調査においてはいずれも確認されていない。さて、4次調査区において出土した土器群は、縄文時代晩期大洞A′式に後続する初期弥生土器のみで構成される点で注目される。従来、本遺跡の調査においては、数型式を含む出土状況が一般的であって、今回のようにほぼ単一時期のみで構成される出土状況はむしろ特異である。初期の弥生土器がこれだけ多量に出土したのは、仙台市内では初めてのことである。

弥生土器（第8～12図）

今回出土した土器は、総数910点である。いずれも細片が多く、器種の判定が困難なものが多い。観察の結果、判定できたものは、甕、深鉢、壺、高坏、鉢、蓋、手捏ね（鉢）である。ただ、鉢に分類した器種の中には、角田市鳶沼遺跡（志間泰治：1971）などにみられる丸底の椀あるいは蓋とされるものを含めている。また、甕と深鉢の分類は、あまり厳密に行なっていない。初期の弥生土器における甕の出現は蓋とともに大きな問題であるが、甕と深鉢を区別する規定が明確ではない。また、縄文時代晩期に甕を認める研究者もいるようで、今後解決されなければならない問題と言えよう。器種の問題については、破片資料がほとんどあり、深く言及できない。

甕（第8図1～5）

甕と考えられる土器には、No.1のように口縁部付近でわずかに折曲するものと、No.2とNo.3（同一個体と考えられる）にみられるように、ゆるく「く」字状を呈するものがある。いずれも口縁部あるいは体部上位に最大径をもつ。No.4は頸部に浅い沈線が周り、一部は二条となる。青木畑遺跡c類（加藤道男：1982）に類例がある。



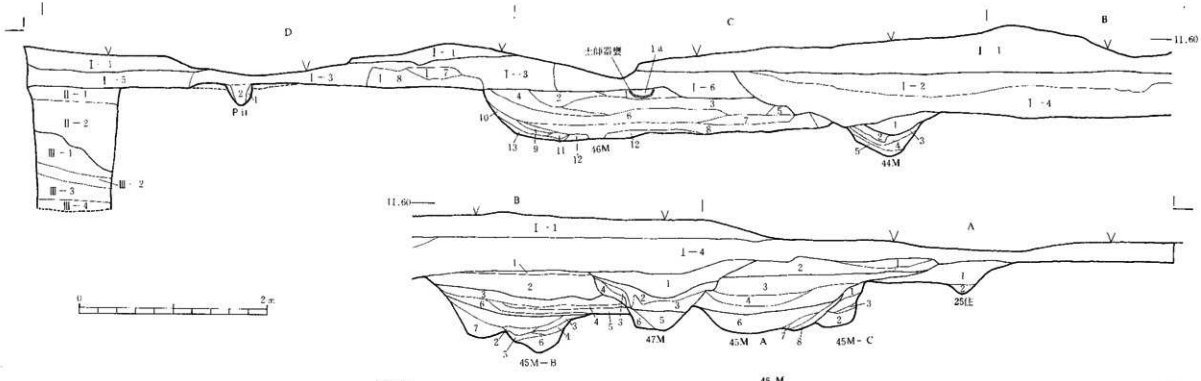
21号住居跡

層	土色	土性	備考
1	明黄褐色(10YR5/6)	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片を含む
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む
3	褐色(10YR4/6)	粘質シルト	しまりあり
4	褐色(10YR4/6)	粘質シルト	しまりあり、炭化物含む
5	明黄褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり
6a	褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり、炭化物混入
6b	褐色(10YR4/6)	粘質シルト	しまりあり、炭、焼土混入
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質シルト	しまりあり

基本層

層	土色	土性	備考
I-1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む耕作土
2	明黄褐色(10YR5/6)	シルト	しまりあり
3	褐色(10YR4/6)	粘質シルト	しまりあり
4	黒色(10YR5/1)	シルト	しまりあり、土師器片含む
5	黄褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり
6	黄褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり、炭化物含む黒色土まだら状に含む
7	褐色(10YR4/6)	粘質シルト	しまりあり

第6図　調査区西側断面図



層	土色	土性	備考
Ⅰ－1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	こまりあり、耕作土
2	褐色(10YR4/4)	シルト	しまりあり
3	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、土師器片少量含む
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	しまりあり、土師器片含む
5	褐色(7.5YR4/6)	粘質シルト	しまりあり
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質シルト	しまりあり
7	明黄褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり
8	明褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり
Ⅱ－1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	やや粘生あり
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	きめこまかい
Ⅲ－1	黒色(10YR2/1)	砂	
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂	やや粘生あり
3	褐色(10YR4/4)	砂	
4	暗褐色(10YR3/4)	砂	

P 11

層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色土まだら状に含む
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	しまりあり

25住

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	焼化鉄含む
2	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	しまりやや有り

45M．A

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む
2	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む
3	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物と酸化鉄が多量に含む、わずかにしまる
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物と酸化鉄を含む
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質シルト	炭化物と酸化鉄を含む
6	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質シルト	酸化鉄を含む、しまりもばり有り
7	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	灰黄褐色の粘質を薄状に含む
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	にぶい黄褐色のシルトを当状に含む

45M．B

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む、ねばり有り
2	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む
3	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む
4	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む
5	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む
6	褐色(10YR4/4)	シルト	にぶい黄色の砂を斑点状に含む
7	明黄褐色(10YR6/6)	シルト質砂	にぶい黄褐色のシルト質砂を含む

45M．C

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	酸化鉄 炭化物を含む
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	酸化鉄 炭化物を含む
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	酸化鉄 炭化物を含む
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	酸化鉄 炭化物を含む

44 M

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	しまりあり、炭化物含む、暗褐色土ブロック状に含む
2	褐色(10YR4/4)	シルト	しまりあり、炭化物含む
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	しまりあり、焼生性、土師器片含む
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質シルト	炭化物を含む
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	しまりなし、焼生物を含む

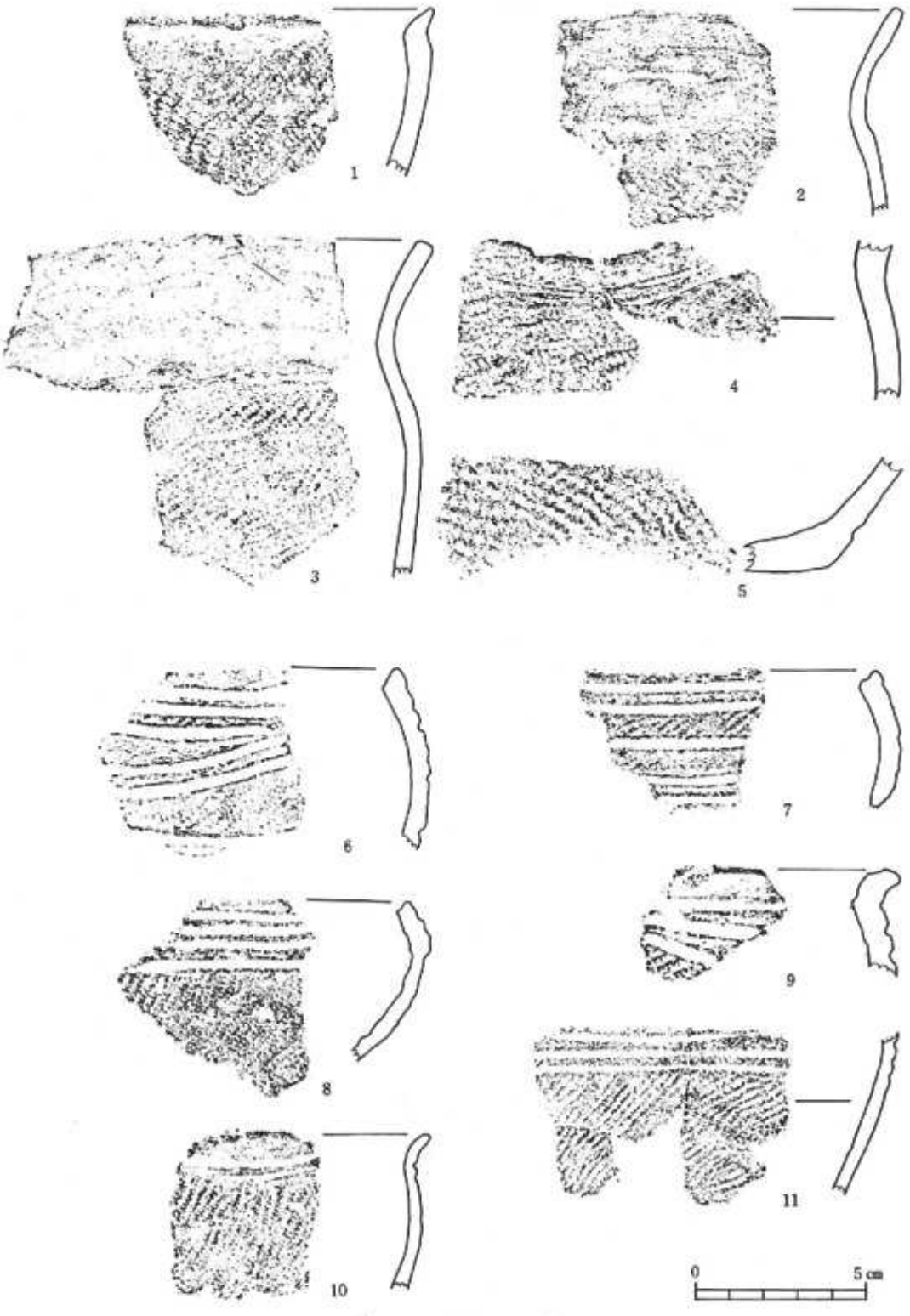
46 M

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	粘質シルト	しまりあり
1a	暗褐色(10YR3/4)	シルト	しまりあり
2	褐色(10YR4/4)	粘質シルト	しまりあり
3	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	しまりあり、炭化物含む
4	褐色(10YR4/4)	シルト	しまりあり、土師器片、炭化物含む
5	黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	しまりあり
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	しまりあり、やや粘性、酸化鉄、砂含む
7	灰黄色(10YR5/2)	砂	しまりあり
8	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘質シルト	しまりややあり、酸化鉄、砂含む
9	褐色(10YR4/4)	粘質シルト	しまりあり
10	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む
11	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土	しまりなし、酸化鉄含む
12	褐色(10YR4/6)	砂	しまりあり、酸化鉄含む
13	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	しまりややあり

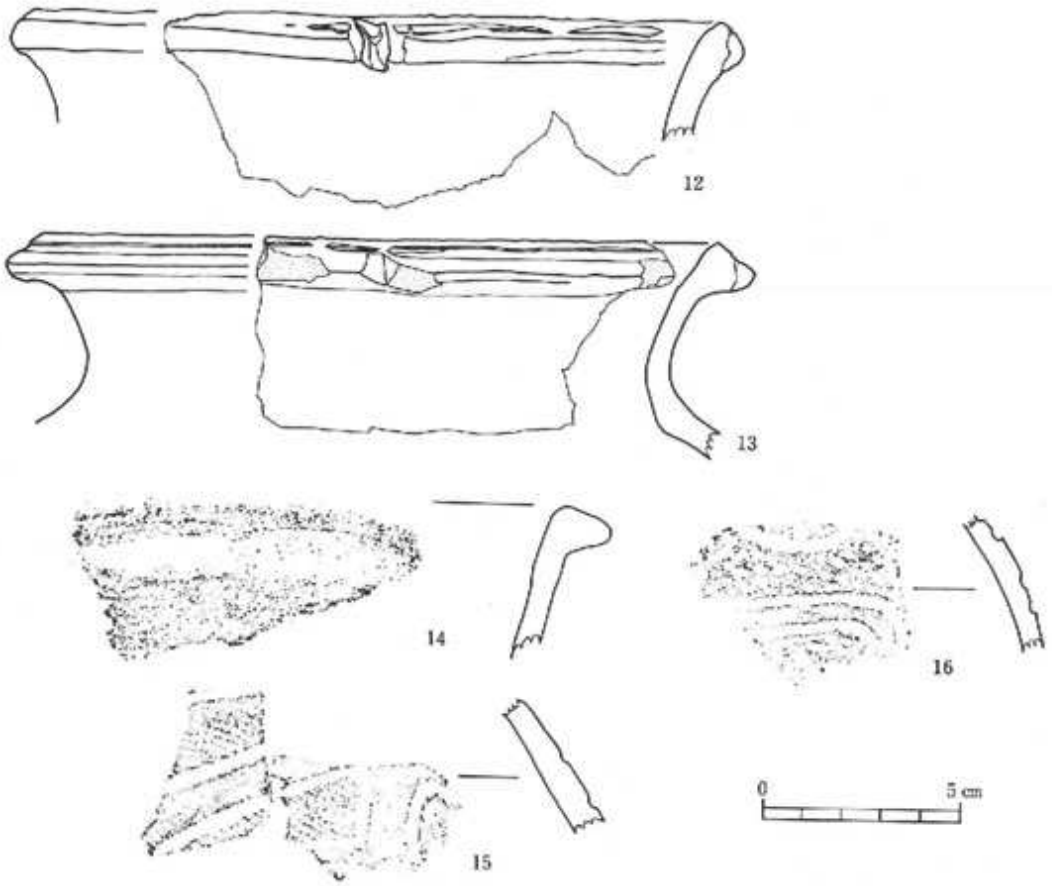
47 M

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、にぶい黄褐色土をまだら状含む
2	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、しまりあり
3	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、しまりと粘りあり
4	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、わずかなしまりあり
5	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、にぶい黄褐色土まだら状に含む
6	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む

第7図　調査区南側断面図



第8図　弥生土器（1）



第9図　弥生土器（2）

深鉢

深鉢は大きく3類型に分類される。

Ⅰ類　内弯して立ち上がるもの。

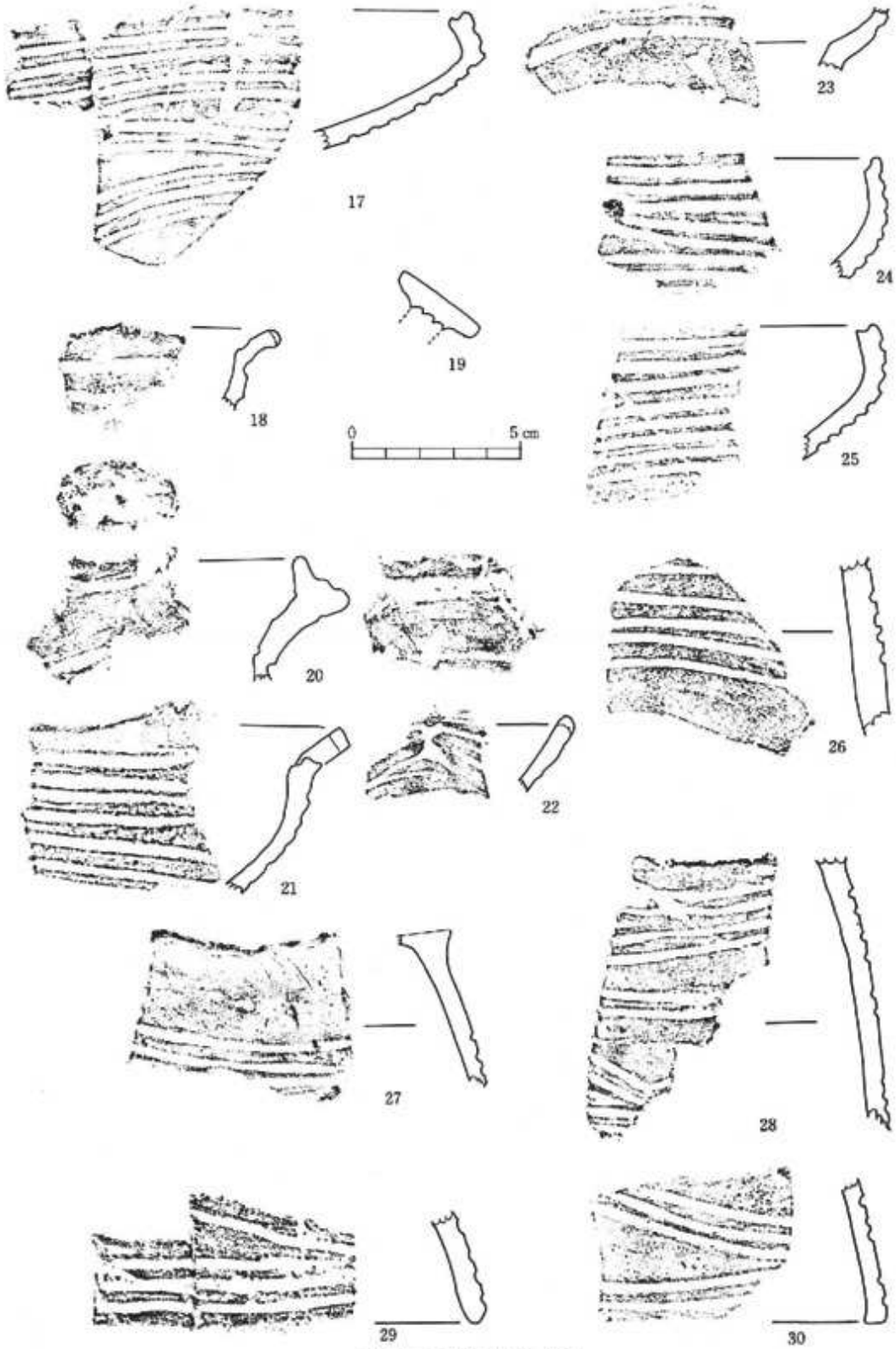
Ⅱ類　口唇部付近がわずかに内弯しながら立ち上がり、「く」字状に屈曲する。

Ⅲ類　口縁部がゆるやかに外反するもの。

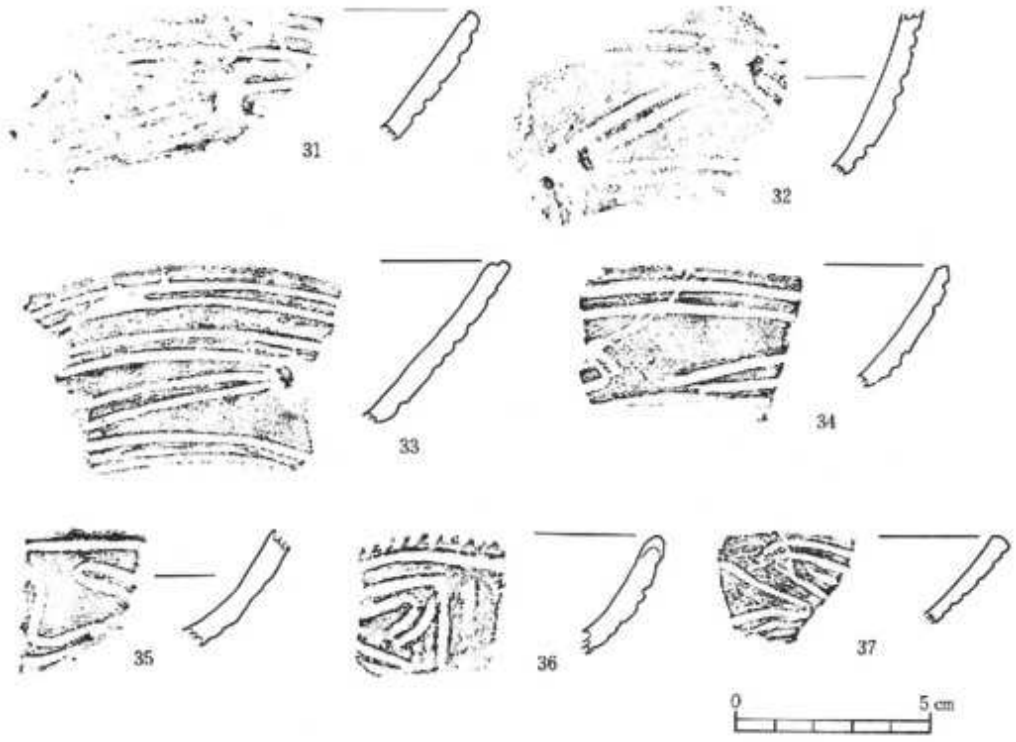
Ⅰ類は第8図6、7、8がある。いずれも地文に縄文を施し、さらに数条の半行沈線文を施す。特に6は変形工字文になるものと考えられる。

Ⅱ類は第8図9で、地文に縄文を施し、さらに沈線文が加わる。モチーフは変形工字文になるものかどうか判断できない。

Ⅲ類には第8図10がある。小型の深鉢で、頸部には二条の沈線文が施され、以下、体部は縄文（LR）となる。11も比較的小型深鉢ではないかと考えられる。三条の沈線文が施され、沈線部分には丹彩が認められる。



第10図　弥生土器（3）



第11図　弥生土器（4）

壺（第9図12～16）

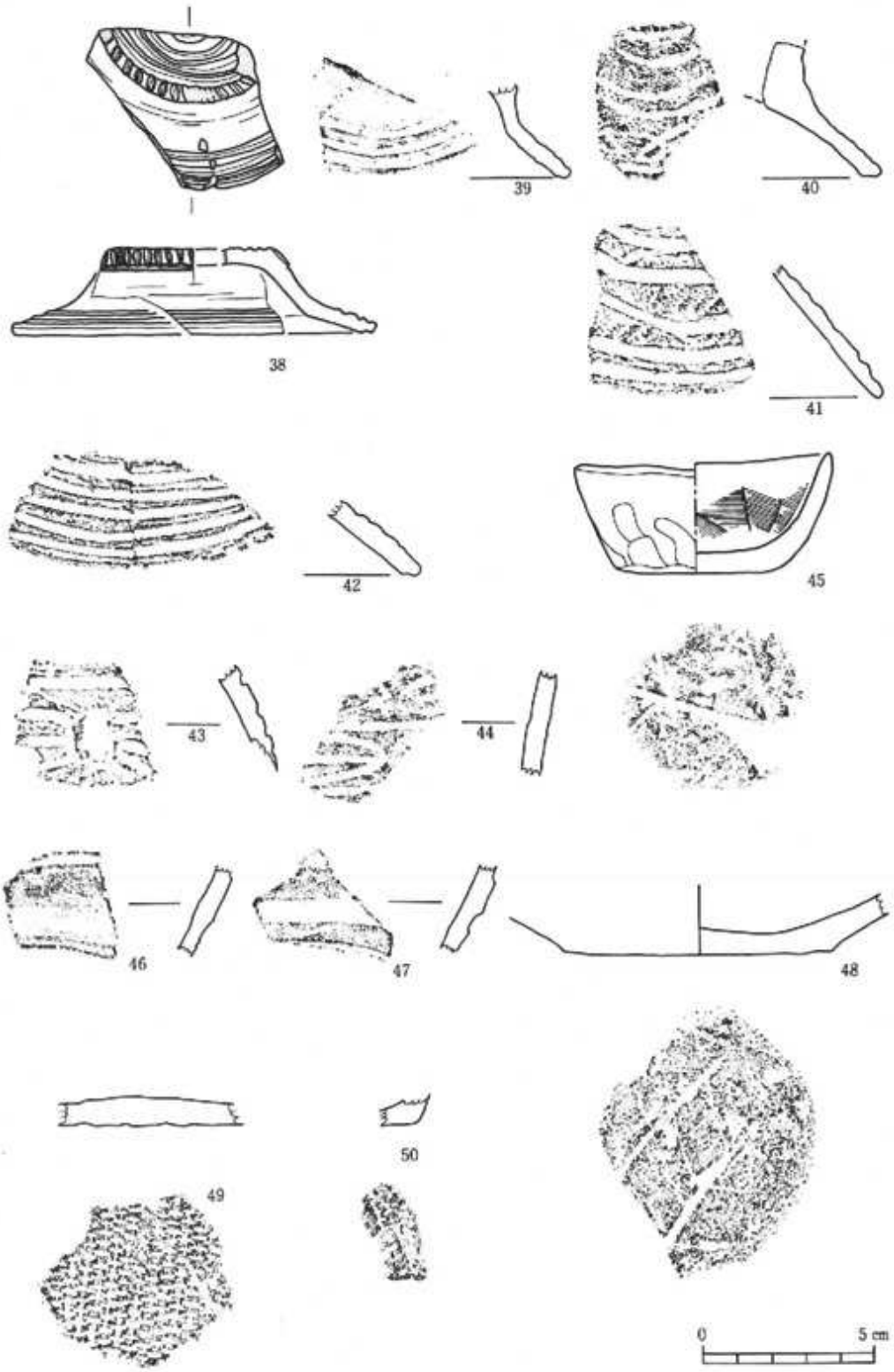
本遺跡では全体の器形を推定できるものはない。わずかに第9図12、13、14が口縁部無文で、ゆるく外反しながら立ち上がる。口唇部は肥厚し、断面が三角形となる。また、口唇部には、おそらく4ヶ所に刻みがつくものと考えられる。この3個体は、山王Ⅲ層出土土器の下層出土土器の中に類例を見出し得る（須藤：1983）。特に12、13は口唇部に浅い沈線が認められ、山王Ⅲ層（下層）例より古い要素ではないかと考えられる。

第9図15は磨消縄文手法による垂下文が施されている。第9図16は平行沈線による曲線文様間に刺突文を充填している。刺突文そのものは縄文晩期の系統を引くものであろう。

高坏（第10図17～30）

高坏は器形を分類できるほどの資料がないが、体部がゆるく内弯しながら立ち上がり、口縁部でさらに強く内弯するものが多く（24、25）、さらに強く内傾するもの（17）がある。口縁部に山形突起もつもの（18、19、20、21、22）があり、突起部分は外傾する。わずかに体部上半が外傾しながら口縁部に至ると考えられるもの（26）がある。これら高坏は、体部に変形工字文が展開するものと考えられるが、全体を知るものがほとんどなく、わずかに17、24が青木畑遺跡の高坏にみられる変形工字文a_2に共通するものと考えられる。

高坏の脚部は27～30が主要なものである。16は粘土粒をもつ変形工字文で加飾され、宮城県



第12図　弥生土器（5）

表1　弥生土器属性表

No	出土区	遺構名	層位	器種	文様 施文	文様 施文様	内面調整	備考
1	2－C	45 M	2層	甕	縄文 LR		ミガキ	
2	2－B	〃	〃	〃	〃		〃	外面に炭化物付着
3	3－D	44M＋47M	3層	〃	〃 LR		〃	〃
4	2－B	45 M	1層	〃	〃 RL？	頸部沈線文	〃	沈線は2条
5	1－B	47 M	3層	深鉢	〃 LR	平行沈線文	〃	工字文か？
6	1－C	〃	2層	〃	〃 LR？	〃	〃	口縁部に沈線
7	2－C	〃	1層	〃？	〃 LR	〃	〃	鉢か
8	表土			〃	〃 LR	沈線文	〃	工字文か？
9	2－C	45 M	1層	〃	〃 LR	頸部沈線文	〃	小型、沈線は2条
10	2・3 D	23住居	壁土	〃		平行沈線文	〃	小型、片塗
11	3－C・D	44 M	1層	甕	粗いミガキ	口縁部沈線文	〃	口縁部肥厚
12	1 B	47 M	2層	〃	〃	〃	〃	〃
13	2－B	45 M	1層	〃	〃？		ナデ	〃
14	3－D	23住＋46M	埋土	〃	縄文RL？	垂下文	〃	磨消縄文手法
15	3－D	23 住	〃	〃		曲線文＋刺突文	ミガキ	片塗
16	1－B・2－C	23住＋45M＋47M	〃	高杯		変形工字文	〃	粘土粒
17	2－B	45 M	1層	〃		平行沈線文	〃	山形突起
18	2－C	47 M	〃	〃		沈線文	〃	〃
19	3 D	44 M	3層	〃				〃
20	4－C・D	47 M	2層	〃		平行沈線文	〃	〃
21	3－C	23土壙	1層	〃	ミガキ	沈線文	〃	〃
22	2－B	45 M	1層	〃		平行沈線文	〃	
23	2－E	22 住	埋土	〃		変形工字文	〃	粘土粒
24	2－B	45 M	2層	〃		平行沈線文	〃	片塗
25	2－C	44 M	2層	〃		〃	〃	
26	3 C	45 M	埋土	〃	ミガキ	変形工字文	〃	脚部、粘土粒
27	1－B	〃	〃	〃	〃	波状文	〃	脚部
28	3 C	〃	〃	〃	〃？	〃	〃	〃
29	1－A・B	47 M	〃	〃		〃	〃	〃
30	2－B	45M(B)	3層	鉢		変形工字文	〃	粘土粒 片塗
31	不明	45 M	2層	〃		〃	〃	〃 〃
32	2・3－D	26土壙	埋土	〃		〃	〃	〃 〃
33	3 C	47 M	2層	〃		斜位「つ」字沈線	〃	片塗
34	3－B	23土壙	3層	〃		横位「C」字沈線	ケズリ	
35	〃	〃	〃	〃		垂下文？	ミガキ	口縁部刻み目
36	2・3・D	26土壙	埋土	〃		曲線文	〃	
37	2－C	44 M	1層	甕	ナデ	平行沈線文	ミガキ	頂上部沈線文＋刻み目
38	1 B	47 M	3層	〃		〃	〃	頂上部沈線文
39	1－C	〃	1層	〃		平行沈線＋曲線	〃	
40	3 C	〃	〃	〃		平行沈線文	〃	
41	表採			〃	縄文 LR	平行沈線＋波状文	ナデ？	
42	？	22 住	1層	不明	縄文	変形工字文	ミガキ	粘土粒
43	1－B	47 M	3層	〃		〃 ？	ナデ	小型深鉢か？
44	3－C	45 M	埋土	〃		同線文	ミガキ	片塗
45	2・3－D	26土壙	〃	〃		〃	〃	〃
46	1－A	47 M	1層	〃			ナデ	
47	2－D	22 住	埋土	〃			〃	網代痕
48	1 A	47 M	1層	〃			？	〃
49	4 B	攪乱		〃	縄文RL？		ナデ	

岩出山町新田遺跡の高杯と同類であろう。28、29、30は脚部に波状文を施文するグループである。28の波状文は2段認められ、上段が2本、下段が3本単位である。

鉢（第11図31～37）

鉢は器形や文様から、大きく2種類に分類することができる。

Ⅰ類　半縁口縁で、およそ体部から外傾あるいはゆるく内湾しながら立ち上がり、口縁部に至るもの。これらは、いずれも粘土粒をもつ変形工字文で加飾される。

Ⅱ類　半縁口縁で、内湾しながら立ち上がるもの（半球形の椀形に近い器形を呈するものと予想さ

れる)。体部には複雑な曲線文で加飾される。

Ⅰ類には31、32、33が含まれる。粘土粘をもつ変形工字文は青木畑遺跡には少ないようである。この粘土粒は、余分な粘土を寄せたものが多い。34は器形はⅠ類と共通すると考えられるが、文様は変形工字文ではなく、逆「U」字状のモチーフを斜位に施文したものと考えられる。これらは、いずれも沈線部分に丹彩が認められる。

Ⅱ類は35、36、37が含まれる。35は横「C」字状のモチーフをもち、青木畑遺跡の鉢と共通するモチーフである。36は垂下文風のモチーフの中に、曲線文と刺突文を充填している。口唇部には刻目を施す。37はⅡ類の中でも小型のもので、器厚も薄い。文様は沈線による曲線文が複雑に施文されているが、モチーフは把握できない。このⅡ類は鳴沼遺跡の新しい段階の土器群と類似し、また鉢形土器と理解されているが、一応、鉢に含めて分類した。Ⅱ類は宮城県北の青木畑遺跡や山王遺跡にはなく、県南から福島県にかけて分布している。Ⅱ類は鳴沼遺跡などの祖形をなすものであろうか。

蓋（第12図38～42）

本遺跡の蓋は、2種類に分類できる。

Ⅰ類　伏鉢状のもの。

Ⅱ類　高坏状のもの。

Ⅰ類には38、39が含まれる。38は、頂部の平坦面に三条の沈線による同心円文が施され、その周縁には刻目が認められる。口縁部にも三条の沈線文が施文される。他は内外面ともにミガキ調整である。39も、これに類似するものであろう。

Ⅱ類に属するものは40のみである。同心円状の平行沈線文がみられ、口縁部付近には沈線文による曲線文が施文される。

41、42は明確な判断はできないが、おそらくⅠ類に属するものと予想される。いずれも平行沈線文を主要な文様とするが、30は二条の平行沈線間に一条の曲線文が施される。この曲線文は、おそらく波状文か変形工字文となるものであろう。

手捏ね土器（第12図45）

手捏ね土器は、わずか1点である。底面に木葉痕をもつ小型鉢形土器である。内面にはヘラナデが施されている。

その他（器種不明）（第12図43～50）

43は地文に縄文を、さらに変形工字文を施文する。器形は不明であるが、壺になろうか。44は筒状器形になると考えられ、おそらく小型の深鉢が予想される。変形工字文がさらに変形したもので、あまり類例がない。これに類似するものに、青木畑遺跡の工字文c_2があるが、工字文をさらに一条の沈線で区画する点で異なる。

46、47は、従来、弥生時代初期には知られていないものであろう。幅の広い凹線文をもつ土器で、凹部に丹彩が施される。凸部及び内面はミガキ調整である。どのような器形か全く不明である。48は底部外面に木葉痕をもつもので、蓋であろうか。49、50は土器の底部破片で、網代痕をもつ。編方は、縦2本越え1本送り、横2本潜り1本越え、右1本送りである。網代痕をもつ例は、福島県御代田遺跡（中村五郎：1976）にある。

石器

今回出土した石器は、いずれも古墳時代以降の遺構から出土したもので、原位置や層位的保証が得られないものである。しかし、今回の調査区において出土した土器は、弥生初期の土器群であり、他の弥生時代あるいは縄文時代の土器は皆無である。また、古墳時代の住居跡より出土した磨り石や石製品等明らかに弥生時代に限定できないものは除外した。したがって、今回報告する石器群は、弥生時代初期の、しかも単一時期の所産と考えてよいであろう。

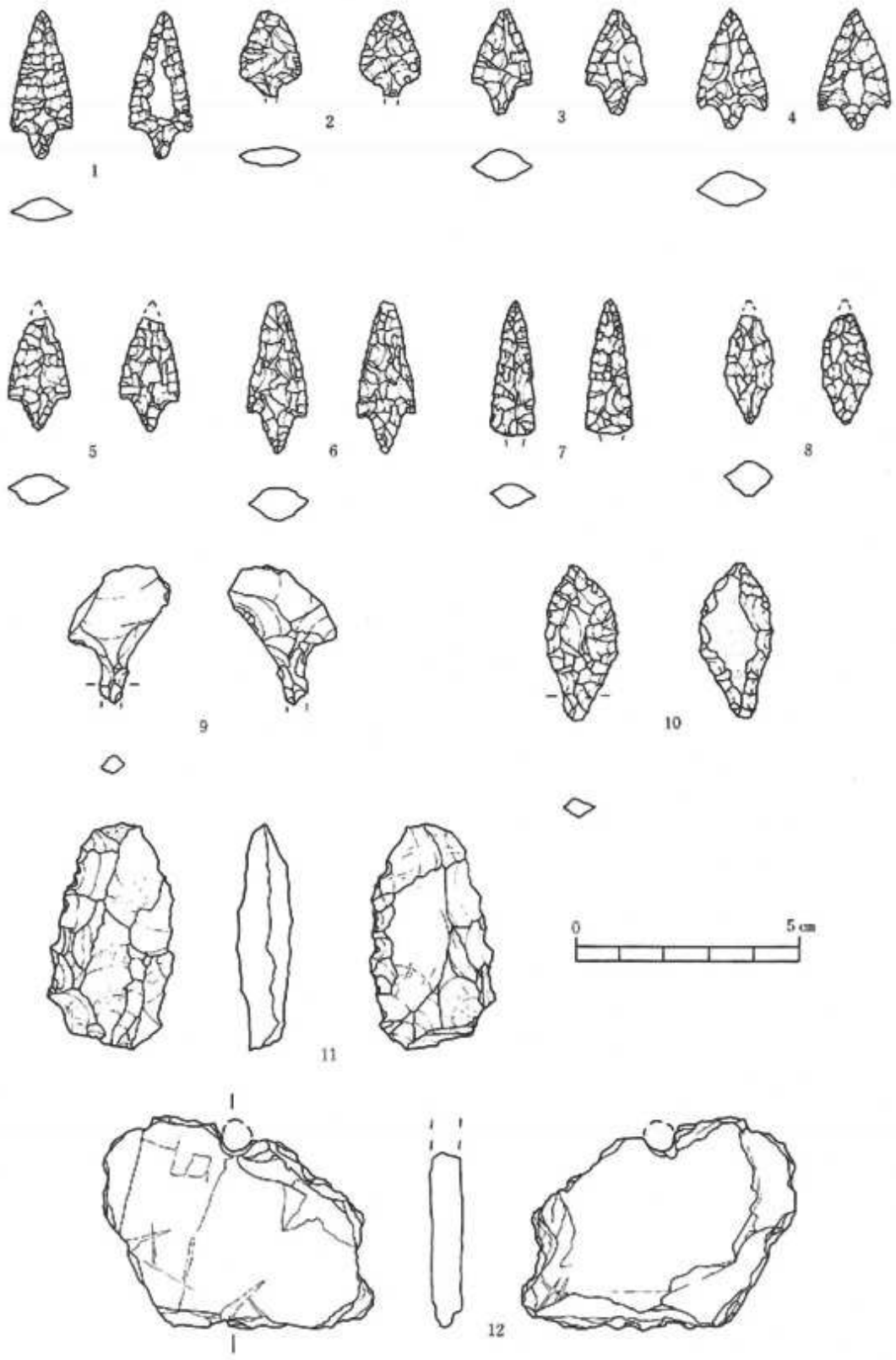
出土した石器は、総数390点で、その内訳は、石鏃11点（未成品3点）、石錐2点、石匙1点、不定形石器1点、二次加工痕をもつ剥片45点、剥片321点、石核8点である。器種別の比率は石鏃2.8％、石錐0.5％、石匙0.3％、不定形石器0.3％、二次加工痕をもつ剥片11.5％、石核2.1％、剥片82.3％になる。このような石器組成は基本的には、縄文時代晩期終末と共通し、伝統を受けついだものと考えられるが質量の激減が著しい。

〔剥離技術〕 礫面を多く残す石核や両端に礫面を残す剥片等の観察から、母岩は大きくてもこぶし大ぐらいの亜角礫、円礫であり、小形のものは3cm前後の楕円形の偏平な円礫を選択している。剥片は、礫面を残すものが多く、母岩から直接得られた剥片や、母岩そのものが石器の素材となっているものが多いと考えられる。このような技術は、大洞A′式の技術の伝統を受けついだものであろう（林：1982）。

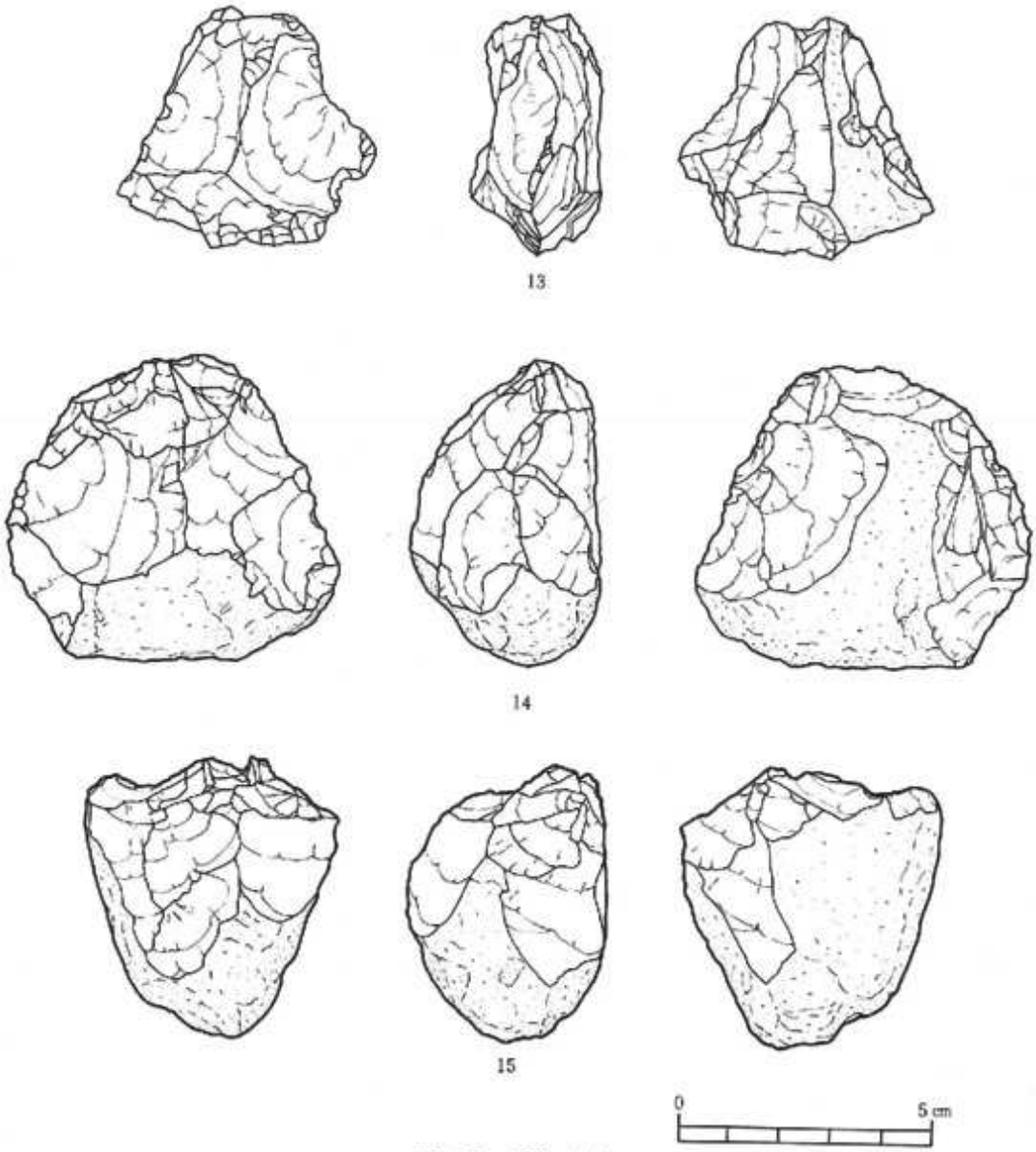
〔石器の材質〕 材質は流紋岩、花崗岩、鉄石英、玄武岩、珪質頁岩、黒曜石等がある。石核8点のうち5点が流紋岩と思われる。剥片の材質との対応関係は希薄ではあるが認められる。しかし石鏃等の完成品との対応関係はほとんど認められない。剥片材質は極めて多種に及ぶようである。中には珪酸分に富む珪化木を素材としたものもある。またわずか4点ではあるが黒曜石を使用したものがあり、交易の問題と関連して注意しておきたい。材質については、専門家の鑑定を受けていないのでこれ以上言及することはさけたい。

石鏃 （第13図1～8、第2表）

本遺跡の石鏃はすべて有茎のものである。基部の形態は変化に富むが、平基のものが多い。青木畑遺跡でみられるような無茎石鏃はない。剥離調整は雑であるが、その中で1と7は比較的ていねいである。また1と4は主剥離面をそのまま残している。2は最も小型で器薄である。今回図示しなかったが、他に未成品と考えられるものが3点ある。



第13図　石　器（1）



第14図　石器（2）

石錐　（第13図9、10、表2）

石錐は2点出土したが、このうち10は石鏃の可能性もある。

石篦　（第13図11、表2）

石篦はわずか1点のみである。先端部に一部自然面を残す。

石包丁　（第13図12、表2）

石包丁は1点のみで、表土から出土したものである。土器群と明確に共伴したかどうか判断できないが、その可能性が強い。スレート（粘板岩）製と思われ、円孔が1ヶ所ある。

表2　弥生時代石器属性表

No	出土区	遺構名・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	破損状況	加工状況	備考
石鏃									
1	1－A	45号溝　1層	3.4	1.4	0.55	1.65		両面	平基有茎
2	1　C	47号溝礫認面	(1.95)	1.35	0.40	(0.95)	基部	〃	凸基有茎
3	2－C	47号溝　2層	2.4	1.35	0.70	1.20		〃	平基有茎
4	2－D	22号住居埋土	2.7	1.55	0.80	1.95		〃	凹基有茎
5	3－C	47号溝　4層	(2.6)	1.40	0.70	(1.60)	先端	〃	平基有茎
6	3－D	23号住居埋土	3.45	1.30	0.75	2.15		〃	〃
7	3－D	〃　〃	(3.1)	0.80	0.45	(0.9)	基部	〃	凸基有茎
8	2－C・D	44号溝埋2層	(2.45)	1.1	0.80	(1.60)	先端	〃	尖基
石錐									
9	1－C	47号溝　2層	(3.15)	2.45		(2.70)	刃部	刃部両面基体部表面	刃部断面は四角形
10	表採		3.5	1.60		3.25		両面	石鏃？
石箆									
11	3　D	46号溝　2層	5.10	2.90	1.25	14.80		両面	先端部に自然面を残こす
石包丁									
12	表採	表土	(6.1)	(4.8)	0.7	(28.5)	周囲全体	両面	円孔1ヶ所　研磨なし
石核									
13	1－C	47号溝　1層	4.8	5.05	2.60	40.25			
14	2　C	45号溝　3層	6.0	6.55	3.80	134.65			礫器？
15		所属不明	5.55	5.0	3.95	103.75			〃

石核　（第14図13～15、表2）

これらは、いずれも流紋岩と考えられる石核である。13の一部には調整痕が認められるが、いずれもほとんど剥離面側縁に加工痕等をもたない。14、15は礫器と区別がつきにくい。この他に図示しなかったが、不定形石器と考えられるもの1点、また石匙の未成品の可能性のある剥片などがある。

南小泉遺跡出土の弥生時代初期の土器について

今回の調査で出土した弥生土器は、先にも述べたように遺構が検出されず、また層位的にも明確にできたものはない。これらは、いずれも古墳時代～中世にかけての遺構から検出されたものである。しかし、表土中のものも含めて弥生時代の他の時期や縄文時代の遺物が含まれていないことが明らかであり、したがって、ほぼ単一時期の所産になるものと考えてよいであろう。今回出土した土器群は総数910点である。いずれも、後世の遺構によって細片となったものばかりである。したがって、器種の認定には限界がある。観察の結果では、甕、深鉢、壺、高坏、鉢、蓋、小型手捏ね土器で構成される。客観的データは示さないが、高坏、鉢が優勢であって他の器種は少ない。

甕、深鉢

4の頸部にみられる沈線は、青木畑遺跡深鉢c類と共通するが、山王Ⅲ層土器群には、深鉢の頸部に沈線文の例があるが、甕には存在しないようである。Ⅱ類とした甕でも頸部に沈線をもつものは、山王Ⅲ層出土土器群より古い要素とみてよいであろう。甕は青木畑遺跡深鉢形土器c類に類似し、特にⅡ類は、肩部の張りが強くなる山王Ⅲ層出土甕の祖形をなすものかもしれない。深鉢はⅢ類とした沈線文もつものが青木畑、山王Ⅲ層と共通するが、Ⅰ、Ⅱ類は先の2遺

跡にはない要素である。Ⅱ類としたものは、器種の認定になお疑問を残すが、Ⅰ、Ⅱ類はともに加飾に富み、鰉沼遺跡（角田市）や薬師堂遺跡（白石市）さらに福島県一人子遺跡などと類似するものであろう。ところで、Ⅰ類としたもののうち第8図8は、岩手県谷起島遺跡A地点出土の大型の鉢と類似する。この谷起島の鉢及びその一括資料を佐藤信行氏は青木畑例に併行するものであろうと指摘している（佐藤信行：1980）。

壺

本遺跡の出土例で最も特徴となるものは、第9図12～14の口唇部の断面形が三角形を呈する壺である。これに類似するものは、先にも記したように、山王遺跡Ⅲ層のうち、下層出土土器群に存在する。すなわち、山王Ⅲ層でも古い特徴と理解されよう。本遺跡例は、さらに口唇部に浅い沈線を周せるものがあり、これはさらに古い特徴と理解しておきたい。15は磨消縄文手法によるもので「王字文」あるいは「垂下文」に相当する文様であろう。この文様は山王遺跡では、盛行しているようであるが、青木畑にはみられない。この種の文様が山王Ⅲ層段階から出現するものなのか、青木畑段階まで系統がさかのぼるものなのか、疑問が生じたといえよう。

高坏

本遺跡では、明確に「変形工字文C型」（須藤隆：1976）と理解できるものがない。第10図17、24は「変形工字文A型」（須藤隆：1976）であろう。坏部は半縁と山形の2種類がある。19や20は青木畑や新山と共通する特徴である。22は、山形の突起部分にも文様をもつ例である。脚部の特徴は、27のように新田と共通する変形工字文をもつ例が存在し、波状文は2～3本を単位としている。

鉢

鉢はⅠ類（変形工字文A型、青木畑遺跡工字文aと共通あるいは類似するもの）が主流を占めるようであるが、Ⅱ類の存在が問題となろう。Ⅱ類は、山王、青木畑にはみられず、鰉沼で最も典型的に現われる器形である。半球形の器形であるという見方が正しいとすれば、須藤氏が指摘した山王Ⅲ層より新しい時期の土器という見解に疑問が生じよう（須藤：1983）。地域差として止揚できるか、もう少し類例の発見を待ちたい。少なくとも、このⅡ類としたものだけを新しい時期に比定することにはむりがある。

蓋

蓋は第12図38が最も特徴的で、加飾に富むものばかり、縄文だけのものは出土していない。縄文時代晩期には存在しないようで、弥生時代を特徴づける土器の一つと言えよう。

その他器形の不明なものについては充分に言及できない。

編年的位置

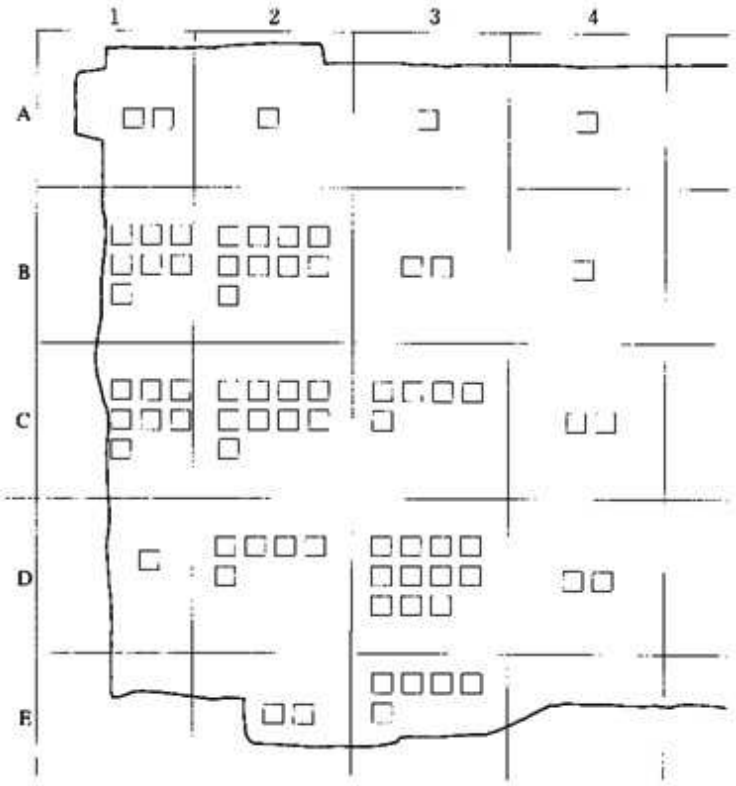
今回出土した弥生土器は、甕と深鉢について充分な分析ができなかったが、蓋の存在から弥生時代の土器とすることができる。また、高坏や鉢などには「変形工字文A型」青木畑工字文aが存在し「変形工字文C型」は確認できない。青木畑や新田にみられる山形突起と頂部に円盤状の突起の組み合せをもつ高坏と共通する破片資料が存在する。

こうした特徴から山王遺跡Ⅲ層出土土器群よりも古い時期と考えられ、青木畑遺跡出土土器群とほぼ同時期に比定されよう。しかし青木畑遺跡の内容と異なる点もいくつか存在している。例えば深鉢1、Ⅱ類や鉢Ⅱ類の存在は、青木畑遺跡とは異なる。むしろ宮城県南部から福島県北部と類似点を見い出し得る。この地域の祖形をなすものと考えたい。須藤氏は、山王Ⅲ層出土土器の分布圏の南限を南小泉、鰹沼に求めているが、その前の時期においても、やはり同様の分布圏を示すと考えてよいであろう。

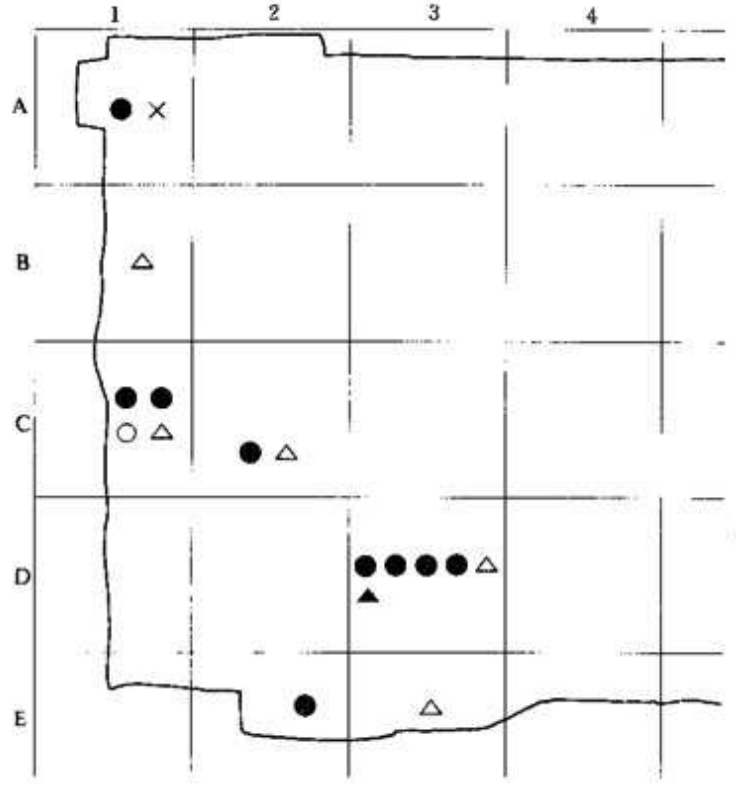
ところで弥生時代の初期に位置付けられている型式は、宮城県内では古くは「福浦島下層式」が、近年では「大泉式」が設定され、一般普及している。しかし「大泉式」は複数の型式を含むものとして研究者の間では認識されている。最近、山王遺跡を精力的に研究されている須藤氏によって「山王Ⅲ層式」が提示された（須藤：1983）。合せて青木畑遺跡出土土器群を「青木畑式」と認めることができるとしている。また、これより先に、佐藤信行氏も、青木畑遺跡資料を福浦島下層式の概念に近いものとして一型式認めている（佐藤：1981）。この点について、当の青木畑遺跡の報文（加藤道男：1982）では、「大泉式には、少なくとも二段階の土器群の変遷が存在」し、その初期に位置付けられると慎重な態度で、型式の認定までには至っていない。

青木畑遺跡と同時期の他の遺跡資料も十分ではなく、青木畑資料だけで「青木畑式」なる型式内容の全てを抱括しうるものか類例を待ちたい。

本遺跡資料は破片資料であり、量も少なく、そして何よりも層位的裏付けや遺構が確認できない点で一定の限定があることは否めない。したがって、こうした問題に十分な検討を加えることができない。ここでは、南小泉遺跡が弥生時代の初期に形成されたことを認識し、その時期が青木畑遺跡出土土器群とほぼ並行関係に位置付けられると理解したい。ただ、青木畑遺跡の内容とほぼ共通するが、さらに東北地方南部の要素もわずかに認められる点が特徴と言えよう。

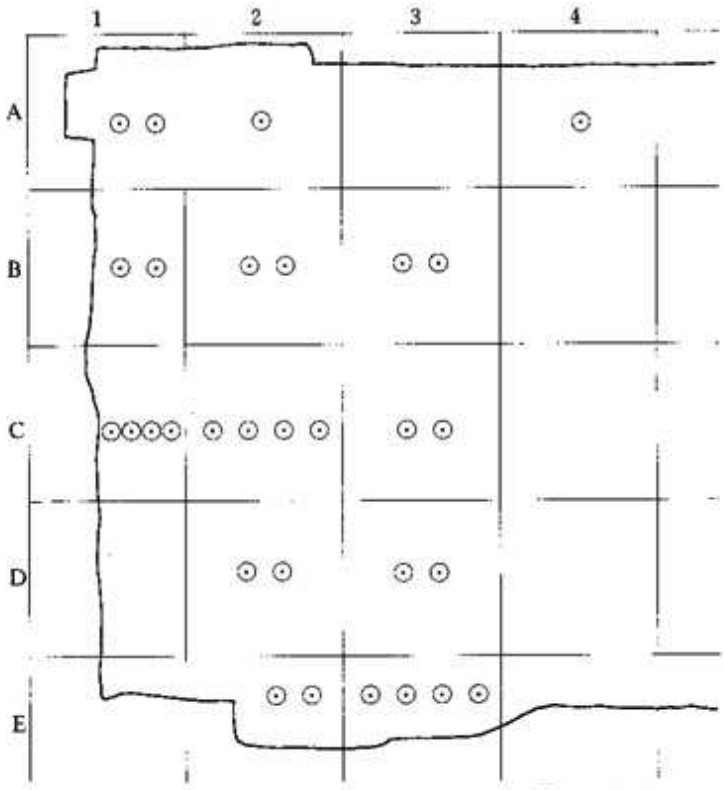


◀ 第15図　弥生土器片
グリット別出土集計



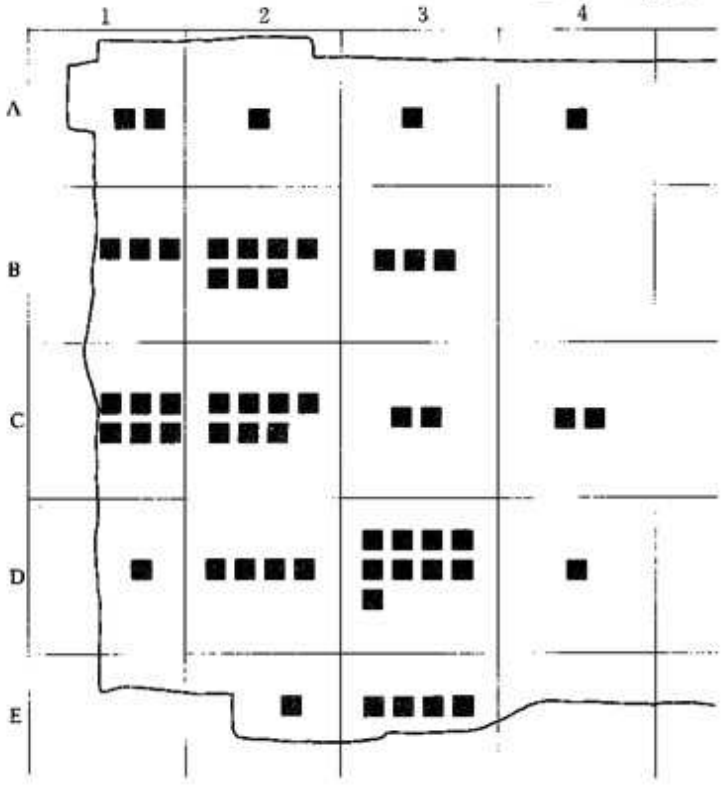
◀ 第16図　石器グリット別
出土集計

第17図
調整痕のある剝片
グリット別出土集計



■ 1コが5個まで

第18図
フレーク・チップ
グリット別出土集計



2）古墳時代の遺構、遺物

58年度調査で発見された古墳時代の遺構は、第21、22、23、24、25号住居跡、第46号溝、第19、21、22、24、25号土壙である。以下、各遺構とその出土遺物の年代観について説明する。

第21号住居跡（第19、20図）

3－A区と一部2－A区にまたがって発見されたが、半分は調査区西側外になり全体が把握できなかった。調査区内でもレベル的に若干高い位置にあり、天地がえし等の耕作により削平が著しいうえ、埋土も地山と区別つきがたく、範囲確認がむずかしい遺構であった。

古墳時代の遺構では、21、22号土壙に切られている。南辺と東辺の過半がわかるが、南東コーナーが前述の21、22号土壙に切られており、よってその規模も、南辺で約3.60m、東辺で3.10m以上としか測れない。検出面から床面までの深さは2から17.5cmと、検出面の状況により、まちまちである。南壁に沿って、上幅20～40cm、床からの深さも4～8cmの溝があるが、東壁の方へは巡っていない。

住居跡の方位を南辺で測れば、N－64°－Eとなっている。

床面中央付近には炭が集中しており、その中に土師器の甕の半分がつぶされて出土した。その下にはピットが検出された。また、その炭の範囲を囲うように、小ピットが4コほど発見された。カマドの存在は不明である。

堆積土をみると、ほぼ褐色のシルトか粘質シルトであり、炭化物を含んでいる。

出土遺物で図示できたものは20図－1の土師器高坏の坏部と前述した2の甕である。

高坏は検出面で出土し口径16.5cm、坏部下方にかるく段を持ち、口縁部外反するものである。調整は内外面もヨコナデされており、坏部の段より下方に指頭圧痕が残るものである。

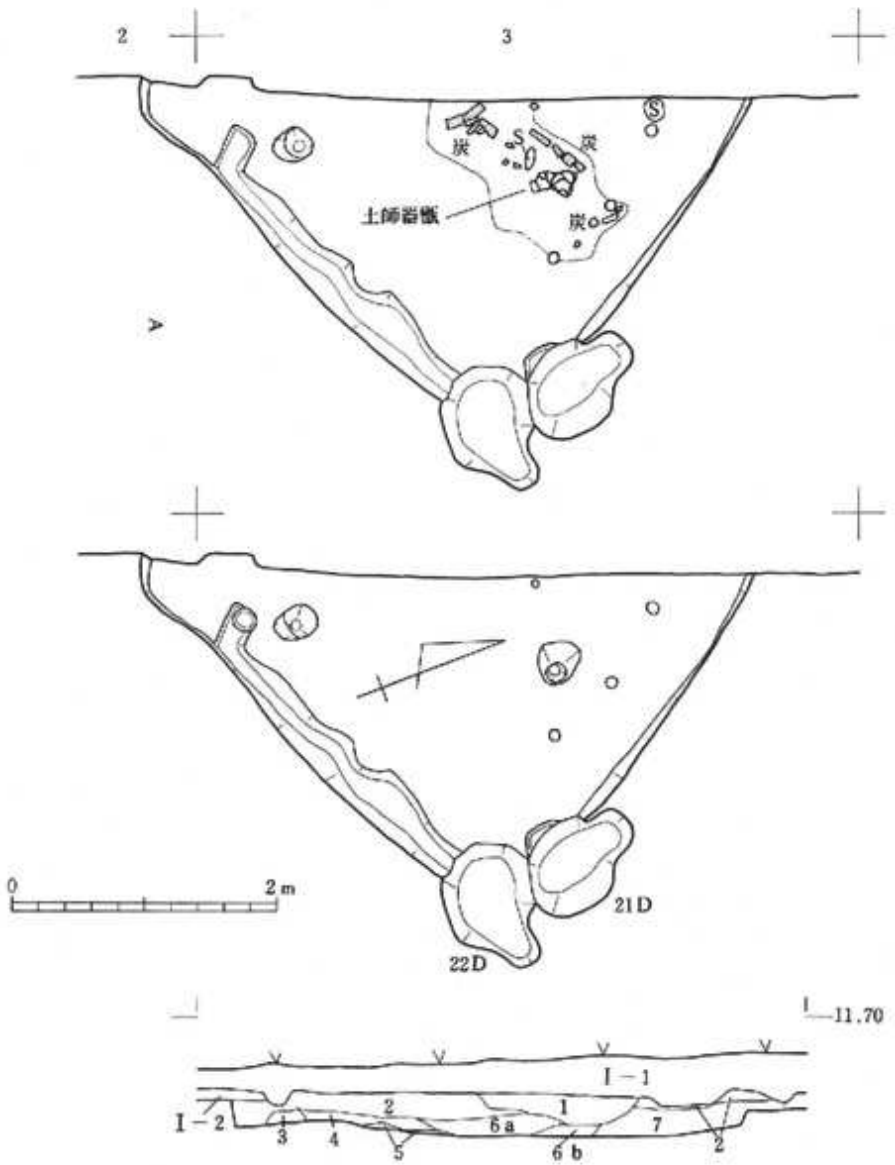
甕は口径推定25.5cm、器高25cm、底径7.9cmの単孔のものである。外面は、口縁部がヨコナデされ、体部には全面的に縦のヘラケズリが細かくなされている。内面は口縁部がヨコナデ、体部上半が横方向へのヘラナデであるが、下半は不明である。

その他は土師器の坩と壺の小片2点だけしか出土していない。

前述したとおり、高坏の坏部と、甕だけしか年代を判断する資料がない。この2点の資料は東北地方南半の土師器の形状及び調整と考えられず、おそらく関東系の土器と思われる。

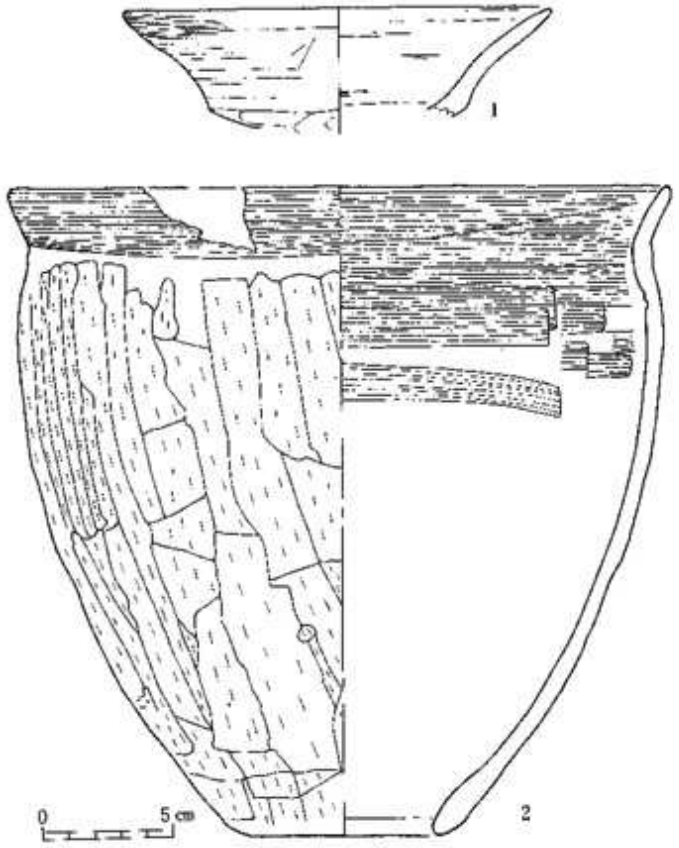
まず高坏坏部は、内外面ともヘラナデが見られ、稜をもつものである。これは関東でいえば鬼高Ⅰ式の系統を持つものと言える。また甕は鬼高Ⅰ式の場合はほとんどが複合口縁を呈するようであるが、ここから出土した甕はそうではなく、また、体部もふくらみが少なくなったと言えるが、長胴というほどではない。調整、形状から鬼高Ⅱ式に該当できそうである。

21号住居跡の年代であるが、小片ではあるが小形の坩片があることなども考え合せると、鬼高Ⅰ式から鬼高Ⅱ式にへの変遷期と見られ、6世紀中葉と考えられる。



層	土色	土性	備考
1	明黄褐色(10YR5/6)	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む
3	褐色(10YR5/4)	粘質シルト	しまりあり
4	褐色(10YR5/4)	粘質シルト	しまりあり、炭化物含む
5	明黄褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり
6a	褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり、炭化物混入
6b	褐色(10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり、炭、焼土混入
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘質シルト	しまりあり

第19図　第21号住居跡平・断面図



◀第20図
第21号住居跡出土遺物

	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	土師器	高杯	埋土1層	ナデ、杯部上方に指圧痕	ナデ(ヨコ)	16.5	—	—	
2	土師器	甕	床面	口縁ナデ体部ヘラ削り	ヘラナデ	25.5	7.9	25	

第22号住居跡（第21～23図）

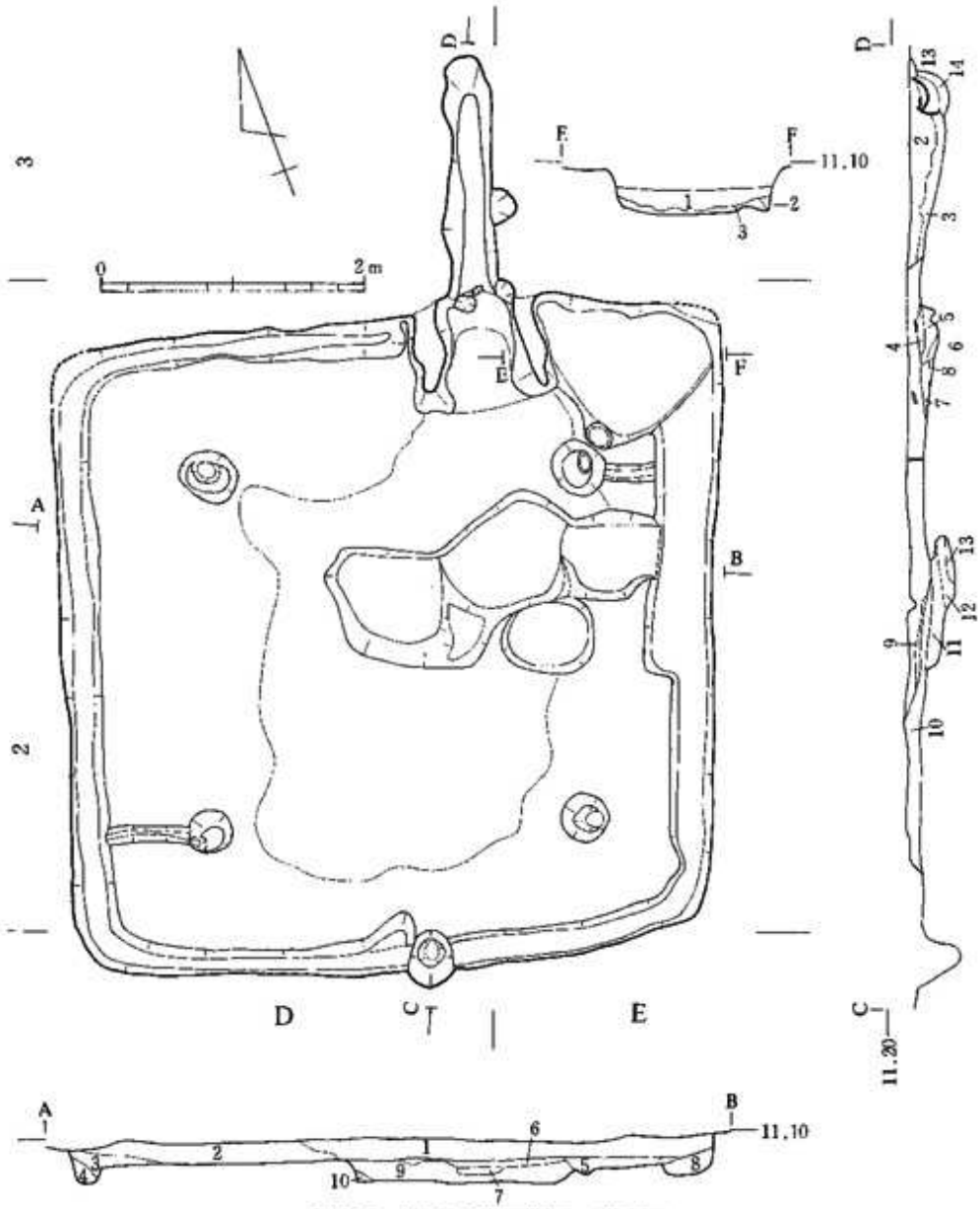
2－D、E区が中心で、一部1－D、E、3－D区にかかる。古墳時代の遺構では46号溝を切っている。

南北約4.90m、東西約5.50mの長方形プランを呈し、長さ約2.00mのカマドが北辺中央よりやや東寄りに取り付いている。カマドの袖は造り付けである。カマドを通る主軸方向はN　20°－Eである。四壁に沿って溝がまわり、約2.80mの間隔の柱穴が4コ配されている。カマド右袖と北東角の間には、床面からの深さ約20cmの浅い貯蔵穴が施設されてある。

カマド焚口付近から柱穴で囲まれる床面中央部には粘土の貼床が残っている。この貼床の下には、不整形な浅い土壙が四つ、1箇所にかたまるような状況で検出された。

また、南西に位置する柱穴から西側周溝へ、北東の柱穴から東側周溝へ溝が切られており、間仕切りとしての機能を有していたものと見られる。

堆積土は、カマド及び焚口付近は炭と焼土を多量に含むため暗褐色シルトであり、他は褐色



第21図　第22号住居跡平・断面図

A～B

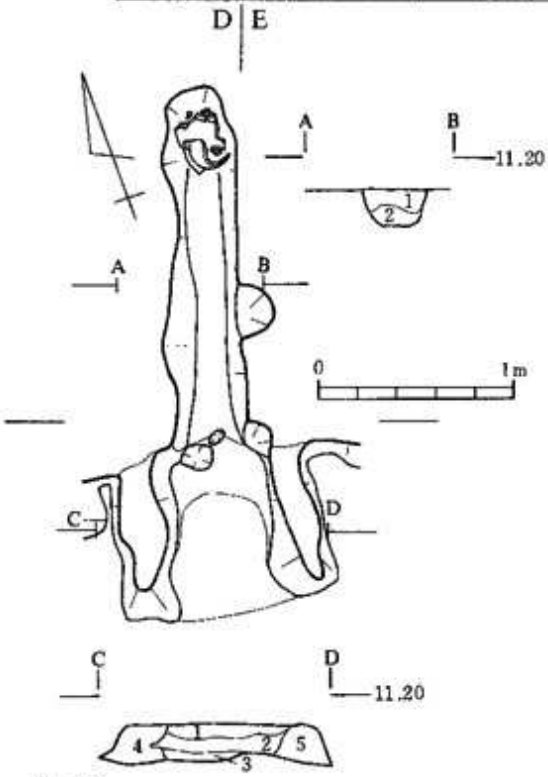
層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物、土器片含む
2	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む
3	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、黄褐色土縞状に含む
4	褐色(10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物、土師器片含む
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土、炭化物含む、黄褐色土斑状に含む
6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、褐色土縞状に含む
7	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土、炭化物含む、黄褐色土斑状に含む
8	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土、炭化物含む、にぶい黄褐色土斑状に含む
9	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土、炭化物含む、にぶい黄褐色土斑状に含む
10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	酸化鉄含む

C～D

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物,焼土,土器片含む,褐色土縞状に含む
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物,焼土,土器片含む,黄褐色土斑点状に含む
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物,焼土含む,黄褐色土縞状に含む
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物,焼土含む,褐色土斑状に含む
5	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物、焼土含む
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物、焼土含む
7	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物、焼土含む
8	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	炭化物、焼土含む
9	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物、酸化鉄含む
10	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物、酸化鉄含む
11	褐色(10YR5/6)	砂質シルト	炭化物、焼土含む
12	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物、焼土含む
13	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物、焼土含む
14	褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物,焼土含む,黄褐色土斑状に含む

E～F

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物、焼土含む
2	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物含む
3	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物含む



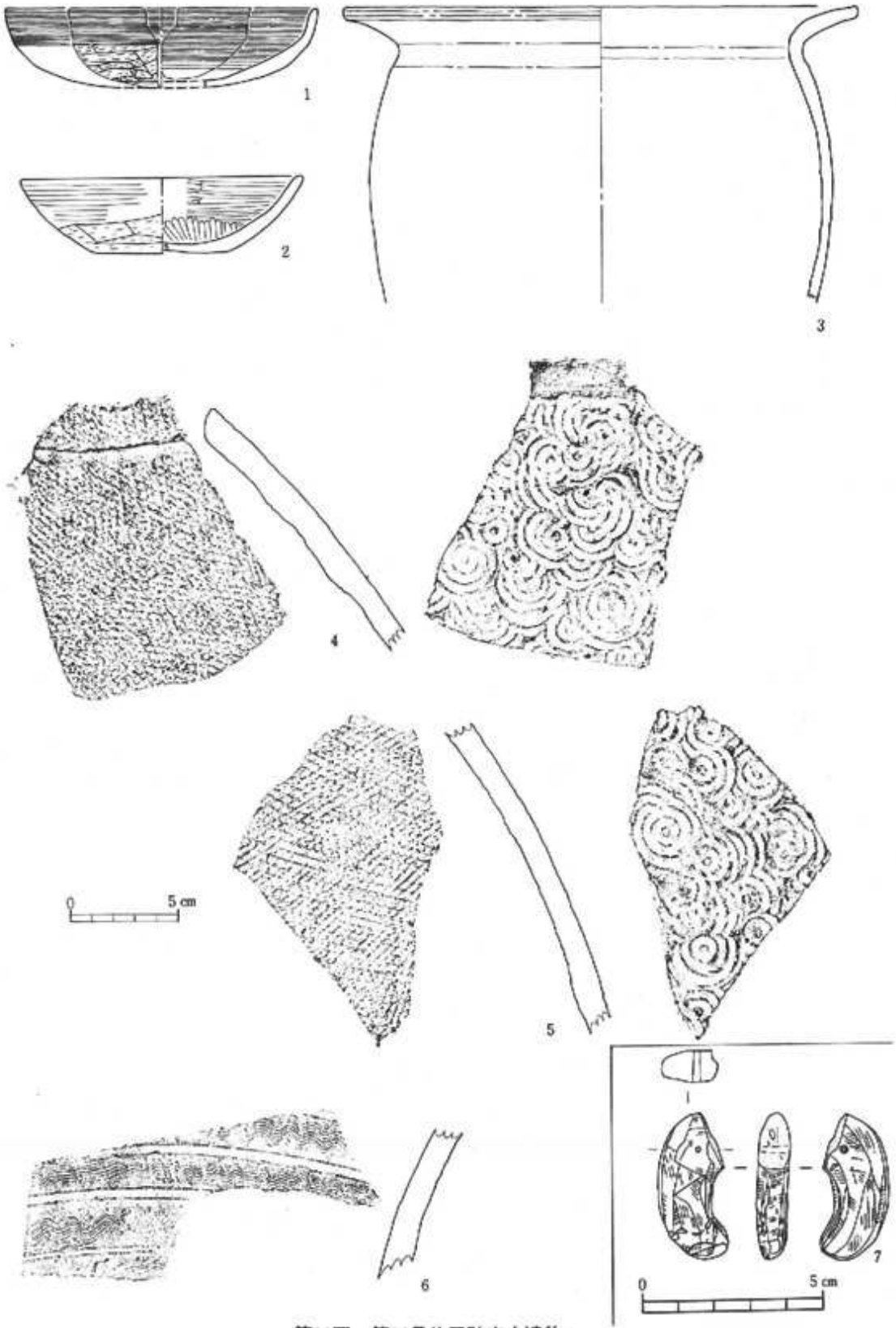
◀第22図　第22号住居跡カマド実測図

A～B

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物、焼土、土器片含む、黄褐色土斑点状に含む
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物、焼土含む、黄褐色土縞状に含む

C～D

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物、酸化鉄、土器片含む
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土、炭化物含む
3	褐色(7.5YR4/4)	シルト	焼土、炭化物含む
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	焼土、炭化物含む、褐色土縞状に含む
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	焼土、炭化物含む、褐色土縞状に含む



第23図　第22号住居跡出土遺物

図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
23－1	土師器	坏	埋1	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り	横ナデ	14.6		3.7	関東系 煙道
23－2	土師器	坏	埋1	上半ミガキ、下半ヘラ削り底面ヘラ削り	ミガキ	13.0	6.1	3.5	関東系、白色針状物質含む
23－3	土師器	甕	埋1	ナデ	ナデ	24.0			煙出し
23－4	須恵器	甕	埋1	格子タタキ	青海波文				
23－5	須恵器	甕	埋1	格子タタキ	青海波文				
23－6	須恵器	甕	埋1	ナデのち櫛描波状文	ナデ				
23－7	石製品	勾玉	埋1						

ないし黄褐色シルトで、炭化物及び焼土を含んでいる。カマド煙出し部には、土師器甕がつぶれて、一括出土した。また焚口部2層から焼けた鳥の骨数片が出土している。キジかヤマドリの焼骨遠位端が含まれている。

出土遺物には滑石製勾玉（23図－7）、土師器坏（23図－1、2）、土師器甕（23図－3）、須恵器甕片（23図4～6）がある。土師器は全てロクロ未使用のものである。23図－1の坏は、体部上半にかるく段を持ち外面はその段より上部がヨコナデ、下部がヘラケズリされている。内面、全体的にヨコナデされているのが特徴である。丸底であると思われる。

23図－2の坏は、やはり、体部上半に、ほんのかるい段を有し、外面は、その段より上部がヨコナデ後、横方向のミガキ、下部から底面がヘラケズリされている。内面は上半が横方向のヘラミガキ、下半が縦方向のヘラミガキ調整されている。胎土には、白色の針状物質が多く含まれている。

この他図示できなかった土師器坏には、体部下方にかるく段を持ち、内面が黒色処理され、底部が平底風の丸底を呈するものがある。器面保存はあまり良くないが、外面上半がヨコナデ、下半がヘラケズリ、内面はヘラミガキされていることがわかる。この坏は国分寺下層式Ⅰ類に該当するものと思われる。

これに類似する破片はもう1点あり、白色針状物質を含む。この他に坏小片で紅彩されたものも認められる。

須恵器は甕片で特徴を見ると、体部外面は格子タタキ目、内面は青海波文を有するものであり、頸部には、太く、浅い沈線に区画されたところに櫛描波状文を配するものである。

前述したとおり、東北南半土師器で言えば国分寺下層式第1類に分類される土師器を含む。また坏には図示したような、関東系のものを含むようである。それらは、外面がヨコナデとヘラケズリ、内面がミガキされているものとヨコナデのみのものがあり、23図－2の坏のように平底を呈するものもあることから、鬼高Ⅲ式ないし真間Ⅰ式に分類されるものとが混在すると思われる。

23図－3の土師器甕は口縁部に最大径をもつ、内外面ナデ調整されているものである。

須恵器甕も格子タタキ目、青海波文、櫛描波状文をもつ。8世紀中葉ごろと思われる須恵器の盤状の坏が近くでは仙台市南中前窯跡（渡辺：1973　P28、29、P72、P79~82）から出土しているが、当遺構にはそれに類似する破片の混入がないことなども総合的に判断すると、7世紀末~8世紀初頭の年代が考えられる。

第23号住居跡（第24、25図）

残存部は、2、3－D区に位置している。第44号溝、46号溝に切られており、住居跡カマドの右袖と北東角及び南西角を結ぶ部分を残すだけである。相対する2コーナーから住居跡の規模を推定すると東西約4.35m、南北約4.00m、カマドが北壁に取り付くから、主軸の方向は南北になり、ほぼN－10°－Eと推定される。

カマドは前述したように北壁に付き、右袖と焚口部を残すだけであり、袖は造り付けである。住居跡にともなうピットは、右袖端南東約40cmのところに1個発見された。そこからは土師器の甕の底部がピットにささるような状況でつぶれて出土した。その他遺物の出土箇所を見ると、右袖右側に多く、焚口部にも支脚が検出された。

堆積土をみると、炭化物、焼土を含む暗褐色シルトがレンズ状に堆積しており、壁付近には、褐色シルトが斜めに堆積している。

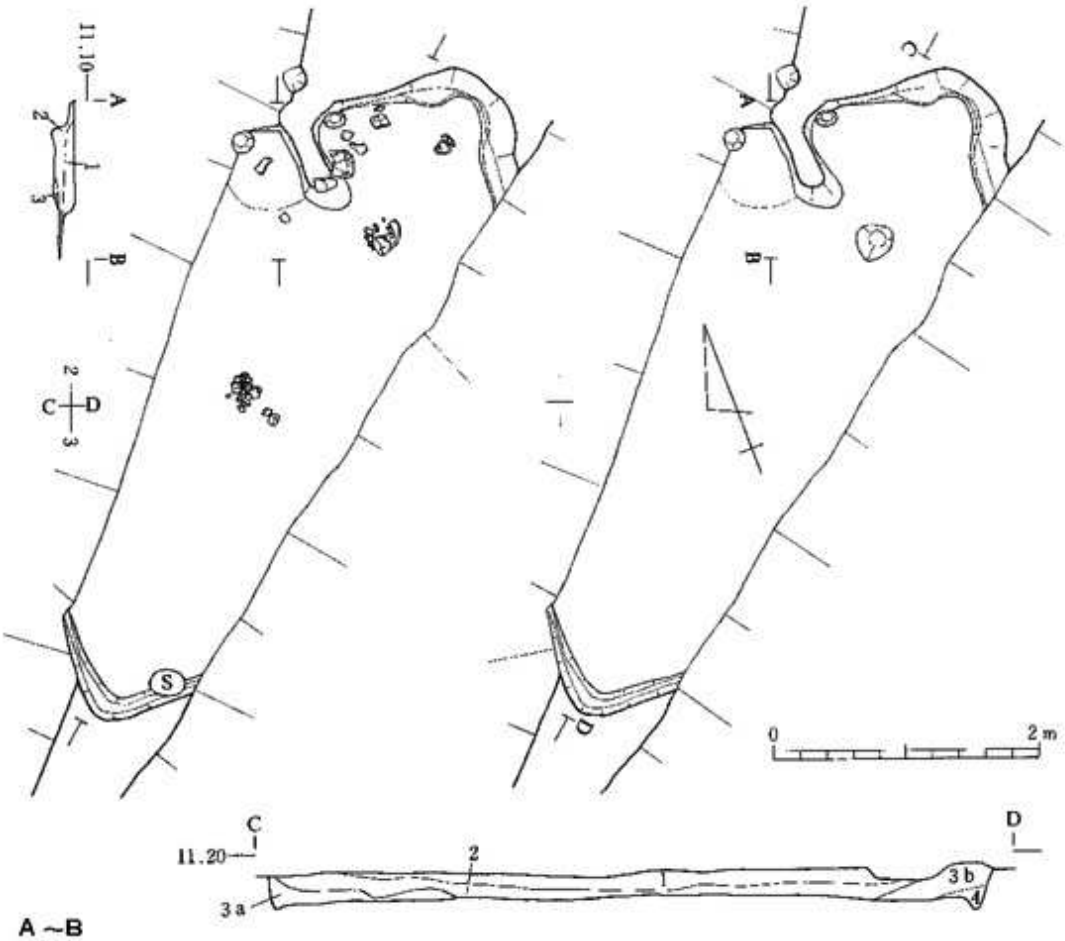
出土遺物は非ロクロの土師器が全部である。その他、支脚、平行タタキ目痕のある須恵器甕片が若干ある。

土師器は甕が多く、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ヘラナデのものが多い。また底部は木葉痕のものである。長胴形ではなく小形で体部がやや丸くなるものである（25図1、2）。

また25図－6の土師器の甕は体部中央から上下に分けられるように、かるく稜になる部分があり、下部は急に細くなる。外面は口縁部がヨコナデ、体部上半が上から下へのヘラケズリのちヘラナデ、下半が下から上方向へのヘラケズリがなされており、その手順は下半から上半へとなっている。内面はヨコナデされており、特に上下接合部は強く横ヘナデられている。その後上半が太目のヘラミガキが縦方向になされている。これは上下別々に作られ、接合されたものである。

その他、図示できなかったが坏の破片も出土している。一つは、丸底になるものと思われるもので、全体に丸味を持って内湾して立ちあがり、口縁部でかるく段を形成、また、かるく沈線が入り、口唇部に至る断面を呈する。内面調整は、短い口縁部の部分はヨコナデ、段より下方がヘラケズリになっている。内面はヨコナデである。この坏は関東系で鬼高ⅠないしⅡ式になろう。

次に、内黒の丸底の坏片がある。外面体部下方に段を持ち、それ以上の口縁部にヨコナデ、以下の底部に当る部分がヘラケズリされている。また内面下方にも外面に対応するように段が



A～B

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土、炭化物、灰を含む
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土、炭化物、灰を含む
3	褐色 (7.5YR4/6)	シルト	焼土を含む

C～D

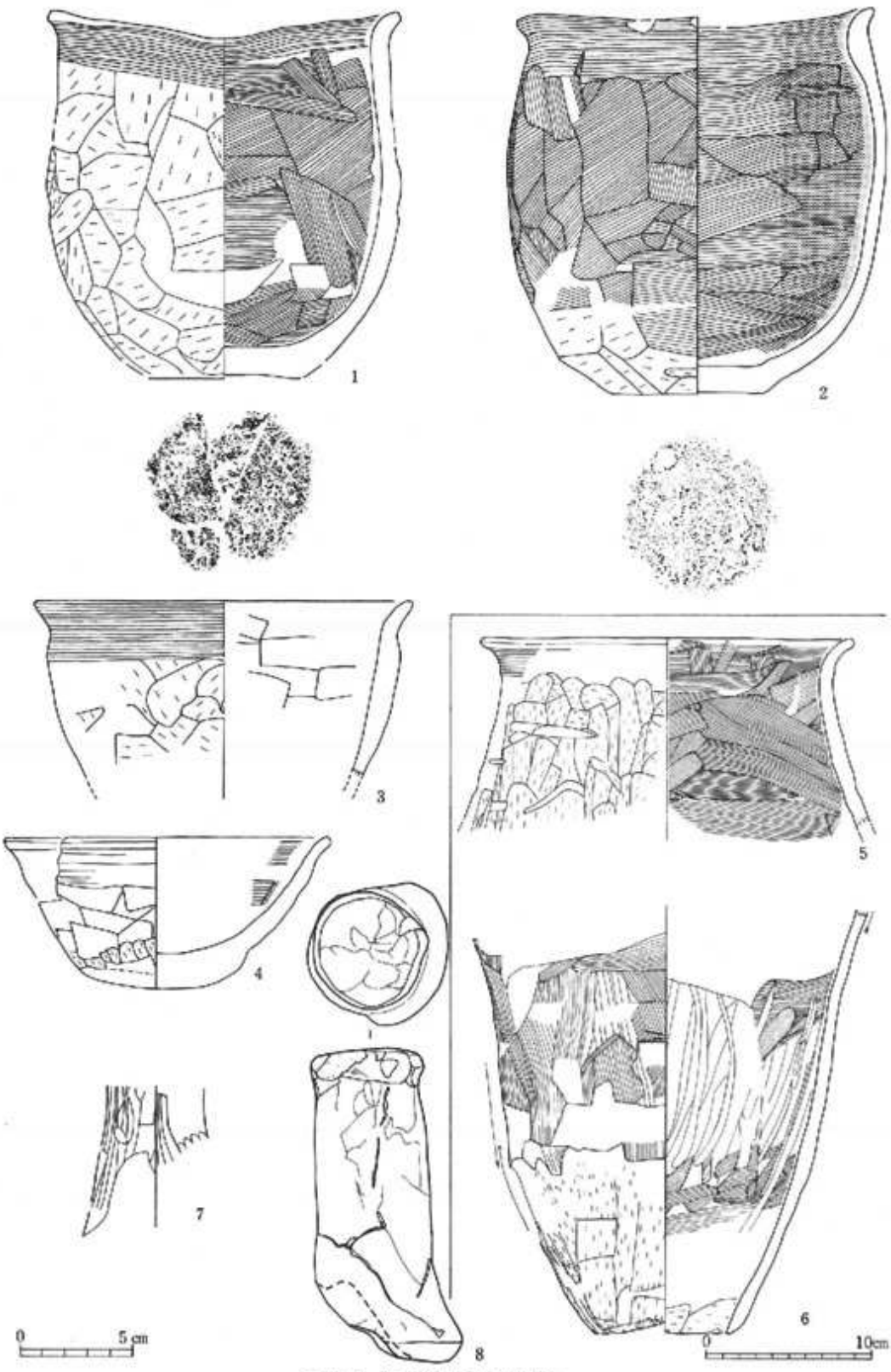
層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物、土師器片を含む、黄褐色シルトをしま状に含む
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化鉄、炭化物を含む
3a	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物、土師器片を含む
3b	褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物を含む
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物を含む

第24図　第23号住居跡平、断面図

付く。内面の調整はヨコ方向のヘラミガキであり、住社式か栗囲式第Ⅰ類に該当するものと思われる（註）。

ところで栗囲式に伴う甕類は、長胴形で外面に縦位のハケ目を有し、口縁部と体部の境には段を有するのが特徴であるが、出土した破片には1点もハケ目を有するものを含んでいない。甕の調整から見れば栗囲式ではなく、住社式のものに類似する。

以上のことより、東北地方南半の土師器編年では住社式に、また関東の土師器編年では、鬼高Ⅰ式から鬼高Ⅱ式への過渡期と位置付けられ、年代的には、21号住居跡とほぼ同じく6世紀



第25図　第23住居跡出土遺物

図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
25－1	土師器	甕	床面	上部ナデ　下部ヘラケズリ	ナデ	15.8	6.8	16.3	底部木葉痕あり
25－2	土師器	甕	床面	上部ナデ　下部ヘラケズリ	黒色処理・ナデ	16.7	6.7	17.2	底部木葉痕あり
25－3	土師器	甕	埋土最下層	上部ナデ　下部ヘラケズリ	ナデ	16.8	—	—	
25－4	土師器	鉢	床直	ナデ(横方向)　体部上半ヘラナデ　体部下半ヘラケズリ	上部ナデ(横方向)　下部ヘラナデ	14.5	7.2	6.7	
25－5	土師器	甕	柱上	上部ナデ(横方向)　下部ケズリ	ナデ	22.6			
25－6	土師器	甕	床面	上部ナデ　下部ヘラケズリ	ナデ後ミガキ　底部周辺ヘラケズリ	—	8.1	—	
25－7	土師器	高坏	埋土	ヘラケズリ後ミガキ	しぼり込み	—	—	—	
25－8	土師器	支脚	埋2層上面						

中葉と考えられる。

第24号住居跡（第26、27図）

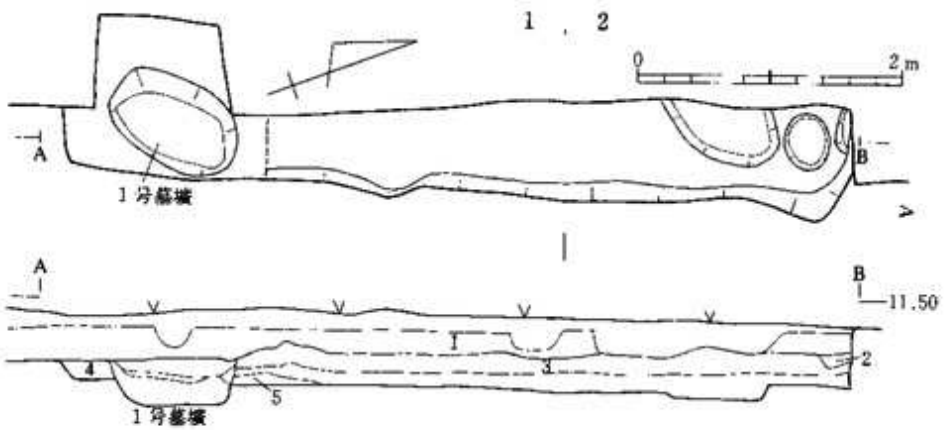
1－A、B区にまたがり、東辺をのぞいて、ほとんど調査区西外になる。検出された東辺の長さは約5.90mであり、その辺での磁北からの角度を測ると、N－21°－Eとなっている。

堆積土は、上層と下層に大別でき、上層が暗褐色シルト、下層が褐色シルトである。

遺物は少なく、ほとんどが細片である。図化できたのは27図の木葉痕をもつ土師器甕底部片だけである。また図化できなかった土器片を観察すると、土師器甕の体部片は、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部は手持ちヘラケズリである。須恵器甕片も若干あるが、体部外面は平行タタキ目痕、内面に青海波文のオサエ痕を有するものである。

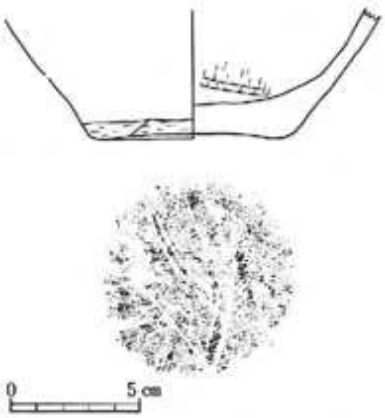
土師器坏小片も若干あり、内黒と黒色処理されていないものがある。口縁部にかるく段を有するものであるが、小片で調整不明である。ロクロ使用の土器はない。

これらの遺物の年代は資料が少なくはっきりしないが、住社式期で6世紀後半と考えておきたい。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片を少量含む
2	褐色（10YR4/4）	シルト	しまりなし
3	褐色（10YR4/6）	粘質シルト	しまりあり、炭化物を少量含む
4	褐色（10YR4/6）	粘質シルト	しまりあり、炭化物を少量含む
5	褐色（10YR4/6）	砂質シルト	しまりあり

第26図　第24号住居跡平、断面図



第27図
第24号住居跡出土遺物

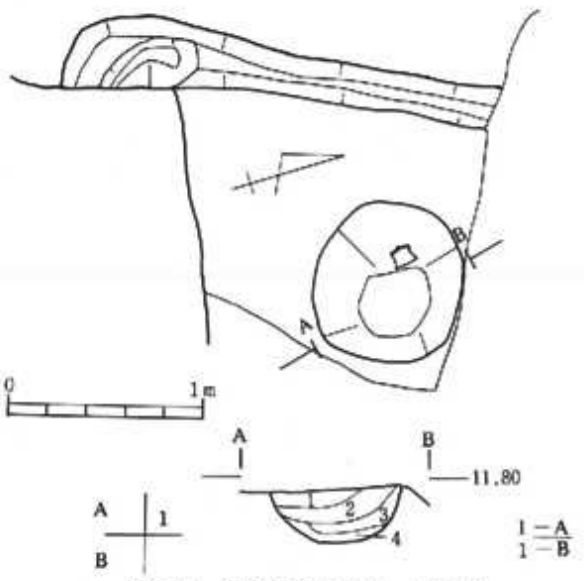
種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
土師器	甕	堆1	体部下端一横方向のヘラ削り 底部一木葉痕	ヘラナデ(タテ)	—	7.9	—	内面底部にカーボン

第25号住居跡（第28、29図）

1－A区に存在し、第45、47号溝に切られており、南西角を含む、ごく一部しか残存していない。西辺で方位をみるとほぼN－34°－Eとなる。住居跡内遺構として検出されているのは周溝と土壙である。土壙は径約80cm、深さ約25cmの円形であり、遺物の出土は、ほとんどここからである。

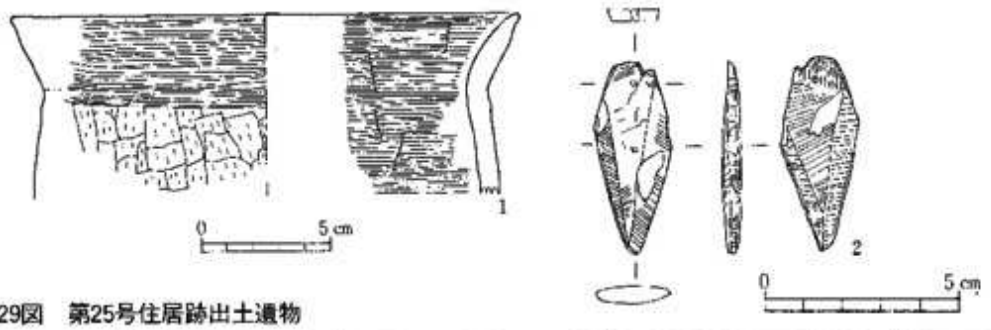
堆積土は褐色を呈しており、周溝内は暗褐色土が入っていた。

遺物量は少なく、図示したのは石製模造品（剣形）と土師器甕片だけである。土師器甕は体部と口縁部との境にかるい段があり、内面に横のヘラナデ、外面口縁部にヨコナデ、体部外面に縦のヘラケズリ調整されているものである。その他観察できる遺物片には、内黒の土師器椀片がある。外面口縁部はヨコナデ、体部は上の方が横及び傾め、下方が縦方向にていねいに削られている。内面はヨコナデ後、口縁部がヨコ方向のヘラミガキ、体部は、はっきりしないが縦のヘラミガキがなされているようである。土師器から住社式と推察できる。



第28図　第25号住居跡平、断面図

層	土色	土性	備考
1	褐色（10YR5/4）	シルト	しまりあり、土師器片含む
2	褐色（10YR5/4）	粘質シルト	しまりあり、やや粘性、炭化物、焼土、土師器片含む
3	黄褐色（10YR5/6）	しまりあり	炭化物含む、褐色土をブロック状に含む
4	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘質シルト	しまりややあり



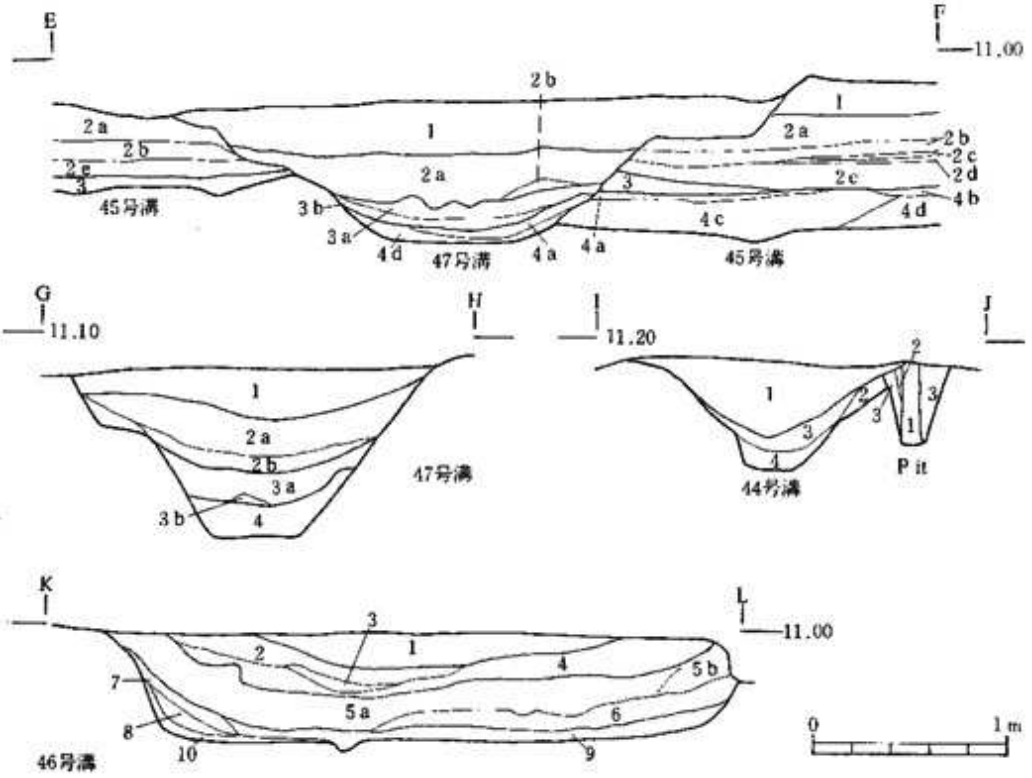
第29図　第25号住居跡出土遺物

図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
29－1	土師器	甕	埋2層	口縁部ーナデ　体部ーヘラ削り	ナデ	19.4	―	―	
29－2	石製模造品	剣形	埋2層						

年代的には、第21、23号住居跡同様、6世紀中葉に位置付けられるかと思われるが、資料がとぼしいので6世紀後半～7世紀初頭と広くおさえておきたい。

第46号溝跡（第30、31図）

1－C、D、2－D、3－D、E区を南西～北東へ通っている。第23号住居跡を切って、第19、22号住居跡、第44号溝、第19、23、24号土壙に切られている。検出面での測定では上幅は約3.00m、底面幅が約2.20mである。底面標高は1－C区南端で10.46m、2－D区南端付近で10.36m、3－D区南端付近で10.33mと若干北東方向へ傾斜している。



第30図　第44～47号溝跡断面図

44号溝

層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む、黄褐色土斑状に含む
2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	しまりあり、褐灰色土ブロック状に含む
3	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	しまりあり、炭化物含む

Pit

層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む
2	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	しまりあり
3	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質シルト	しまりあり

45号溝

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	酸化鉄と炭化物含む
2a	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化鉄と炭化物含む
2b	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	酸化鉄とマンガン粒を含む
2c	褐色 (10YR4/6)	砂	酸化鉄含む
2d	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	酸化鉄とマンガン粒を含む
2e	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	酸化鉄とマンガン粒を含む
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、にぶい黄褐色砂ブロック状に含む
4a	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	酸化鉄と炭化物含む
4b	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	酸化鉄と炭化物含む
4c	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	酸化鉄、炭化物、マンガン粒を含む
4d	黄褐色 (10YR5/6)	砂	酸化鉄含む

46号溝

層	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/6)	シルト	しまりあり、土師器片、炭化物少量含む
2	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分含む
3	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	砂をブロック状に含む
4	褐色 (10YR4/6)	シルト	しまりあり、炭化物少量含む
5a	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘質シルト	しまりややあり、炭化物、酸化鉄含む、層の中心に砂入る
5b	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	しまりややあり
6	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	しまりややあり、炭化物少量含む
7	黄褐色 (10YR5/6)	粘質シルト	しまりあり
8	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	しまりややあり
9	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	粘土	しまりなし、酸化鉄含む、層の中心に砂入る
10	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	しまりややあり

47号溝

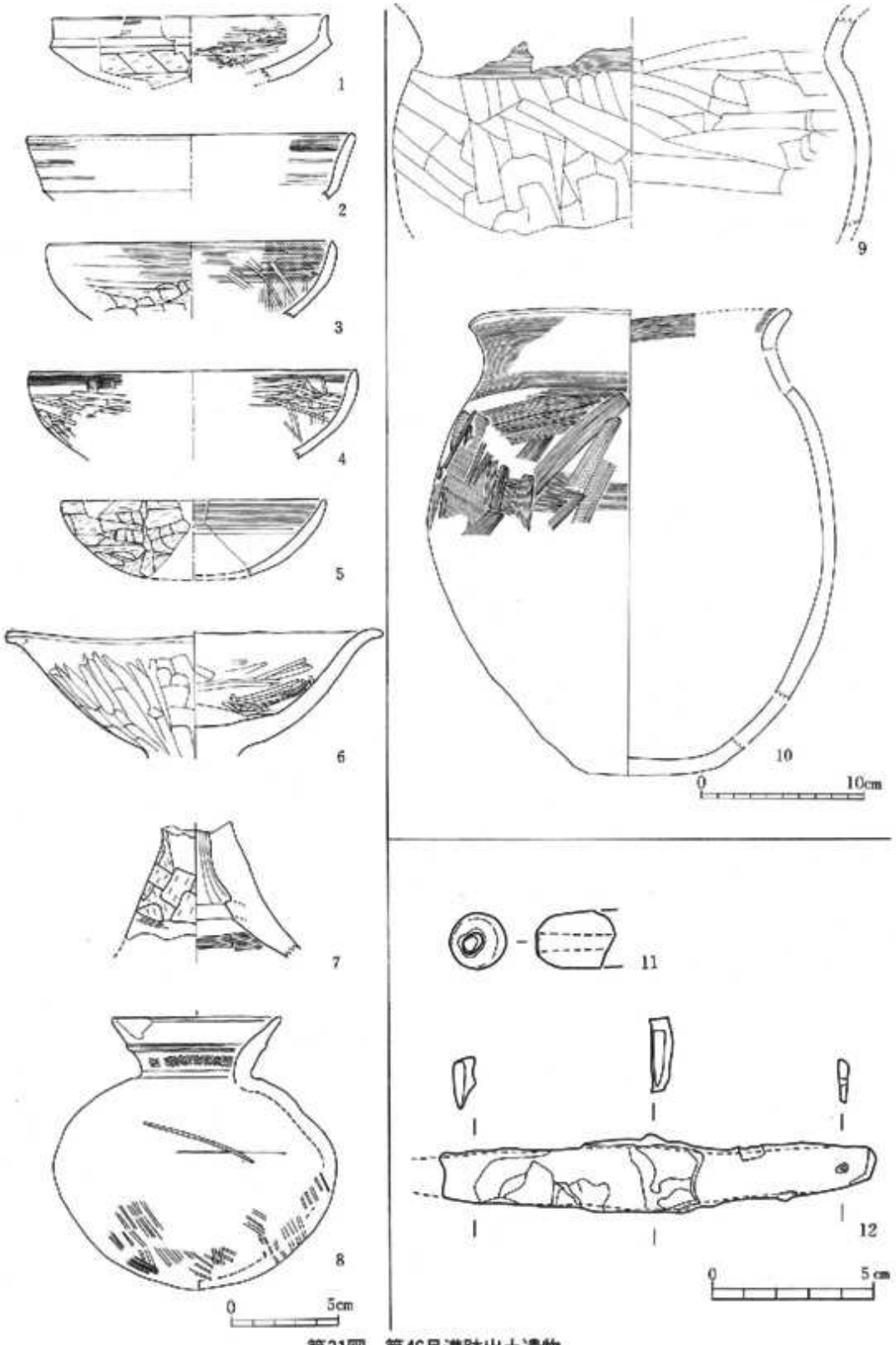
層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	酸化鉄と炭化物含む
2a	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	酸化鉄と炭化物含む、灰黄褐色土塊点状に含む
2b	褐色 (10YR4/6)	シルト	酸化鉄含む
3a	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘質シルト	酸化鉄と炭化物含む
3b	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘質シルト	酸化鉄と炭化物含む
4a	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘質シルト	酸化鉄含む
4b	褐色 (10YR4/6)	シルト	酸化鉄と炭化物含む

47号溝

層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	しまりあり、炭化物、マンガン粒、遺物含む
2a	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりあり、灰黄色、黒褐色、黄褐色土のブロック多量含む
2b	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片含む
3a	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分含む、灰黄色土ブロック状に含む
3b	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分含む
4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘質シルト	しまりややあり、炭化物含む、黒褐色土ブロック状に含む

堆積土の状況は第30図に示してあるとおりであるが、褐色、にぶい黄褐色の粘質と砂質の細い層となっており、地山との判別がしにくい土層である。有機物を含む層がないこと、ほとんど細い層になっていることなどから、短期間に水の影響で埋没したものと観察される。

出土遺物は須恵器壺、土師器坏、高坏、甕、などを出土し、関東系土器を混入する特徴が指摘される。



第31図　第46号溝跡出土遺物

図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
31－1	土師器	坏	埋土上層	上部ナデ 下部ヘラケズリ（横方向）	上部ナデ 上部横ミガキ一部縦ミガキ	12.9	—		関東系
31－2	土師器	坏	埋2層	体部上半ナデ 体部下半ヘラケズリ	ナデ	15.3	—	—	関東系
31－3	土師器	坏	埋2層	ナデ、ヘラケズリ	ナデ後ミガキ	13.5	—	—	関東系
31－4	土師器	坏	埋2層	体部上半ナデ後ミガキ 体部下半ケズリ後ミガキ	ナデ後ミガキ	15.4	—	—	関東系
31－5	土師器	坏	埋1層	ヘラケズリ	ナデ	12.4	—	—	関東系
31－6	土師器	高坏	埋2層	体部上半横ナデ 体部下半縦ヘラナデ	ナデ後ミガキ	17.6	—	—	関東系
31－7	土師器	高坏	埋1層	ナデ、ヘラケズリ	しぼり込み、横ナデ	—	—	—	
31－8	須恵器	壺	埋3層	底部にタタキ目あり 頸部に櫛目波状紋あり		7.9		12.7	
31－9	土師器	甕	埋2層	ナデ	ナデ	—	—	—	
31－10	土師器	甕	埋2層	体部上半ナデ 体部下半ケズリ後ミガキ	ナデ	19.8	9.2	28.7	
31－11	土製品	土錘	埋2層	両側ていねいにナデられている					
31－12	鉄製品	刀子	埋2層						

30図の土層の断面図によれば1から10まで細分しているが、それを大別すると、埋1（埋1）、埋2（埋2、3、4）、埋3（埋5a、b）、埋4（埋6～10）層とできる。その大別層により、出土物をみると以下のようにまとめられる。

埋1層：石器（フレーク）、弥生土器片、須恵器甕片、土師器坏、椀、甕片、（関東系のものを含む）

埋2層：石器（フレーク）、磨石、弥生土器片、土錘、鉄滓、刀子、須恵器甕片、土師器坏、高坏、甕片、（関東系のものを含む）

埋3層：石器（フレーク、コア、石錐）、弥生土器片、土師器甕片

埋1層から出土した土師器の椀片は、第25号住居跡土壙出土の椀片に形状、調整が類似するが、焼成はそれに比較するとやや甘く、軟質であり、胎土には白色針状物質を混入するものである。

31図－9、10の土師器甕は、ほぼ丸胴に近いものであり、外面は底面から体部上半がヘラナデ、下半がヘラケズリされ、口縁部がヨコナデされている。内面は荒れており観察がむずかしいが、口縁部はヨコナデされている。東北編年で言えば住社式のものと思われ、関東地方の土師器編年にあてはめれば鬼高Ⅰ式のものに該当できる様相である。

31図－6の土師器高坏の坏部は、稜を持たず、内外面ヨコナデ後、外面下半がヘラケズリ、内面が不定方向のヘラミガキがなされている。関東系のものと考えられ鬼高Ⅰないし Ⅱ式に類似するものと思われる。

31図－7の土師器高坏の脚部は、上方から下方へ裾が広まるもので円窓がなく短かい。外面にはヘラケズリ痕が若干観察される。関東系のものと見られ鬼高Ⅰないし Ⅱ式に類似するものと考えられる。

31図－1～5の坏は関東系のものである。口縁部が短く直立気味に立ち上がるもの、体部上半に稜をもつもの、丸味を持ってそのまま口縁部に至るものなどがある。

3の坏は内黒であり、図示できなかった破片には黒彩されているものもある。

調整は外面が口縁部ヨコナデ、それ以下が細かくヘラケズリされ、内面は、ヨコナデのみのものと、ヨコナデ後、ヘラミガキするものがある。鬼高Ⅱ式の様相を呈する。

31図－８の須恵器直口壺は、体部に比して頸部から口縁部がだいぶ小形化したものである。頸部中央に断面三角形の隆帯が一条めぐり、その下に細まい櫛描き波状文が施されている。体部は全体的にナデられているが、その下方に、細まい平行タタキ目痕を若干残している。これは島根県金崎古墳出土の直口壺（ＴＫ－23並行）に近似するが（田辺：1981）、体部が発達した形体で６世紀前半位置付けられるものである。

また遺構の切り合いから見ると、第23号住居跡を切り、第22号住居跡に切られている。以上のように遺物及び遺構の切り合い関係を総合的に判断すると、土師器で言えば東北では住社式期であり、関東系では鬼高Ⅰ～Ⅱ式の時期が考えられ、６世紀中葉の年代が与えられると思う。須恵器の直口壺は他の遺物の年代観からすれば、少し古く、伝世品ないし、溝埋没段階でのまぎれ込みと解釈するものである。

第19号土壙

１－Ｄ区にあり、25号土壙、46号溝を切っている。検出面で計測すると上面径約90cm、底面径約55cm、深さ約45cmの断面逆台形の土壙である。

堆積土はにぶい黄褐色シルトの単層である。

出土遺物は皆無である。

第21号土壙

３－Ａ区にあり、21号住居跡を切っており、22号土壙と接している。検出した面で計測すれば、上面長軸約93cm、短軸約66cm、底面長軸約73cm、短軸約32cm、深さ約40cmの土壙である。

堆積土はオリーブ褐色（2.5Y⅘）シルトでマンガン粒を多量に含むほか、炭化物も若干含むものである。

遺物は底面近くから、土師器甕の小片が１点出土したのみである。

第22号土壙

３－Ａ区にあり、21号住居跡を切っており、21号土壙に接している。上面長軸約１m、短軸約55cm、底面長軸約80cm、短軸約40cmを測る。深さも21号土壙とほぼ同じである。

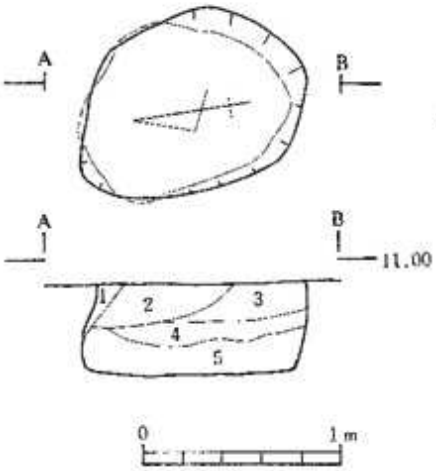
堆積土はオリーブ褐色（2.5Y⅘）粘質シルトでマンガン粒を多量に混入するものである。

遺物の出土はない。

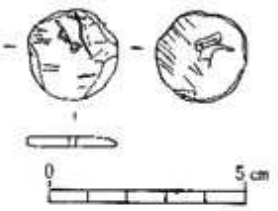
第24号土壙（第32図）

１－Ｄ区にあり、46号溝を切っている。上面幅125×90cm、底面幅105×85cm、深さ約45cmであり、北壁がやや内側にくい込み袋状を呈する。

堆積土は５層に細分されるが、大きくは２層に分けられる。大別した埋１層は、にぶい黄褐色シルトで、酸化鉄、マンガン、炭化物粒を含む層であり、埋２層は、褐色砂質シルトで、酸化鉄を含む層である。



◀第32図
第24号土壙平、断面図



▲
第33図　第25号土壙出土遺物

層	土	色	土	性	考
1	にぶい黄褐色	(10YR⁵/₃)	シ	ル ト	酸化鉄、炭化物、マンガン粒含む
2	にぶい黄褐色	(10YR⁵/₄)	シ	ル ト	酸化鉄、マンガン粒含む
3	褐	色 (10YR⁴/₃)	シ	ル ト	酸化鉄、マンガン粒含む
4	褐	色 (10YR⁴/₄)	砂質シルト		酸化鉄含む
5	褐	色 (10YR⁴/₆)	砂質シルト		酸化鉄含む

種別	特徴	考
石製模造品（有孔円盤）	底面	径 2.3 厚さ 0.2

遺物は弥生土器片と土師器甕片が若干出土した。

第25号土壙

1－D区にあり、19号土壙、46号溝に切られている。規模はわからないが深さは約17cmのものであり、埋土は単層で褐色シルトに炭化物を若干含むものである。底面近くから石製模造品（有孔円盤）を出土している（第33図）。

土壙については、遺物が皆無か極少であり、年代判断資料がないと言っても過言ではない。ただ第21、22号土壙の埋土と、第46号溝の一部の埋土に調査時において類似するところがあった。切り合いから、6世紀中葉～6世紀後半に位置付けられると思われる。

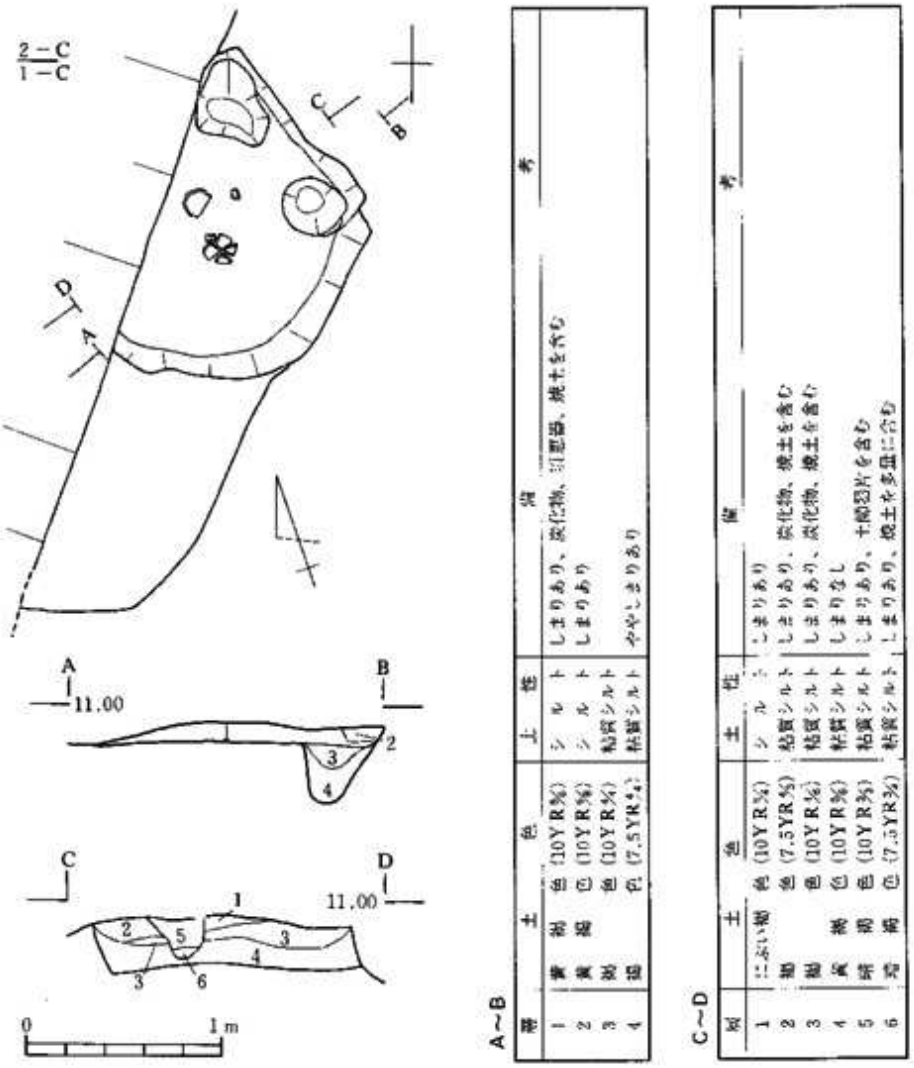
（註）栗遺跡の報告書（工藤：1982）によれば、第10号住居跡出土で丁期土器群に分類されたものに類似する。

3）平安時代の遺構、遺物

58年度調査で発見された平安時代の遺構は、第19、20a、b号住居跡、第27、28号土壙である。以下、各遺構とその出土遺物、年代観を説明する。

第19号住居跡（第34、36、37図）

1－C区にあり、第44号溝に切られ、第46号溝を切っている。表土を排除した時点から、炭化物、焼土、土師器、須恵器片などが出土しており、住居跡の存在が知られていたが、天地がえしや、攪乱、土壙が多く、住居跡の北東角付近と考えられる住居跡内土壙が確認されただけ



A～B

層	土質	色	土性	備考
1	表土	褐色 (10YR⅘)	シルト	しまりあり、炭化物、須恵器、焼土を含む
2	黒褐土	褐色 (10YR⅗)	シルト	しまりあり
3	黒褐土	褐色 (10YR⅘)	粘質シルト	
4	褐土	赤褐色 (7.5YR⅘)	粘質シルト	ややしまりあり

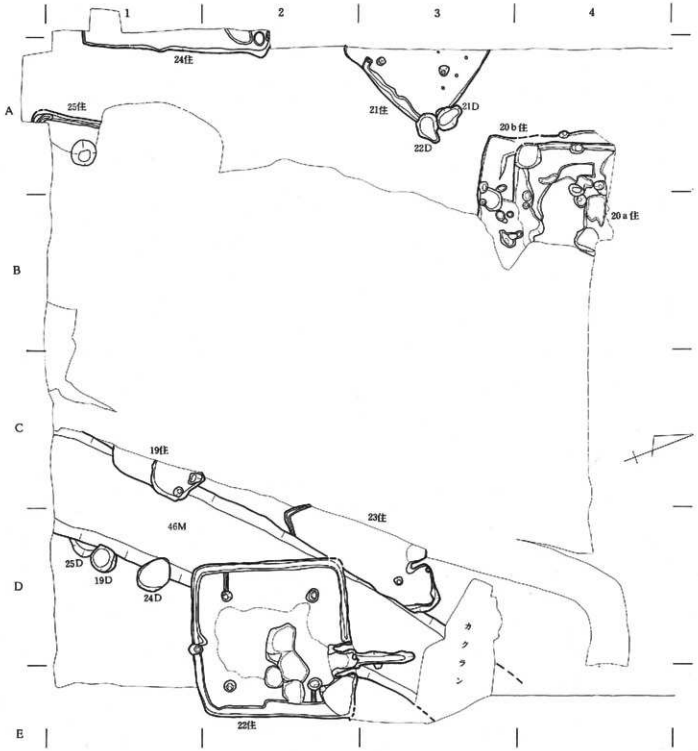
C～D

層	土質	色	土性	備考
1	にぶい黄褐	褐色 (10YR⅘)	シルト	しまりあり
2	黒褐	赤褐色 (7.5YR⅘)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、焼土を含む
3	黒褐	褐色 (10YR⅘)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、焼土を含む
4	灰黄褐	褐色 (10YR⅘)	粘質シルト	しまりなし
5	黄褐	褐色 (10YR⅘)	粘質シルト	しまりあり、土師器片を含む
6	褐	赤褐色 (7.5YR⅗)	粘質シルト	しまりあり、焼土を多量に含む

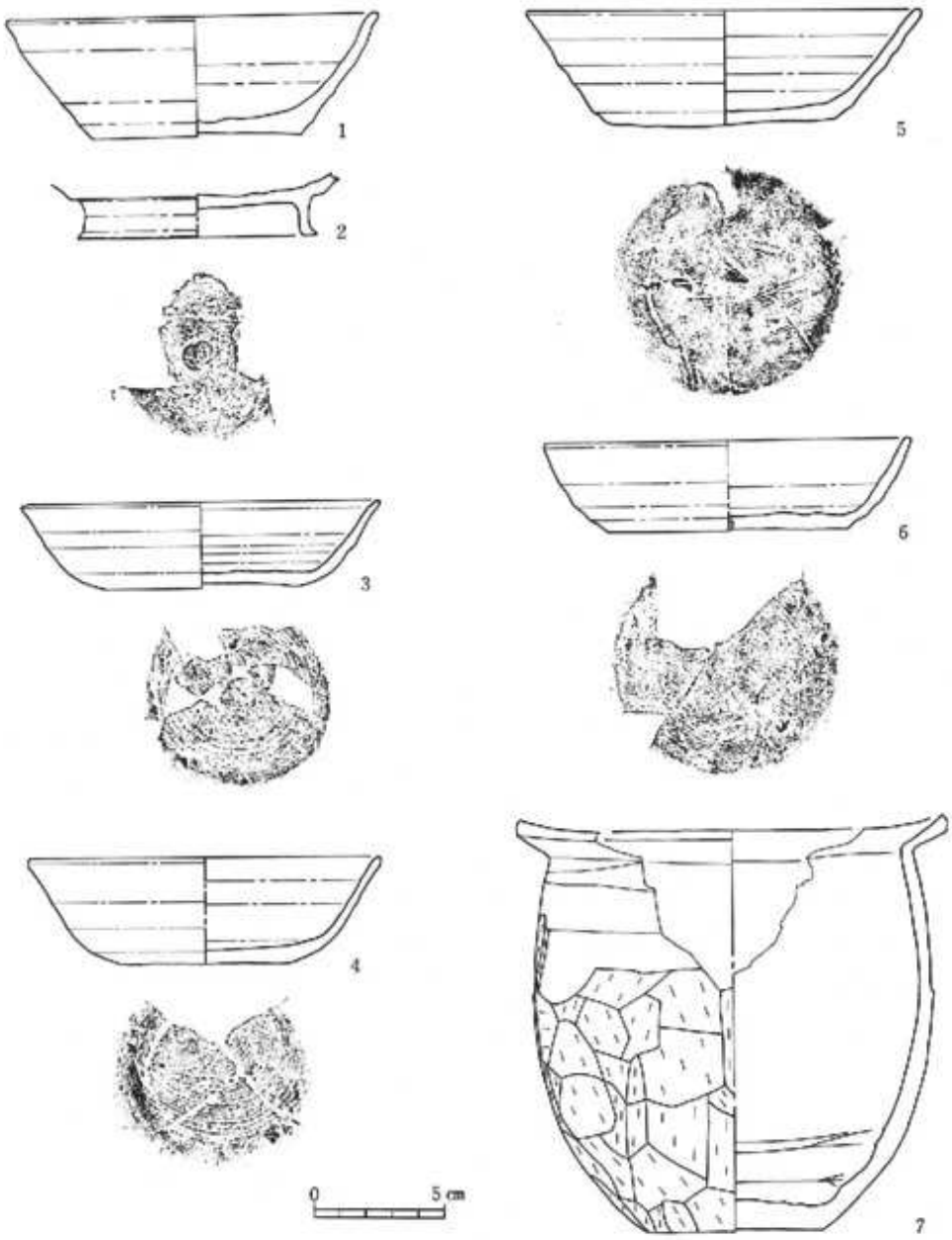
第34図　第19号住居跡平、断面図

けである。よって規模不明である。恐らく、調査時点で壁高はなく、床面も天地がえし等の耕作によって寸断されたものと思われる。

出土遺物は36、37図に示してあるが、坏底部を観察すると回転糸切り、ヘラ切りで未調整のものと、全面に手持ちヘラ削り及び回転ヘラ削り調整されているもの、体部下端にヘラ削り調整されているものがある。36図－7の小形甕は、口縁部、体部上半を見るとロクロ調整痕が見られるので、ロクロは使用されているようだが、37図－8の長胴甕は、体部にタタキ痕を残し、明らかにロクロ調整痕と言えるものは認められない。これは第44号溝から出土した長胴甕（49図－1）にも言えるものである。この44号溝出土の甕は、破片が溝壁に付着し、そのほとんどが溝の下層に一括してつぶされて発見された。この状況は第19号住居跡に残存していたものが、

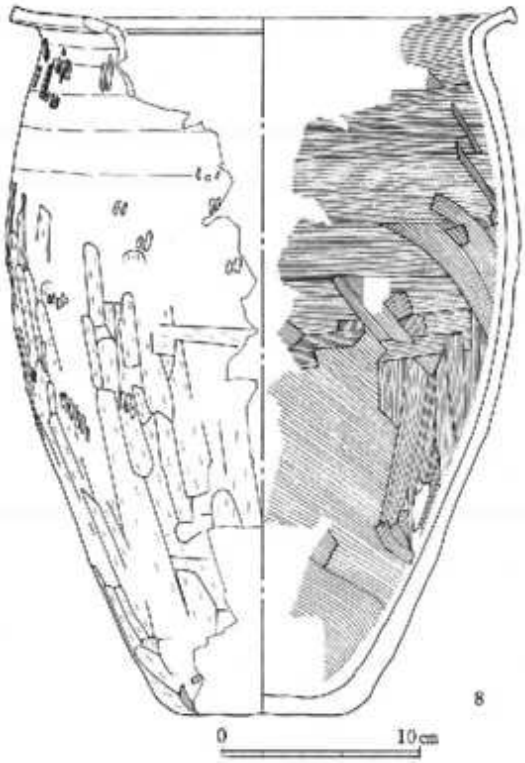


第35図　遺構配置図(古墳時代～平安時代)



図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
36－1	須恵器	坏	堆1	ロクロ調整、底部手持ちヘラ削り	ロクロ調整	14.15	7.9	4.6	
36－2	須恵器	高台付坏	堆2	底部回転ヘラ切りのち回転ヘラ削り	ロクロ調整				高台部径9.5
36－3	須恵器	坏	堆2	ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	13.6	7.1	3.3	
36－4	須恵器	坏	堆2	ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	13.4	6.4	4.1	
36－5	須恵器	坏	床面	底部回転ヘラ切りのち回転ヘラ削り	ロクロ調整	14.5	8.6	4.5	底部にヘラによる傷あり
36－6	須恵器	坏	表土	ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	13.5	9.0	3.5	
36－7	土師器	甕	堆1	口縁部ロクロ調整、体部ヘラ削り 底部ヘラ削りのちナデ	ロクロ調整	16.0	6.6	15.8	20号住居跡の破片と接合

第36図　第19号住居跡出土遺物Ⅰ



◀第37図
第19号住居跡出土遺物Ⅱ

図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
37－8	土師器	甕	2層上面	口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り	ナデ	25.7	8.4	35.6	体部上半にタタキ痕残す

44号溝壁の崩落、上端の拡張にともない、44号溝にころげ落ちたものと理解できるものである。なお、7の小形土師器甕は第20号住居跡の破片と接合したものである。

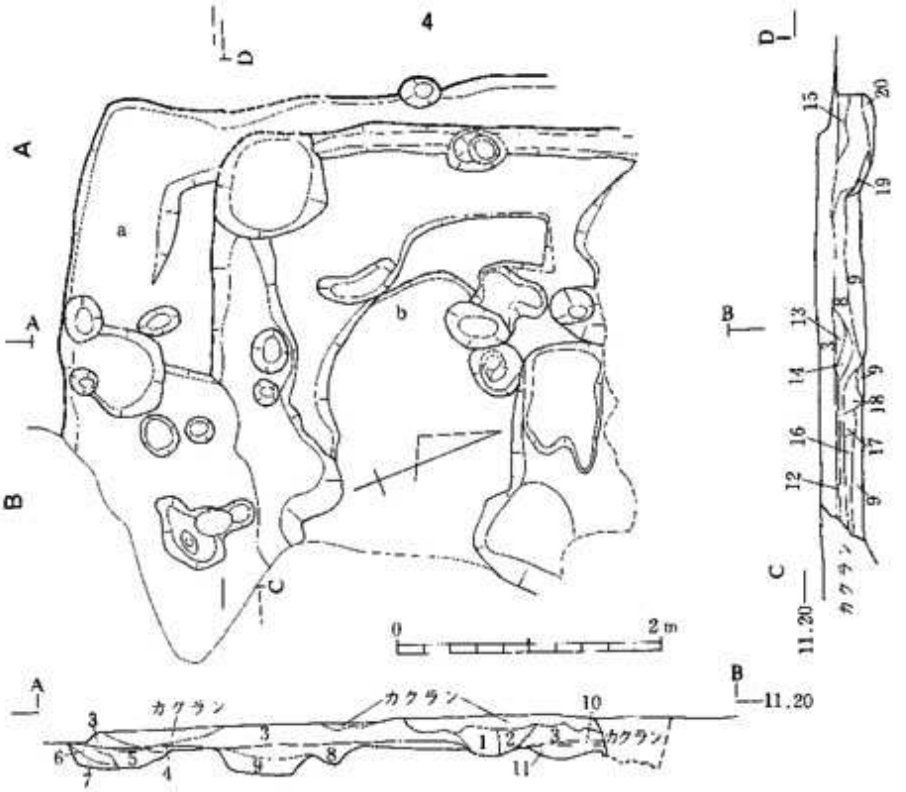
第20号住居跡（第38、39図）

この20号住居跡は、天地がえし等の耕作が顕著で、その堆積土と遺物片が周囲に拡散している状況であった。aとbと二つの住居跡が重複しており、検出段階においては、b住居跡の方が認識され、それを掘り下げた結果、a住居跡の存在を確認した。

3、4－A、B区に存在し、第15号土壙、第1、第2号土倉跡に切られ、北側は広く攪乱されている。

a住居跡：西壁、南壁で測ると3.0m以上、東西1.9mで周溝を持ち、南西角に土壙が施設されたものである。北側に炭化物、焼土が多いので北壁にカマドが施設されていたものであろう。方位は西壁で測ると、N－21°－Eとなっている。

b住居跡：残っている西壁で測ると南北3.4m以上、東西2.5m以上で、南西角に幅広い溝が残るので周溝が施設されていたものと考えられる。南壁ほぼ中央と見られるところに土壙があり遺物がまとまって出土した。方位は西壁で測るとN－15°－Eとなる。カマドはa住居跡同様北側に設置されていたと思われる。



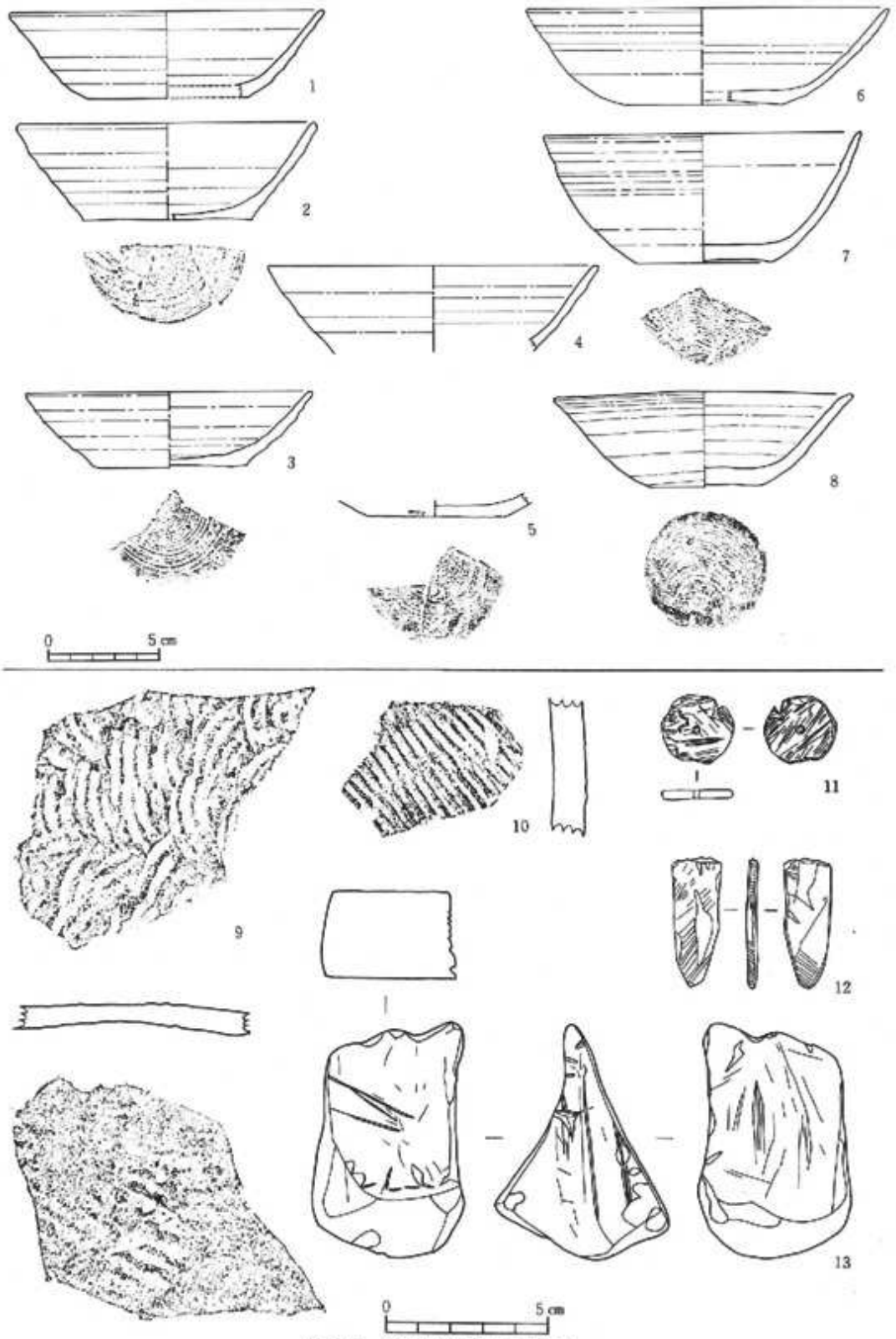
A～B

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を含む
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化鉄、炭化物を含む
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化鉄、炭化物を含む、褐色土を斑点状に含む
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物を含む
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	焼土と炭化物を含む
6	褐色 (10YR4/6)	シルト	焼土と炭化物を含む
7	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	炭化物を含む
8	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物を含む、黄褐色土をしま状に含む
9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を含む、黄褐色土を斑点状に含む
10	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物を多く含む
11	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物と焼土を含む、黄褐色土を含む

C～D

層	土色	土性	備考
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化鉄、炭化物を含む、褐色土を斑点状に含む
8	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物を含む、黄褐色土をしま状に含む
9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭化物を含む、黄褐色土を斑点状に含む
12	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりあり、炭化物含む
13	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	炭化物、土師器片含む、黄褐色土斑状に含む
14	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりあり、炭化物含む
15	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	炭化物土師器片含む、黄褐色土斑状に含む
16	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘質シルト	しまりあり、炭化物若干含む、黄褐色土斑状に含む
17	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	炭化物、土師器片若干含む、黄褐色土ブロック状に含む
18	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	しまりあり、黄褐色土を斑状に含む
19	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	しまりややあり
20	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	しまりややあり、粘性大、炭化物少量含む

第38図　第20号ａ．ｂ住居跡平・断面図



第39図　第20号住居跡出土遺物

図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
39－1	須恵器	坏	埋1	ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	14.2	7.4	4.95	
39－2	須恵器	坏	埋1	ロクロ調整、底部回転糸切り	ロクロ調整	13.6	7.6	4.4	b住居土壌
39－3	須恵器	坏	埋1	回転糸切りのち周辺ナデ？	ロクロ調整	13.0	7.0	3.45	
39－4	須恵器	坏	埋1	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	15.0	-	—	b住居土壌
39－5	土師器	坏	埋2	底部周辺手持ちヘラ削り、底部回転糸切り	ミガキ	—	-	—	b住居
39－6	須恵器	坏	埋2	体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	ロクロ調整	17.0	7.0	4.4	b住居土壌
39－7	須恵器	坏	埋2	回転糸切りのちナデ	ロクロ調整	14.4	6.2	5.9	b住居土壌
39－8	須恵器	坏	埋2	回転糸切りのち周辺ナデ？	ロクロ調整	13.5	4.8	4.3	b住居土壌
39－9	須恵器	甕	埋2	平行タタキのちナデ	青海波文				
39－10	須恵器	甕	床面	平行タタキ	ナデ				
39－11	石製模造品	有孔円盤	床面	径 2.2　厚さ 0.3					床下
39－12	石製模造品	紡錘	埋2	長さ 0.4　幅 1.4　厚さ 0.3					
39－13	石製品	砥石	埋2	長さ 7.0　幅 4.7　厚さ 5.2					b住居西壁

図示できた遺物は、b住居跡土壌内出土遺物が多く、5の土師器坏が回転糸切りで体部下端をヘラケズリしている他、須恵器坏は回転糸切りであり、6は体部下端にヘラケズリ、7は底面を一方にヘラでナデられている。また、3、8は乾燥時であろうか、底面周囲がナデられたようにつぶれている。

破片を見ても、坏片の底部は回転糸切りが多く、若干ヘラ切りが混入、それにヘラケズリ調整されているものがある。土師器の甕は36図－7のように、19号住居跡と接合したものと同様の小形甕片が多い。須恵器の甕片に窯の焼台に使用したように釉が多く付着し、2枚の甕片が密着した、ゆがんだものも出土しており、窯業工人との関連を考えさせられるものである。

その他須恵器片をみると、外面がナデられているものと、内面が青海波文、外面が平行タタキののちナデられているものと、内面が青海波文、外面が平行タタキで内面がナデられているものがある。

第27号土壌

5－A区にある。ほぼ調査区西壁に接するもので、埋土は1層で10YR 5/4褐灰色粘質シルトで炭化物、土師器片を若干含む。

第28号土壌（第40図）

5－A区にあり、27号土壌の東側約2mにある。土壌は2段になっており、検出面での計測では、上面幅約1.45×1.20m、中段幅約92×56cm、深さ約50cmの東西方向に長い隅丸長方形プランである。また上段壁面には浅黄褐色シルトが貼り付けてある。堆積土は4層に分けられ、

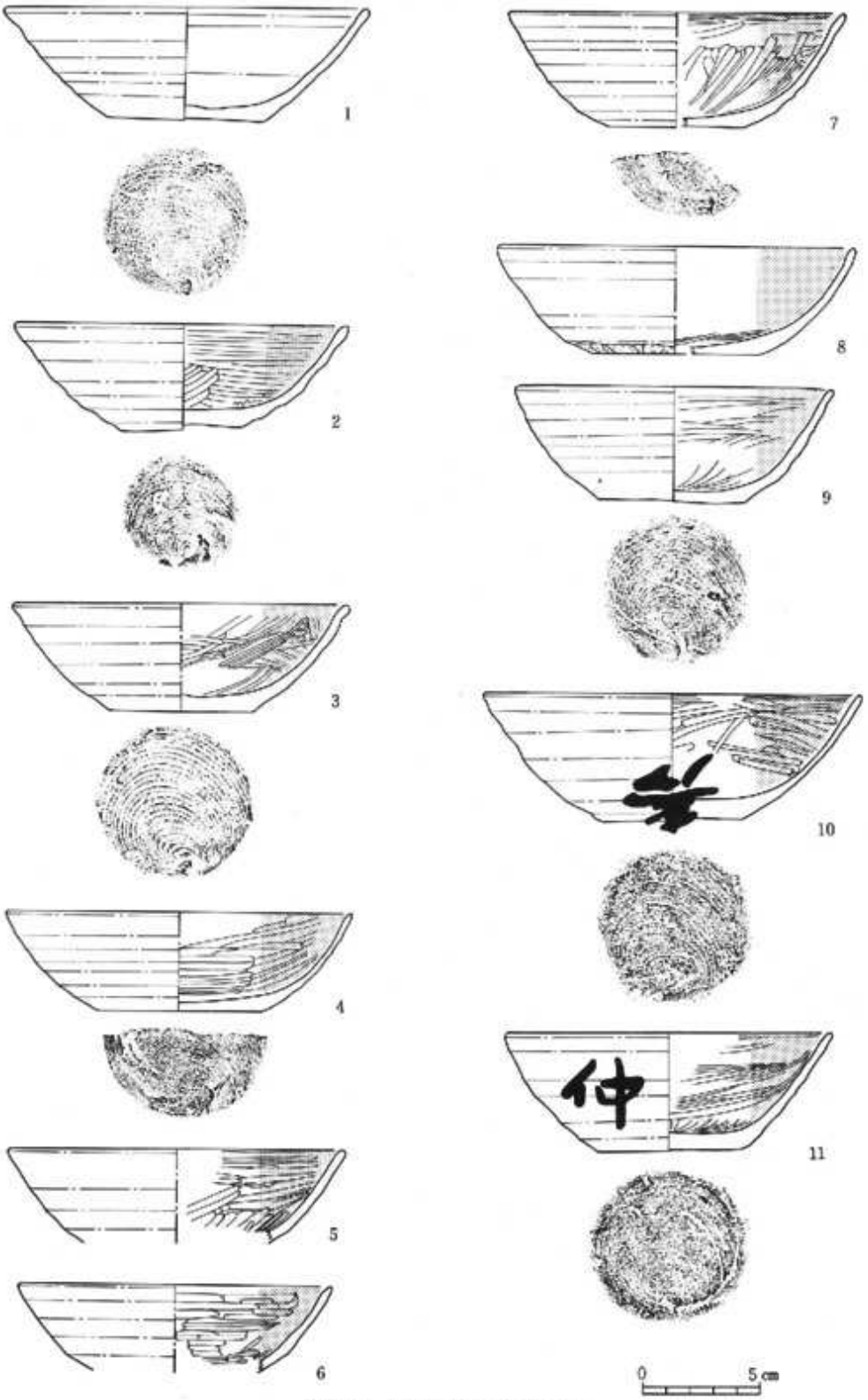
埋1層は、黒褐色シルトに褐色土をブロック状に多く混入するもので、土器は少量出土する。

埋2層は、黒褐色シルトで炭化物、土器の混入が多い。また骨片を少量出土する。

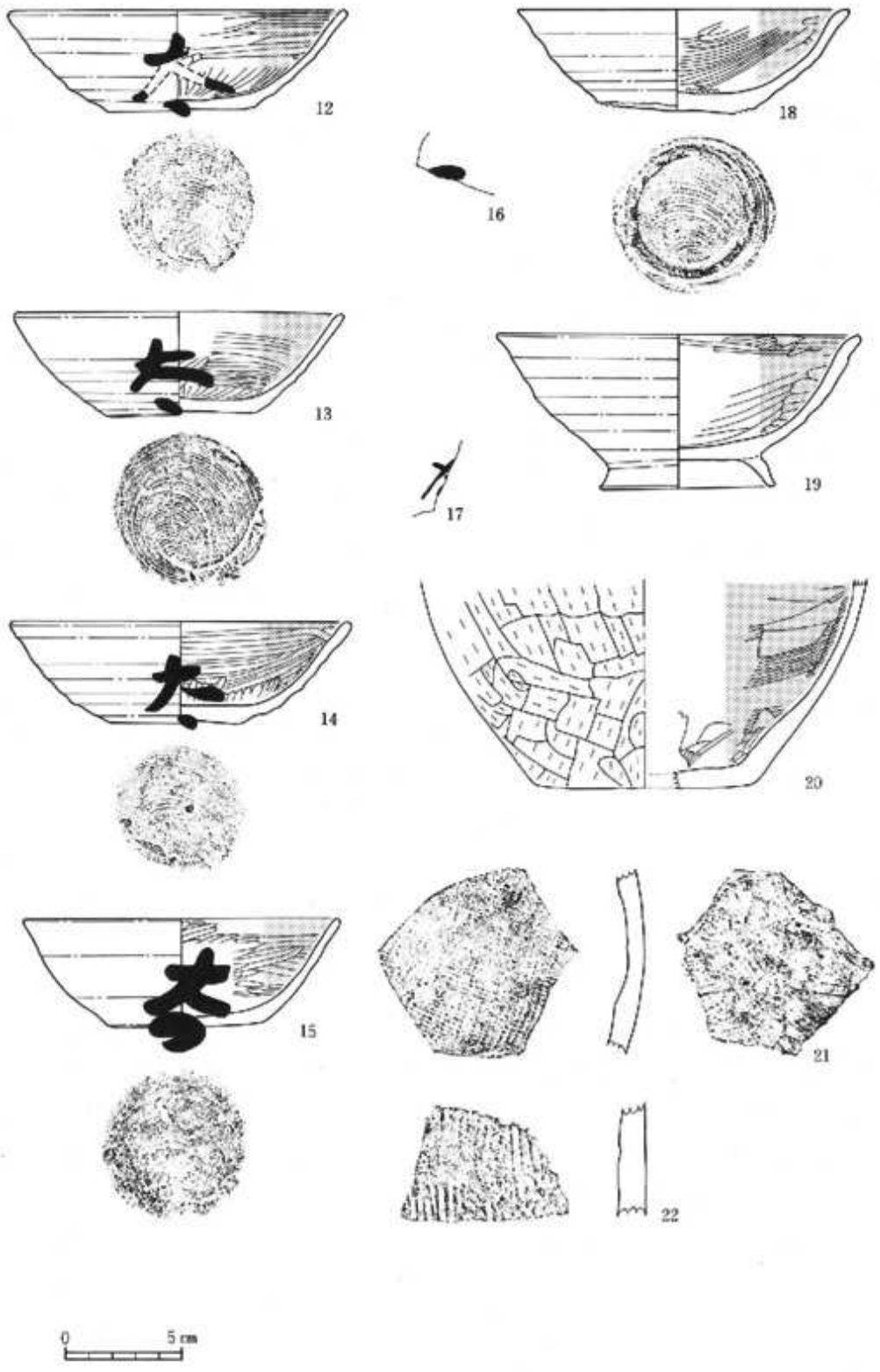
埋3層は、黒褐色シルトであるか、埋1、2層より赤味があり、土器を多量に出土する。

埋4層は、暗褐色砂質シルトで浅黄褐色シルトを含み、土器を少量出土する。

出土遺物は40図に示したとおりで8の土師器坏が底部手持ちのヘラ削りの他は、回転ヘラ切り未調整のものである。ここには、「太」、「仲」の他、「寿」かと思われる墨書土器も含まれている。



第40図　第28号土壙出土遺物Ⅰ



第41図　第28号土壙出土遺物Ⅱ

図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
40－1	須恵器	坏	埋2層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ロクロ調整	15.6	6.7	5	
40－2	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.2	5.0	4.6	
40－3	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.4	6.0	4.6	
40－4	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.8	7.0	4.0	
40－5	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整	ミガキ 黒色処理	14.4	—	—	
40－6	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整	ミガキ 黒色処理	13.4		—	
40－7	土師器	坏	埋2層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.4	5.8	4.9	
40－8	土師器	坏	埋2－3層	ロクロ調整 底部－手持ちヘラ削り 体部下端－ヘラケズリ	ミガキ 黒色処理	15.3	7.2	4.6	
40－9	土師器	坏	埋2-3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	13.6	6.3	5.0	「辛」墨書？
40－10	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	16.1	6.0	5.6	「春」？墨書
40－11	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.0	6.5	5.1	「仲」 墨書
41－12	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.6	5.9	4.4	「太」 墨書
41－13	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.2	6.5	4.6	「太」 墨書
41－14	土師器	坏	埋2層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	14.6	5.5	4.4	「太」 墨書
41－15	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理	13.6	6.6	4.7	「太」 墨書
41－16	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整	ミガキ 黒色処理	—	—	—	体部に墨書
41－17	土師器	坏	埋3層	ロクロ調整	ミガキ 黒色処理	-	—	—	体部に墨書
41－18	土師器	高台付坏	埋2層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ミガキ 黒色処理 一部とぶ	14.2	6.7	4.4	
41－19	土師器	高台付坏	埋3層	ロクロ調整 底部 回転糸切り	ミガキ 黒色処理 一部残る	15.7	7.5	6.7	
41－20	土師器	甕	埋1層	ヘラ削り底部－手持ちヘラケズリ	ミガキ・ナデ 黒色処理	—	9.4	—	
41－21	須恵器	甕	埋3層	格子タタキ後ナデ	青海波文後ナデ	—	—	—	
41－22	須恵器	甕	埋3層	平行タタキ	ナデ	—	—		

また2層からは、加工痕のある鹿角片、鹿の中足骨遠位端が出土している。骨端がゆ着していないので若獣と推定される。

住居跡において、第19号住居跡出土甕片と、第20号住居跡出土甕片が接合したことは、両住居跡の関連性を暗示する。また、その他出土遺物も、ほぼ同じような傾向にある。坏にあっては、その底部技法に回転糸切り、回転ヘラ切りで未調整のものがあり、回転ヘラ削り調整をうけているものもある。また体部下端に手持ちヘラ削り調整されているものもある。土師器の小形甕、長胴甕を見ると、長胴甕においては明確にロクロ使用痕の見られるものがなく、ヘラ削り、ヘラナデが体部内外面に見られる。小形甕にはロクロ調整痕が口縁部、体部上半に多く見られ、体部外面下半にヘラ削りがなされている。

坏の状況は、古くは南小泉遺跡内では、青葉学園用地内の調査で発見された第3号住居跡（渡部：1983）、仙台バイパス沿いの社屋建築の際に発見された住居跡（結城：1981）に類似するものと思われる。年代的には、青葉学園第3号住居跡から遠方が出土していることより9世紀前半が考えられる。新しくは都市計画街路第9号住居跡に類似し、9世紀末が考えられる。

第19号住居跡、第20号a住居跡→第20号b住居跡という順序が想定される。

次に土壙であるが、第27号土壙は年代決定資料が少ない。第28号土壙は、回転糸切り未調整の土師器坏が主である。またこの中には墨書土器も含まれている。出土した須恵器甕は、格子タタキ目、青海波文を有し、第22号住居跡出土のそれと近似する。しかし土師器、須恵器坏が完形ないし、ほぼ完形に近い存在状況を示すのに、須恵器甕片は小片であり、一括という有り方ではないので、土壙が埋没する過程において混入したものと思われる。

歯車文、細弁蓮華文、宝相華文軒丸瓦、均正唐草文軒平瓦を出土する仙台市安養寺中囲瓦窯跡出土の坏が、1点を除いて回転糸切り未調整であること（東北学院大学考古学研究部：1966）と類似し、9世紀末～10世紀初頭に年代を考えておきたい。

4）中世、近世の遺構、遺物

都市計画街路において、1次調査区に引き続き、今回数多くの遺構を検出した。これらは、中世から近世初期の遺構群である。以下、4次調査区の遺構をまとめてみると、建物跡5棟、土倉跡2基、溝跡3条、墓壙1基、土壙5基がある。その他に調査区内より柱穴が多数検出されている。

第1号掘立柱建物跡（第42図）

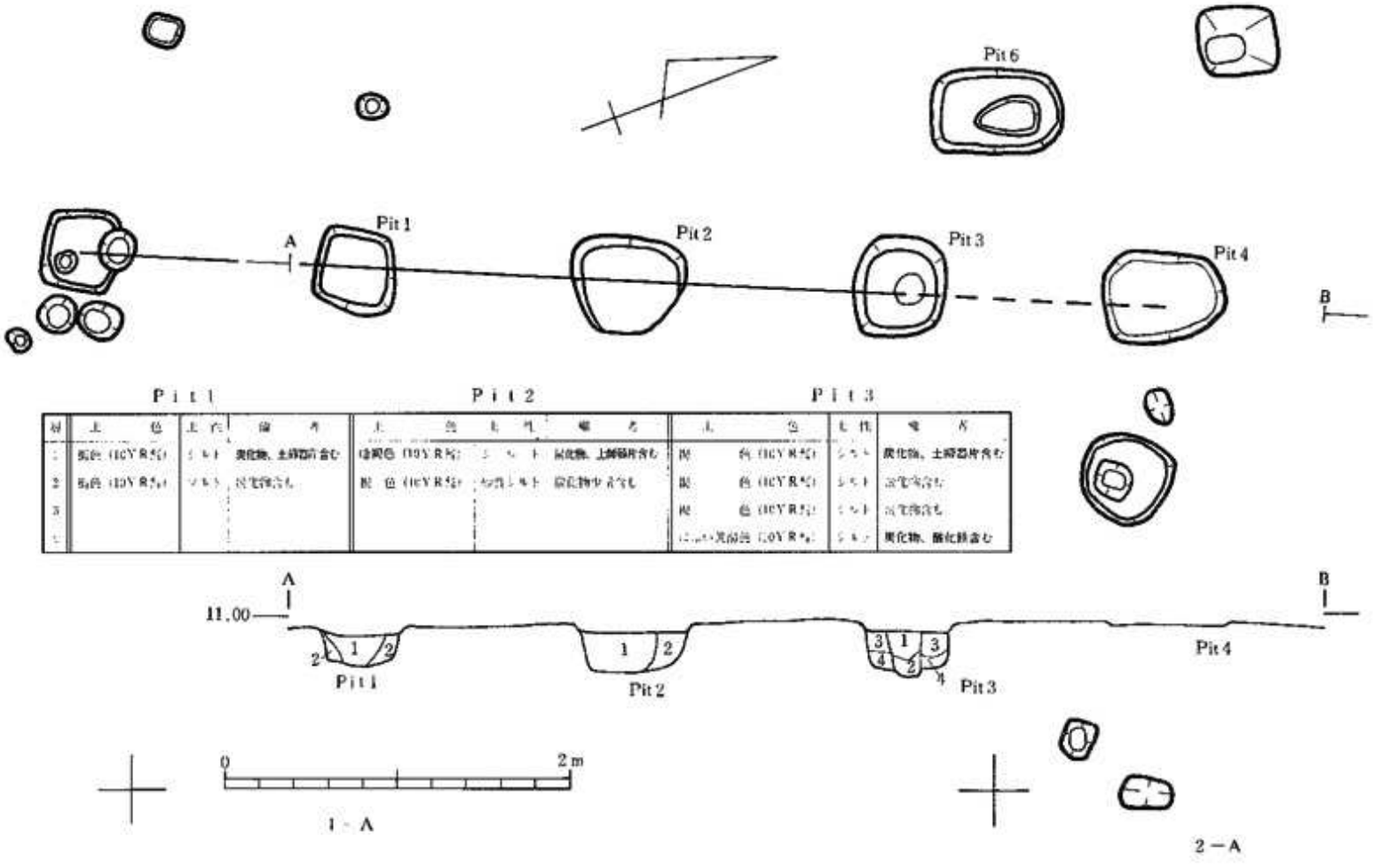
調査区の南西1－B区に存在する。47号溝に切られる。建物は、南北3間（身芯4.74m）かあるいはそれ以上の規模で、柱穴列は建物の西辺に相当するものと考えられる。柱間寸法は、1.5～1.6mで規格性が強い。いずれも直径約20cmの柱穴に50 ～ 60cmの掘り方が伴う。埋土中からわずかに土師器が出土する。時期を決定する資料はないが、切り合い関係等から平安以降～II期（後述）の間と考えられ、規格性に富む点で平安時代の可能性が強い。

第2号掘立柱建物跡（第44図）

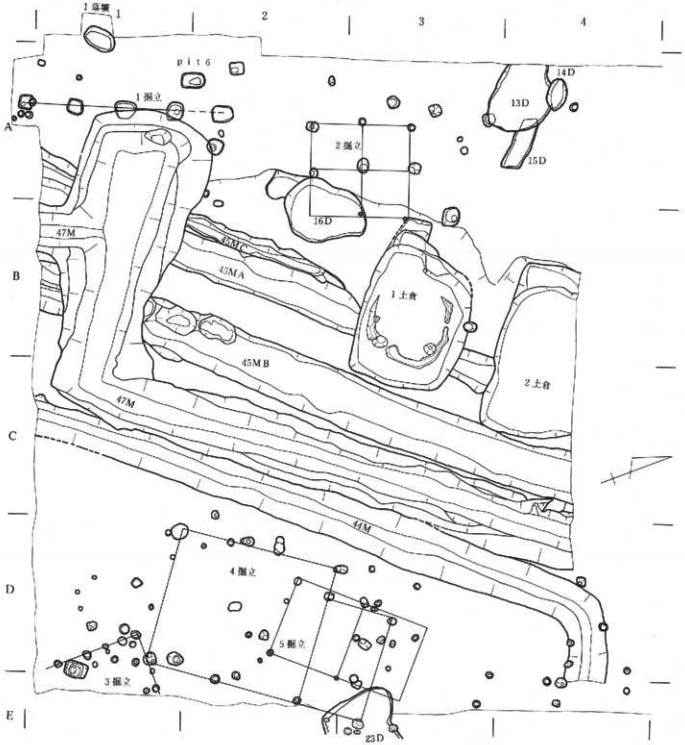
調査区の東側2－A、3－A区に存在する。21号住居跡を切り、16号土壙、1号土倉跡に切られる。2間×2間（東西2.92m、南北3.12m）で総柱式の建物である。柱穴は直径約20cm前後で掘り方を伴う。すでに柱穴上面は削平されており、掘り方の規模や深さは明らかではないが、およそ1辺が30～40cmの掘り方で深さ30cm前後のものであろう。柱穴底面には灰白色土が堆積していた。遺物は、若干の土師器が出土した。時期は明確ではないが、1号建物跡と同様の理由から、およそ平安時代の可能性が考えられる。規模が小さく総柱式であることから倉跡と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第45図）

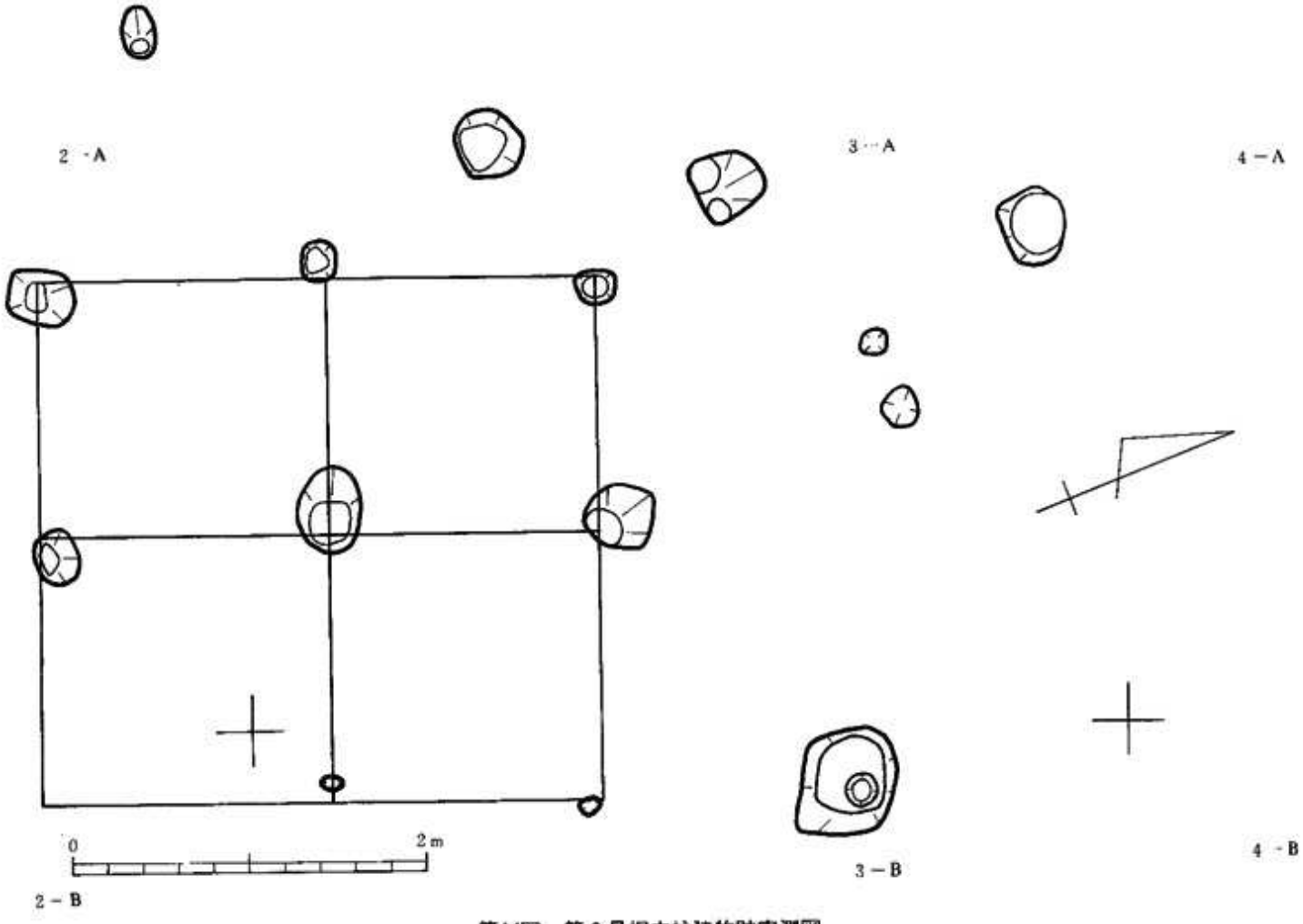
調査区東側2－D区を中心に存在する。22号、23号住居跡、46号溝を切る。切り合い関係は明らかではないが、後述する第4号、5号建物跡とは、その位置関係から前後差がある。23号



第42図　第1号掘立柱建物跡実測図



第43図　遺構配置図(中世～近世)



第44図　第２号掘立柱建物跡実測図

土壙とは同時か古いものと考えられる。間取りは、柱穴がすべてそろわず明らかではないが、2間×2間（東西4.46m、南北5.0m）の南北棟で、さらに北側に2間×1間（東西3.46m、南北2.8m）の部屋が付属する建物跡と理解した。隅柱は総じて大きいのが特徴であるが、柱穴の規模は不統一である。深さも一定ではないが、最も深いもので41cmを測る。時期を決定できる資料はないが、柱穴埋土が黒色シルトで44号溝と共通する。また44号・45号溝と方向が一致するなどの状況証拠から、少なくとも44号溝が機能していた時期と考えてよいであろう。その性格は中世の絵巻物と比較すれば納屋や厩など推定できよう。なお、今回の調査区で埋土が黒色を呈する遺構はおよそ中世の時期と考えられる。このような埋土の特徴は古墳、平安時代の遺構には認めにくい。

第4号掘立柱建物跡（第45図）

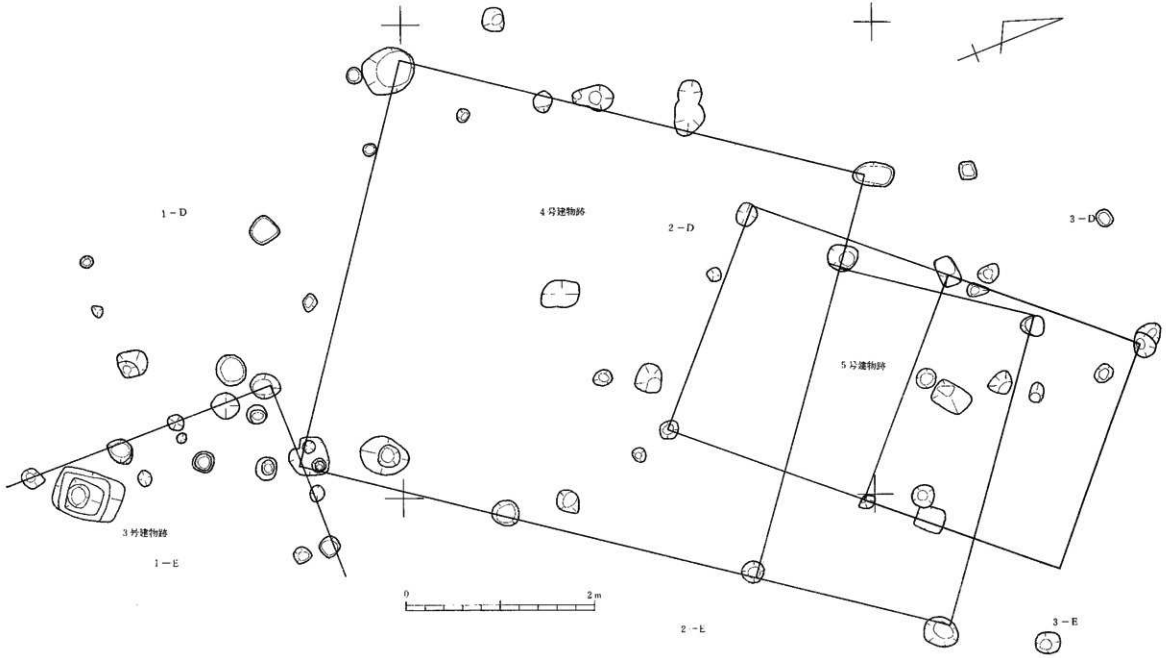
調査区の南東1－D区に存在する。直接切り合う遺構はないが22号住居跡より新しいものと考えられ、3号建物跡とも前後差があろう。規模は明らかではないが、1間×3間（東西1.9m、南北2.6m）以上である。柱穴の規模は、直径20cm前後、深さ10～20cmである。時期決定できる資料はないが埋土の特徴などから3号建物跡などと同様の時期（中世）が考えられる。柱穴が密に並ぶ点も他と異なる。

第5号掘立柱建物跡（第45図）

調査区東側2－D、3－D区に存在する。22号、23号住居跡、46号溝を切る。3号建物跡と前後差があるが、その関係は明らかではない。1間×2間（東西2.4m、南北4.4m）の南北棟である。柱穴は20～30cm、深さ20～30cmである。埋土は、3号、4号建物跡、44号溝と同様黒色シルトである。時期決定できる遺物はないが、3号建物跡と同様の理由から、44号溝が機能していた時期が推定できる。規模を考慮すれば倉や納屋などが想定できようか。

No.6柱穴（第42図）

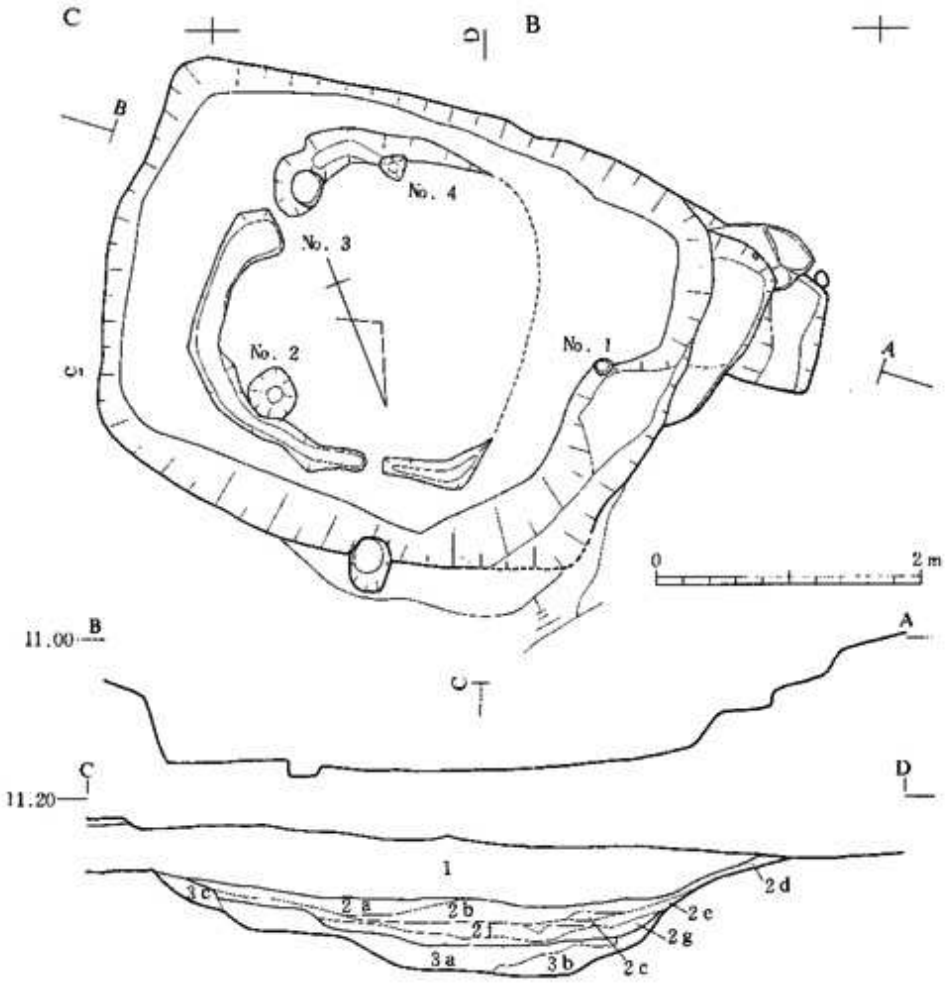
調査区南西部1－A、2－A区の2ライン上に存在する。切り合いは認められない。規模は36cm×22cmで、掘り方は74cm×49cm、深さ61cmを測る。今回の調査では最も規模が大きく、深い柱穴であり、注意をひいた。遺構の配置をみると、後述するⅢ期の遺構すなわち、47号溝、1号、2号土倉跡の西縁が一線で並ぶことや、47号溝が武士の屋敷を区画する堀と考えられ、その先端部（1－A区）付近が入口であると考えられる。こうした状況から、No.6柱穴はどうやら門（正門か）の一部ではないかと推定される。なお、残念ながら、これを裏付けるような遺物は得られなかった。



第45図　第３．４．５号掘立柱建物跡実測図

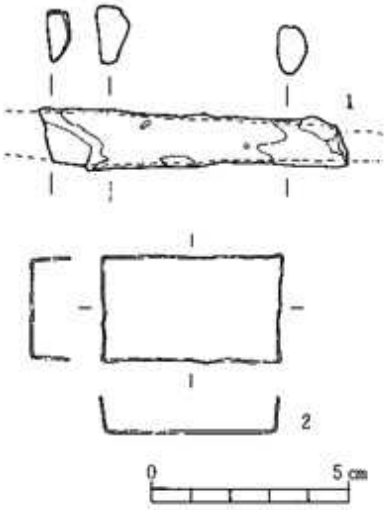
第１号土倉跡（第46、47、53図）

調査区の中央３－Ｂ、３－Ｃ区に存在する。20号住居跡、２号建物跡、45号溝を切る。長方形で竪穴状の土倉に、西側に階段の付設された構造になっている。上倉部分の規模は、上面で東西4.38m 南北3.48m 、また床面で東西 3.5 m 南北2.92m 、深さ88cmを測る。床面上は固く踏みしめられ、また一周り小さい周溝が巡っている。ピットが４個確認され、このうち二等辺三角形に配置されたNo.１～３が柱穴になろうか。柱穴の規模は不揃いで深さは７～15cmを測る。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む、灰白色土混入、焼土出土
2a	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む、褐色の土を斑点状に含む
2b	褐色 (10YR5/4)	シルト	酸化鉄とマンガン粒を多く含む、にぶい黄褐色土を斑点状に含む
2c	褐色 (10YR5/4)	シルト	粘ばり、しまり有り酸化鉄を含む
2d	褐色 (10YR5/4)	シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む
2e	褐色 (10YR5/6)	シルト	酸化鉄とマンガン粒を含む
2f	褐色 (10YR5/6)	シルト	酸化鉄と炭化物を含む
2g	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘質シルト	酸化鉄を含む
3a	褐色 (10YR5/6)	シルト	酸化鉄を含む、にぶい黄褐色土をまだらに含む
3b	褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	粘り有り、炭化物、酸化鉄を少量含む
3c	褐色 (10YR5/4)	シルト	若干しまりと粘ばり有り、炭化物、酸化鉄を含む

第46図　第１号土倉跡平、断面図



◀ 第47図
第1号土倉跡出土遺物

図版	種別	出土位置	備考
47 1	鉄製刀子	埋土1層	残存部 長さ7.5 幅1.5
47・2	銅製小箱	階段2段目 壁面密着	(縦) (横) (高さ) 4.4×2.6×1.0 厚さ0.05

階段部は、西壁南寄りに付設されており、長さ約1.5m、幅0.9～1.0mを測る。階段は3段確認された。

埋土は大別3層で構成され1層は黄褐色～褐色シルトで土師器片や馬歯を含む。2層、3層は褐色シルトを基調としており、酸化鉄を多く含む。2層中には炭化物を多く含む。

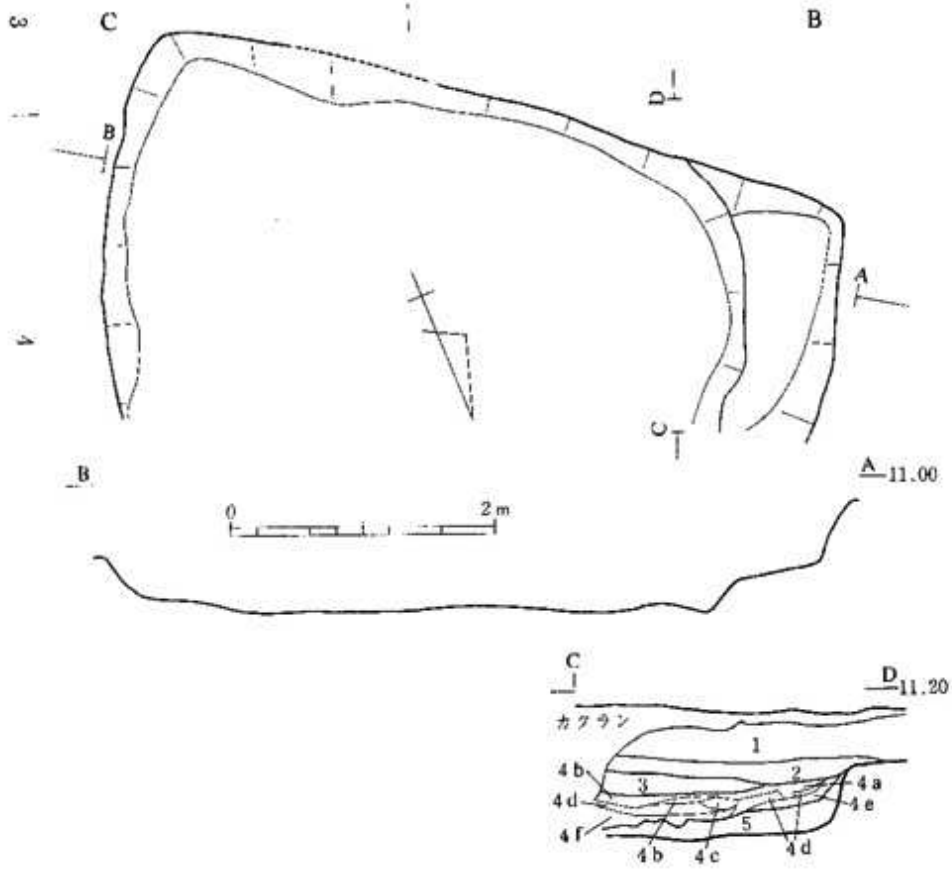
出土遺物は、時期決定できるものはなく、1層より刀子片（第47図 1）、階段（2段目）南壁に密着して銅製小型箱がある。他に弥生～平安時代の遺物がある。埋土1層は、47号溝、2号土倉跡とほぼ共通するものであり、2号土倉跡と並列する。また、47号溝に規制された配置を取っていると判断される。したがって、直接年代を知ることはできないが、47号溝が機能していた時期と考えることができるであろう。県内では、中世以後の土倉跡と考えられるものは高清水町観音沢遺跡や仙台市今泉城跡などで報告されているが、明確な階段を伴う例はない。

第2号土倉跡（第48図）

調査区中央4－B、4－C区に存在する。20号住居跡、45号溝を切る。北側は撹乱を受けている。1号土倉跡と同様東西に長軸をもつものと考えられる。規模は、東西5.62m、南北3m以上を測る。長方形を呈する形態と考えられる。細部をみると、土倉部（東西約4.7m）の西側にテラス状の施設（幅約40～70cm）が付属する。深さは81.5cmを測る。1号土倉跡のような明確な階段は確認されていないが、前述の西側のテラス部は、入口を意識しての施設であろう。

埋土は、大別5層で構成され、1層は暗褐色シルトで1号土倉跡埋土1層と連続するものである。2層はにぶい黄褐色シルト、3層は褐色シルト、4層は明黄褐色～灰黄褐色粘質シルトで、鉄分を多く含む。5層は黄褐色砂質シルトである。このうち、4、5層中にはグライ層を一部に含む。

出土遺物は、弥生～平安時代の遺物が若干あるが、この遺構に伴うものはない。しかし、



層		土色		土性	備考
埋1＝a		暗褐色	10YR3/4	シルト	しまり有り、須恵器片、土師器片、マンガン少量含む
埋2		にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	しまり有り、土師器片、炭化物、黄褐色土を少量含む
埋3		褐色	10YR4/4	シルト	しまり有り、炭化物、土師器片を少量含む
埋4	a	明黄褐色	10YR6/6	粘質シルト	しまり有り、焼土を少量含む、グライ化した土を少量含む
	b	暗褐色色	10YR3/4	粘質シルト	しまり有り、炭化物、グライ化した土を少量含む
	c	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	しまり有り、土師器片、炭化物、鉄分をそれぞれ少量含む、グライ化層
	d	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまり有り、鉄分、炭化物を含む、グライ化層
	e	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	しまり有り、鉄分を含む、グライ化層
	f	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまり有り、炭化物、鉄分、マンガンを少量含む、グライ化層
埋5		黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	しまり有り、グライ化した土を少量含む

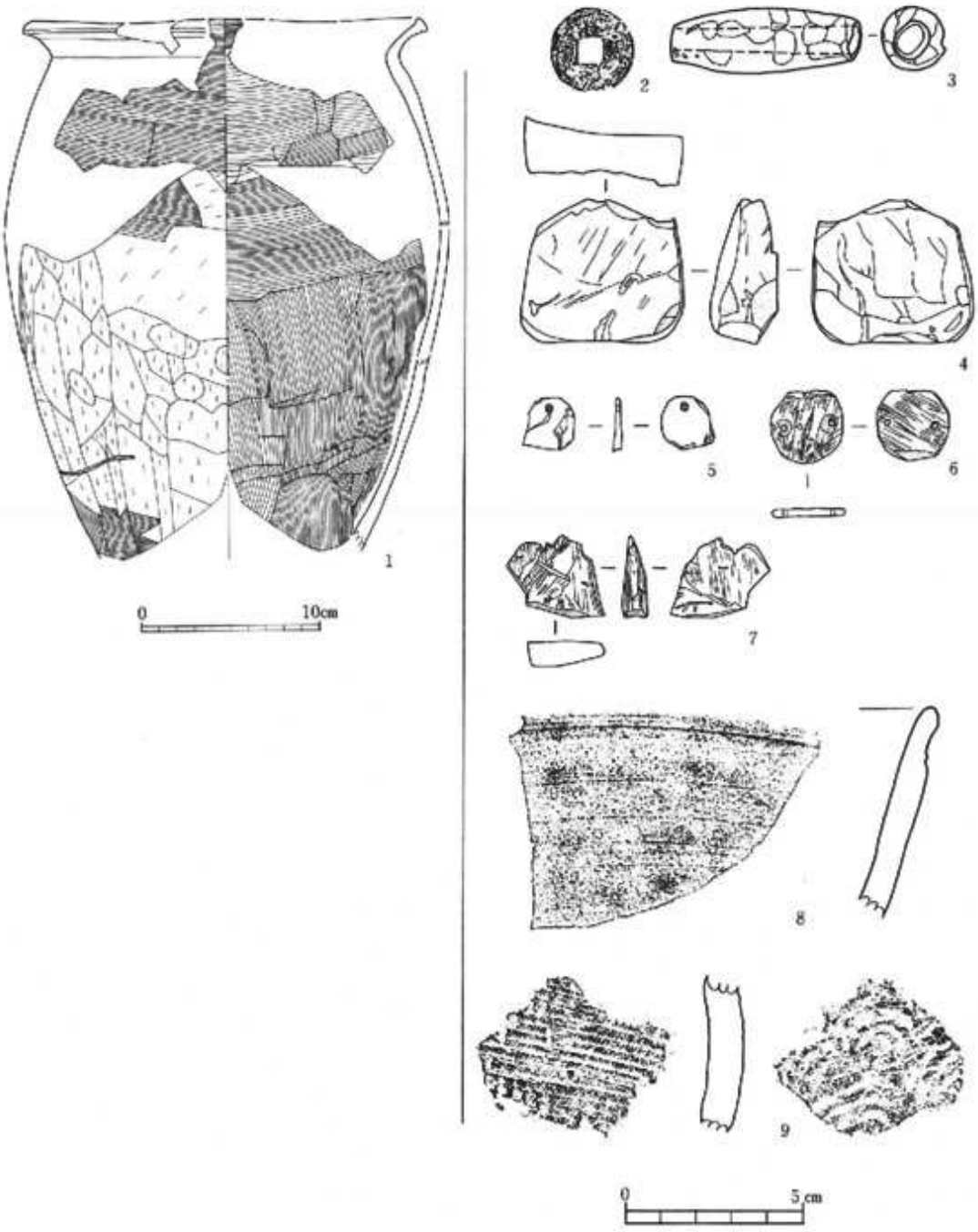
第48図　第2号土倉跡平、断面図

1号土倉跡の場合と同様に47号溝が機能していた時期とみてよいであろう。

第44号溝跡（第30、49、52図）

調査区東側1－C区から4－D区にかけて、南西～北東に通り4－D区で屈曲し東南東に伸びる。46号溝、19号、23号住居跡を切り、47号溝に切られる。幅はほぼ一定で検出面で約1.2m、底面幅約30cmで逆台形を呈する。深さは4－D区東端で約55cm（標高10.60m）、2－C区で約70cm（標高10.35m）、1－C区約57cm（標高10.25m）で、南西側が低くなる。

埋土は場所により多少異なるが、大別3層で構成され、1，2層が黒色ないし黒褐色シルトで2層中には明黄褐色シルトブロックを含む。3層は褐灰色ないしにぶい黄褐色シルト層で、



図番	種別	器種	特徴	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
49－1	土師器	長胴甕	埋3	口縁部ヨコナデ 体部上半ヘラナデ（ヨコ） 体部下半ヘラ削り（タテ）、一部ヘラナデ（ヨコ）	口縁部ヨコナデ 体部上半ヘラナデ（ヨコ） 体部下半ヘラナデ（タテ）	22.8	----	----	
49－2	銅製品	古銭	埋1	富寿通宝（篆書）北宋皇祐3年1.056年					
49－3	土製品	土錘	埋1	筒押さえによる変形　長さ5.3　幅1.8					
49－4	石製品	砥石	埋3	長さ4.0　幅4.4　厚さ1.9					
49－5	石製模造品	有孔円盤	埋2	径1.5　厚さ0.3					
49－6	石製模造品	有孔円盤	埋2	径2.0　厚さ0.2					
49－7	石製模造品	剣形？	埋2	径2.3　厚さ0.7					
49－8	弥生土器	壺	遺3	横ナデ	横ナデ				
49－9	弥生土器	壺	遺1	平行タタキ	青海波文のちナデ				

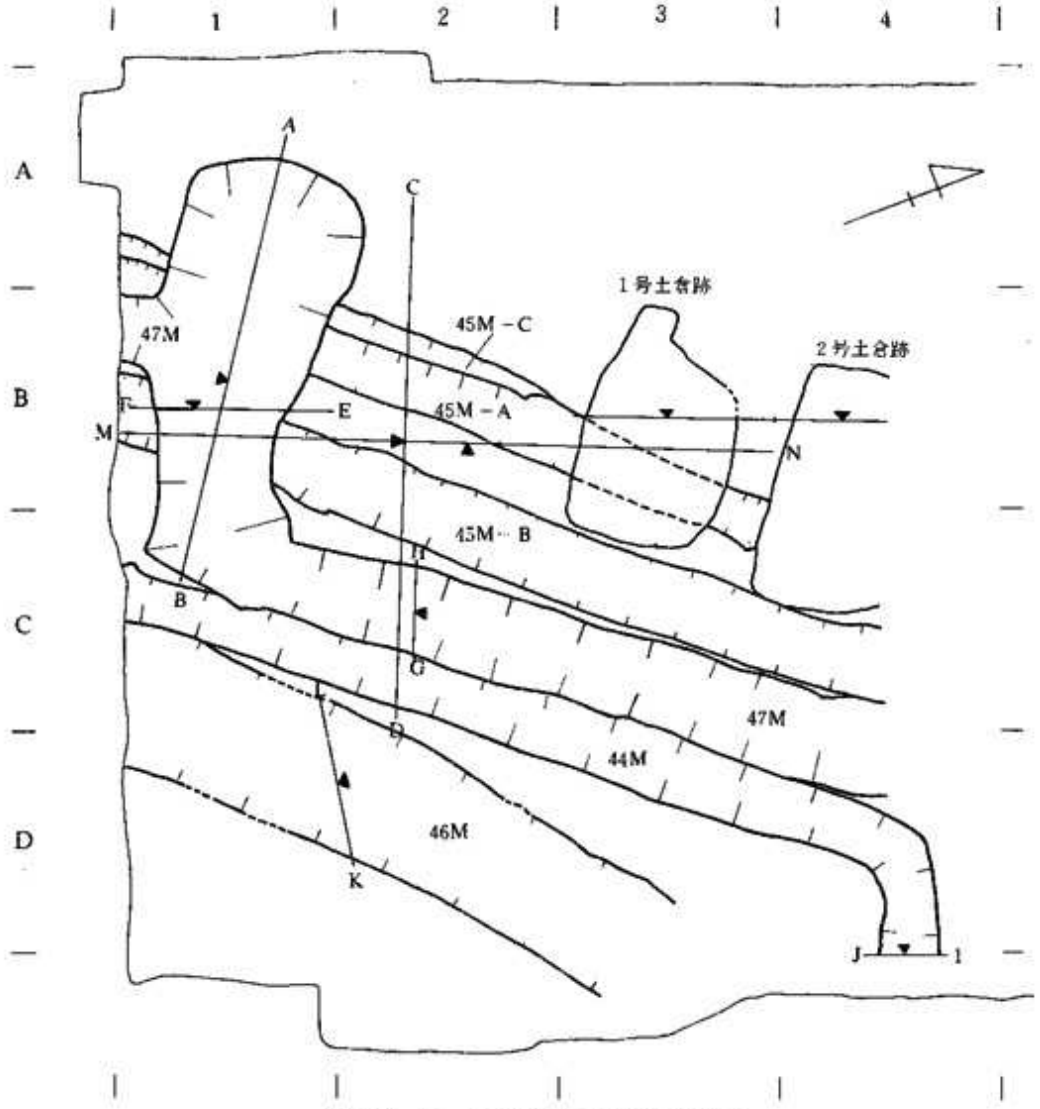
第49図　第44号溝跡出土遺物

グライ化しているがその発達は貧弱である。グライ層の発達が悪いことから、空堀であった可能性もある。

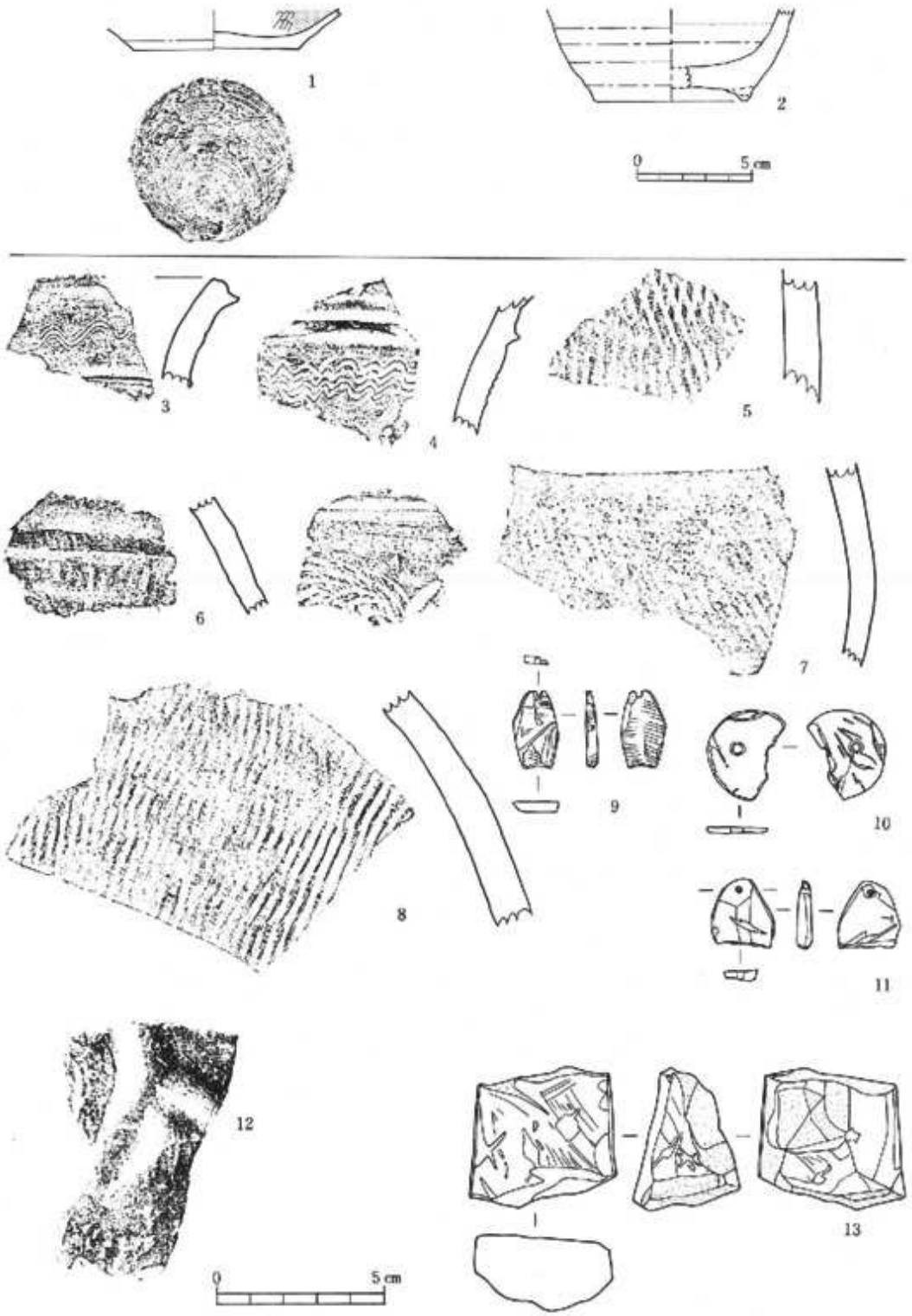
遺物は溝に伴わないものが多い。そのうち、2－C区の南壁から底面にかけて、19号住居跡を切った時に転落したと考えられる土師器甕（第49図1）が一括出土した。各層より出土した遺物をまとめると以下のようになる。

埋1層：県内産無釉陶器（甕、捕鉢）、常滑甕、瀬戸天目茶碗、弥生土器、石器、土師器、須恵器、土錘、鉄製品、北宋銭（嘉祐通宝）

埋2層：県内産無釉陶器（甕）、常滑甕、産地不明無釉陶器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、石製模造品



第50図　溝、土倉跡の断面図位置と方向



第51図　第45号溝跡出土遺物

図版	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
51－1	土師器	坏	埋2層	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ミガキ 黒色処理	—	7.2		
51－2	須恵器	高台付椀	埋2層	ロクロ調整 底部近くヘラ削り後ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整		6.6	—	
51－3	須恵器	甕	埋1層	ナデ後雲箱波状文	ナデ			—	
51－4	須恵器	甕	埋1層	ナデ後櫛描波状文	ナデ	—			
51－5	須恵器	甕	埋1層	平行タタキ	ナデ		—	—	
51－6	須恵器	甕	埋3層	ナデ、平行タタキ	ヘラナデ、青海波文			—	
51－7	須恵器	甕	埋3層	格子タタキ後ナデ	ナデ	—			
51－8	須恵器	甕	埋1層	平行タタキ	ナデ			—	
51－9	石製模造品	剣形	埋2層	長さ2.3 幅1.4 厚さ0.3					
51－10	石製模造品	石孔円盤	埋2層	残存部 径1.8 厚さ0.2					
51－11	石製模造品	剣形	埋3層	長さ2.0 幅1.9 厚さ0.3					
51－12	石製品	板状	埋3層	長さ7.5 幅5.0 厚さ0.8					
51－13	石製品	砥石	埋2層	長さ4.1 幅1.0 厚さ2.2					

埋3層：県内産無釉陶器（擂鉢）、産地不明無釉陶器（押印あり）、弥生土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、砥石、瓦

図示し得える遺物は、第49図に示したが、このうち2～4がこの溝に伴うものと考えられる。

この溝の年代は、県内産陶器、常滑甕などから、およそ鎌倉時代後半から南北朝時代と考えられる。

第45号溝跡（第30、51、52、53図）

調査区のほぼ中央1－B区から4－C区にかけて、南西～北東に通っている。44号溝と平行に通っている。この溝はさらに3条の溝（A・B・C）に分かれている。47号溝、1号土倉跡、2号土倉跡に切られ、25号住居跡を切る。規模は幅がほぼ一定で、上端は約4.6m、深さはA・B溝間の平坦面で約60cmである。A溝は上幅約1.1m、底面幅約70cm、深さは検出面から75cmである。B溝は上幅約1.6m、底面幅約95cm、深さは検出面から98cmである。C溝は上幅64cm、底面幅約25cm、深さは検出面から67cmである。また各溝の標高はA溝が10.25m、B溝が約10.20mでほぼ一定である。C溝は南端で約10.30m、2－B区で約10.45mで南側に下がることが確認されている。各溝の変遷は、A・B溝が埋土上部を共有しており、ほぼ同時に機能したと考えられる。C溝はA溝に切られている。したがって、この45号溝は少なくとも一度は改修を受けたものと判断される。

埋土は、1層黒褐色粘土質シルト、2層褐灰色粘土質シルトでA・B溝ともに共通である。A・B溝内の埋土にはグライ化が著しい。1－B区から2－B区にかけて、A・B溝間の平坦部には3ヶ所に浅い土壙が検出された。性格は不明である。各層より出土した遺物をまとめると以下のようになる。

埋1層：県内産無釉陶器（片口部のある擂鉢）、常滑甕、灰釉陶器（瓶子？）、弥生土器、石器、土師器、須恵器、石製模造品、砥石、瓦

埋２層：県内産無釉陶器（擂鉢）、常滑甕、灰釉陶器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、石製模造品

Ａ溝：須恵器系陶器（？）、弥生土器、石器、土師器、須恵器

Ｂ溝：県内産無釉陶器（擂鉢）、板碑片、弥生土器、石器、土師器、須恵器、石製模造品、瓦

Ｃ溝：弥生土器、石器、土師器、須恵器

Ｂ溝出土の板碑片（第15図12）には梵字の一部が認められ、「ラ」あるいは「キャ」の可能性がある。図示し得えたもののうち、この溝に伴うと考えられるものは他に第51図13の砥石がある。溝の年代は、県内産無釉陶器や常滑甕から、44号溝同様鎌倉時代後半から南北朝時代と考えられる。しかし瀬戸系の灰釉陶器や須恵器系陶器らしきものが出土することから、44号溝より古い時期から機能していた可能性が充分に考えられる。

第47号溝跡（第30、52、53、54、55図）

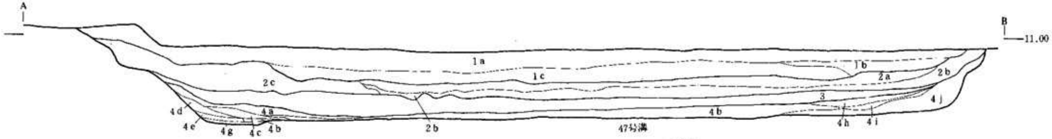
調査区中央から東側の１－Ｃ区から４－Ｄ区にかけて存在する。さらに１－Ｃ区で東へ屈曲し１－Ａ区まで伸びる。また、１－Ｂ区ではこの溝に接続し、南へ伸びる溝の一部が確認されている。44号、45号溝、１号掘立柱建物跡、25号住居跡を切る。規模は、上端が１－Ａ区で最も広く約4.1m、底面幅約1.5mである。北東に伸びる部分では幅はほぼ一定しており、上端約1.8m、底面幅約50cmである。深さは１－Ａ区西端で1.02m、１－Ｂ区中央で81cm、２－Ｃ区95cmである。また、１－Ｂ区の南に伸びる溝は、上端幅約1.5ｍ、底面幅約40cm、深さ75cmである。この溝の底面はＬ字形の部分の溝底とは高低差があり、20～25cm高い。断面形は１－Ｃ区から４－Ｄ区にかけては、およそＶ字形を呈し、１－Ａ、１－Ｂ区は、鍋底形ないしは逆台形になる。また１－Ａ区付近は中位に段をもつ。

埋土は大別４層で構成され、１、２層は褐色シルト、３層はにぶい黄褐色粘質シルトでグライ化している。４層は褐色ないしにぶい黄褐色を呈する粘土、砂質シルト、砂の互層である。このうち１－Ａ、１－Ｂ区の１層中には、灰白色シルトのブロックを特徴的に含む。３、４層の特徴から、常時水が流入していたものと考えられ、また溝の平面形から、館あるいは、屋敷を区画する堀として機能していたのであろう。また、、溝の配置から１－Ａ区は、入口部分に相当するものであろう。遺物は、各層毎にまとめると以下のようになる。

埋１層：細線蓮弁文碗（青磁）、県内産（？）擂鉢、常滑甕、灰釉陶器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、瓦、砥石、石製模造品、釘、鉄滓、馬歯、炭化米

埋２層：染付唐草文碗（明）、青磁碗、土師質土器皿（灯明皿）、県内産無釉陶器（擂鉢）、煙管（雁首）、弥生土器、石器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石製模造品、釘、鉄滓

埋３層：染付唐草文碗（明）、常滑甕、煙管片、弥生土器、石器、土師器、須恵器、石製模造品、鉄滓

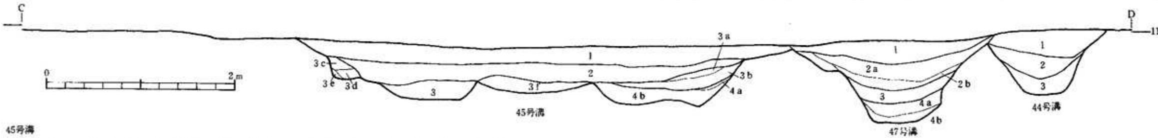


44号溝

層	土色	土性	備考
1	黒色 (10YR2/1)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分、土師器片少量含む、褐色ブロック状に含む、グライ層
2	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまりあり、鉄分、炭化物少量含む、明黄褐色土ブロック状に含む、グライ層
3	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまりあり、鉄分、炭化物含む、にぶい黄褐色土半分位含むグライ層

47号溝

層	土色	土性	備考
1a	褐色 (10YR4/4)	シルト	マンガン粒、炭化物を含む
1b	褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化鉄を極少量含む、灰白色の土を粒状に含む
1c	褐色 (10YR4/4)	シルト	マンガン粒、炭化物、灰白色の土を含む
2a	褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化鉄、マンガン粒含む
2b	褐色 (10YR4/4)	シルト	ねばり若干あり、酸化鉄含む
2c	褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化鉄、炭化物含む、暗褐色土と黄褐色土多量に含む酸化鉄含むグライ層
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	酸化鉄含むグライ層
4a	褐色 (10YR4/4)	砂	酸化鉄を含む、にぶい黄褐色の粘土を含む
4b	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土	酸化鉄少量含む
4c	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	酸化鉄少量含む
4d	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	酸化鉄と炭化物含む
4e	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	酸化鉄少量含む
4f	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	酸化鉄とマンガン粒を含む
4g	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	酸化鉄とマンガン粒を含む、暗褐色土ブロック状に含む
4h	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
4i	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
4j	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	酸化鉄を含む



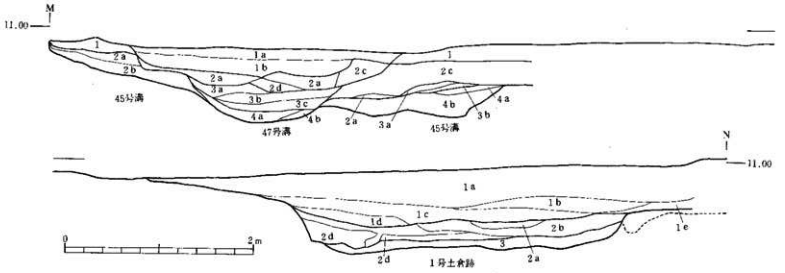
45号溝

層	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまりあり、土師器片、鉄分含むグライ層
2	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分、マンガン含むグライ層
3	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまりややあり、鉄分、炭化物、土師器片含む、グライ層
3a	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分含む、にぶい黄褐色土を帯状に含む
3b	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分、土師器片含むグライ層
3c	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまりあり、土師器片、鉄分を含む黒褐色土を塊状に含む、グライ層
3d	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまりあり、鉄分、土師器片を含む、グライ層
3e	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質シルト	しまりあり、鉄分を含む、グライ層
3f	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまりあり、土師器片、鉄分、マンガン含むにぶい黄褐色土ブロック状に含むグライ層
4a	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質シルト	しまりあり、鉄分、マンガンを含むグライ層
4b	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまりあり、鉄分、マンガンを含む、にぶい黄褐色土ブロック状に含むグライ層

44号溝

層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	しまりあり、炭化物、マンガン粒、遺物を含む
2a	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	しまりあり、炭化物少量含む、灰褐色、黒褐色、のブロック多量に含む
2b	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまりあり、やや粘性あり、炭化物、土師器片含む、ややグライ化
2c	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	しまりあり、黄褐色土ブロック状に含む
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、鉄分、遺物含む、黄褐色土ブロック状に含む
4a	明黄褐色 (10YR7/6)	粘質シルト	しまりあり、鉄分含む、褐灰色土ブロック状に含む、グライ化の土少量含む
4b	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質シルト	しまりややあり、鉄分含む、黒褐色土ブロックを含む

第52図　第44．45．47号溝断面図



45号溝

層	上	色	土	性	備	考
1	褐	色	7.5YR5/4	シルト	しまりあり、酸化鉄、マンガン、炭化物、土師器片含む	
2a	褐	色	10YR5/4	粘質シルト	しまりあり、酸化鉄、炭化物少量含む	
2b	にぶい黄褐色		10YR5/4	粘質シルト	しまりあり、酸化鉄、炭化物、土師器片含む	
2c	灰黄褐色		10YR5/2	粘質シルト	しまりあり、やや粘土、炭化物、土師器片含む	
2d	暗褐色		10YR5/3	粘質シルト	しまりあり、やや粘性、酸化鉄、炭化物含む	
3a	暗褐色		10YR5/3	シルト	しまりあり、酸化鉄含む	
3b	暗褐色		10YR5/3	粘質シルト	しまりあり、酸化鉄、土師器片含む	
4a	灰黄褐色		10YR5/2	粘質シルト	しまりなし、粘性大、酸化鉄少量含む	
4b	黒灰色		10YR5/1	粘質シルト	しまりなし、粘性大、炭化物、酸化鉄、土師器片土師器片含む、灰黄褐色土、まだら状に含む	

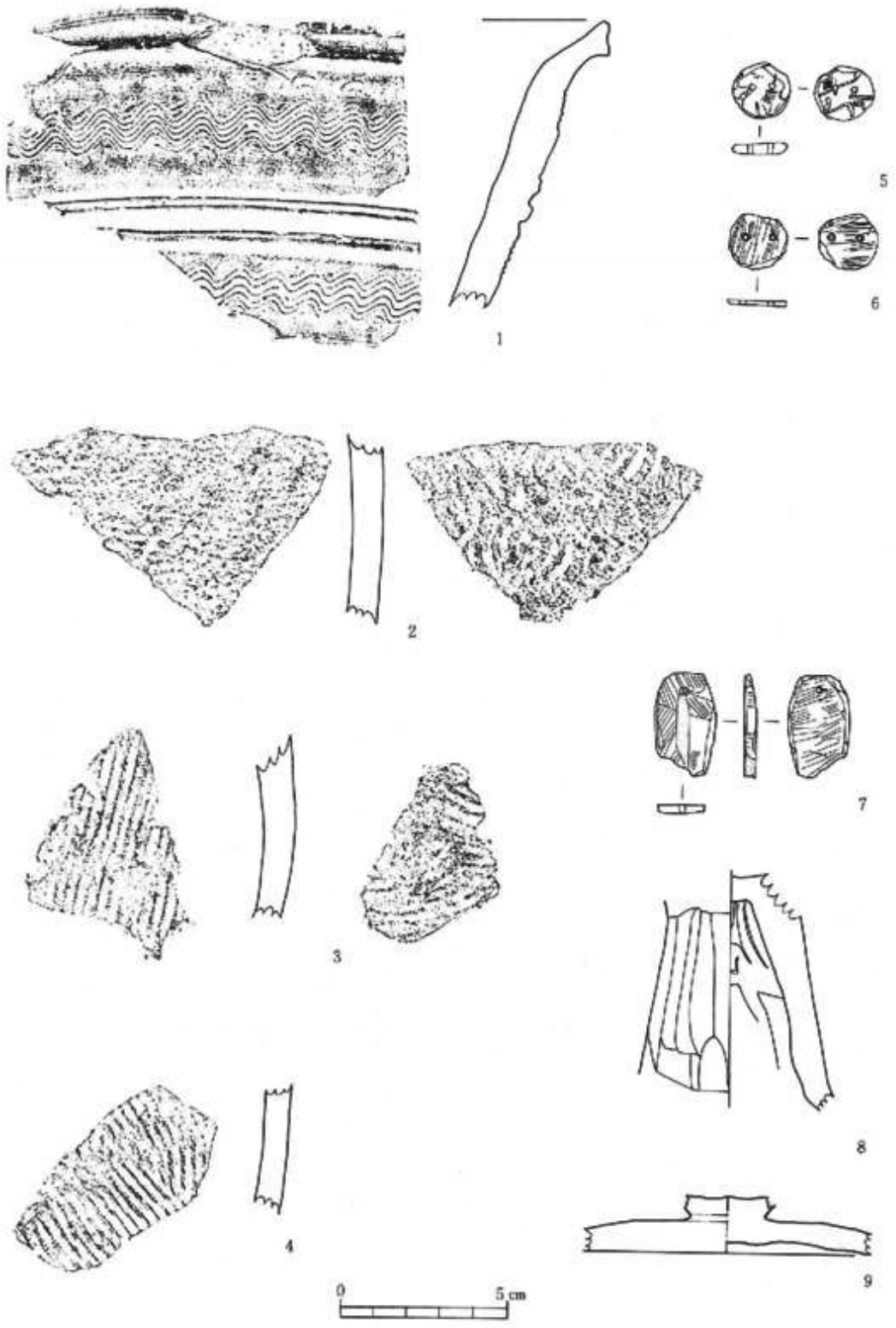
47号溝

層	上	色	土	性	備	考
1a	褐	色	10YR5/4	シルト	しまりあり、酸化鉄、土師器片含む	
1b	にぶい黄褐色		10YR5/4	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片少量含む	
2a	黒	色	7.5YR5/1	粘質シルト	しまりなし、炭化物含む	
2b	褐	色	7.5YR5/4	粘質シルト	明黄褐色土をブロック状に含む	
2c	にぶい黄褐色		10YR5/3	粘質シルト	しまりなし、酸化鉄含む	
3a	褐	色	10YR5/4	粘	土	しまりなし
3b	にぶい黄褐色		10YR5/4	粘質シルト	しまりなし、酸化鉄少量含む	
3c	にぶい黄褐色		10YR5/4	粘	土	しまりなし、酸化鉄含む
4a	にぶい黄褐色		10YR5/4	粘質シルト	しまりなし、炭化物少量含む	
4b	にぶい黄褐色		10YR5/4	粘質シルト	しまりなし、粘性大	

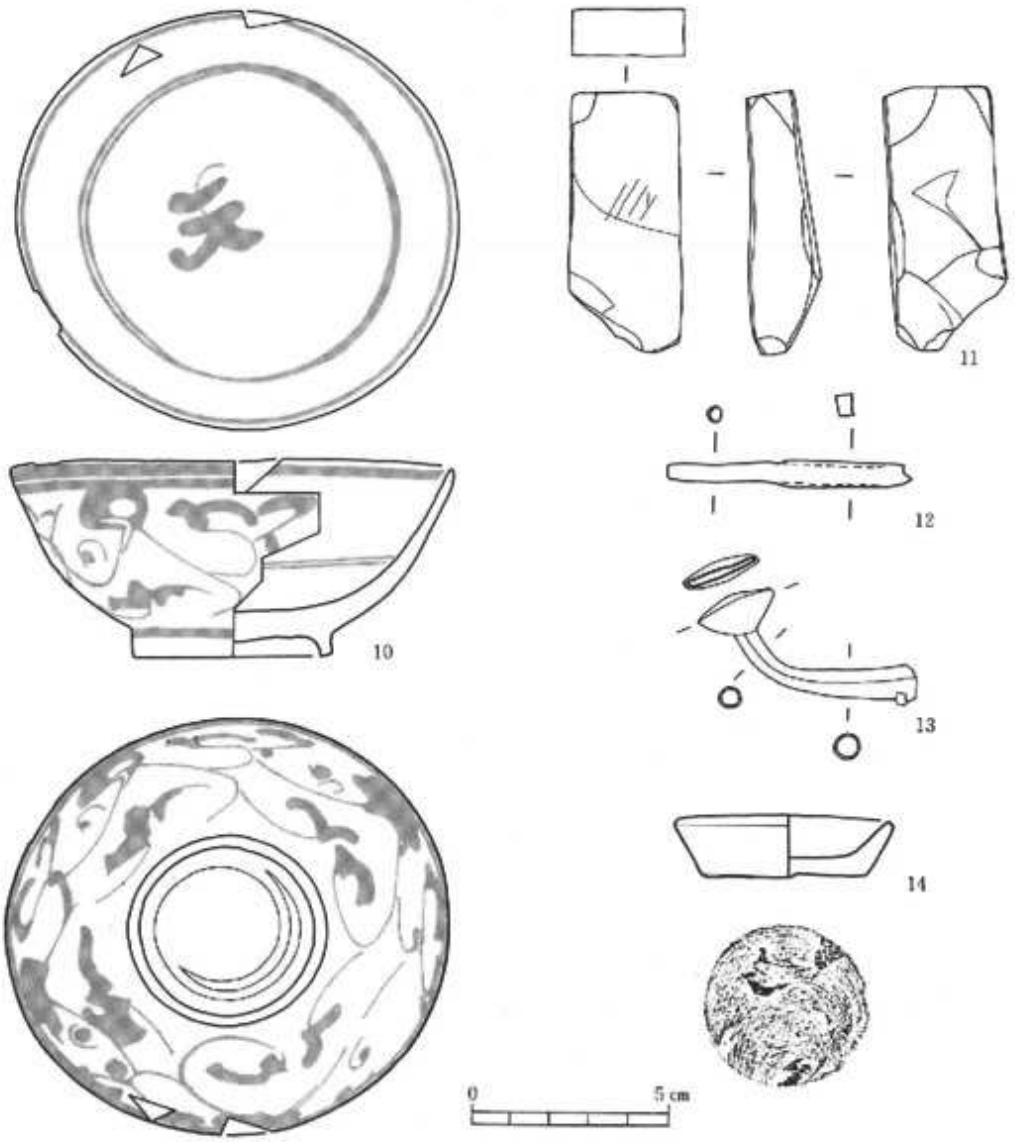
1号土倉

層	上	色	土	性	備	考
1a	にぶい黄褐色		10YR5/4	シルト	しまりあり、炭化物少量、土師器片含む、竹（芝の跡）含む	
1b	にぶい黄褐色		10YR5/4	シルト	しまりあり、炭化物を少量含む	
1c	褐	色	7.5YR5/4	粘質シルト	しまりなし、土師器片、炭化物含む（炭化物少量）	
1d	暗褐色		10YR5/3	粘質シルト	しまりあり	
1e	褐	色	10YR5/4	シルト	しまりあり	
2a	黒	色	10YR5/1	シルト	着干しまりあり、炭化物、酸化鉄少量含む	
2b	黒	色	10YR5/1	シルト	着干しまり、粘りあり、炭化物、酸化鉄少量含む	
2c	褐	色	10YR5/4	シルト	若干しまり、粘りあり、炭化物、酸化鉄少量含む	
2d	にぶい黄褐色		10YR5/4	粘質シルト	酸化鉄含む	
3	褐	色	10YR5/4	シルト	酸化鉄含む、にぶい黄褐色土をまだら状に含む	

第53図　第45・47号溝、1号土倉跡断面図



第54図　第47号溝跡出土遺物Ⅰ



第55図　第47号溝跡出土遺物Ⅱ

図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
54－1	須恵器	器台	埋2層	ナデ後横描波状文	ナデ	—	—	—	
54－2	須恵器	甕	埋2層	格子タタキ	青海波文	—	—	—	
54－3	須恵器	甕	埋1層	平行タタキ	青海波文	—	—	—	
54－4	須恵器	甕	埋1層	平行タタキ	ナデ	—	—	—	
54－5	石製品	有孔円盤	埋1層	径 1.7　厚さ 0.3					
54－6	石製品	有孔円盤	埋3層	径 1.7　厚さ 0.1					
54－7	石製模造品	剣形	埋2層	長さ 3.1　幅 1.8　厚さ 0.3					
54－8	土師器	高台付坏	埋1層	ナデ	シボリ	—	—	—	
54－9	須恵器	蓋	埋3層	ロクロ調整、回転ヘラ削り	ロクロ調整	—	—	—	
55－10	磁器	碗(染付)	埋3層	(文様)口縁部－界線(複線) 体部－唐草文 高台－界線	(文様)口縁部－界線 体部－界線(複線) 見込－文字か？	11.2	5.0	5.0	内面貫入多い
55－11	石製品	砥石	埋1層	長さ 6.7　幅 2.3　厚さ 1.1					
55－12	鉄製品	釘	埋1層	長さ 6.2　厚さ 0.6					
55－13	鋼製品	煙管	埋2層						
55－14	土師質土器	灯明皿	埋2層	ロクロ調整 底部－回転糸切り	ロクロ調整	5.6	4.0	1.6	カーボン 若干付着

埋4層：常滑甕、弥生土器、石器、土師器、須恵器

図示し得えるものは、第54、55図に示した。このうち、この溝に伴うと考えられるものは、第55図10～14である。10は明の染付碗で唐草文はかなり崩れている。見込には界線と吉祥字(?)がある。畳付にも釉がみられ、さらに砂粒が付着している。高台内には兜巾状の削り痕が認められる。この碗は小野氏分類のF群（小野正敏：1982）に対応するものと考えられ、16世紀末～17世紀初の所産であろう。また13は煙管の雁首であるが、頭部が大きく屈曲する点や、火皿部が大きい点は、江戸時代初期ころの特徴といえよう。

溝の年代は、明染付碗や煙管の出土から、およそ桃山～江戸初期ころと考えられる。

第13号土壙（第56図）

調査区西側3－A、4－A区に存在する。14号、15号土壙を切る。規模は長軸2.30m以上、短軸1.90mを測り、不定形ではあるが楕円形を基調とするものであろう。深さは6～8cmである。埋土は、暗褐色砂質シルトの単層である。遺物は、わずかに土師器片が出土しているが、時期は明らかではない。後述する14号、15号土壙を切っていることから、およそ中世の時期であろう。

第14号土壙（第56図）

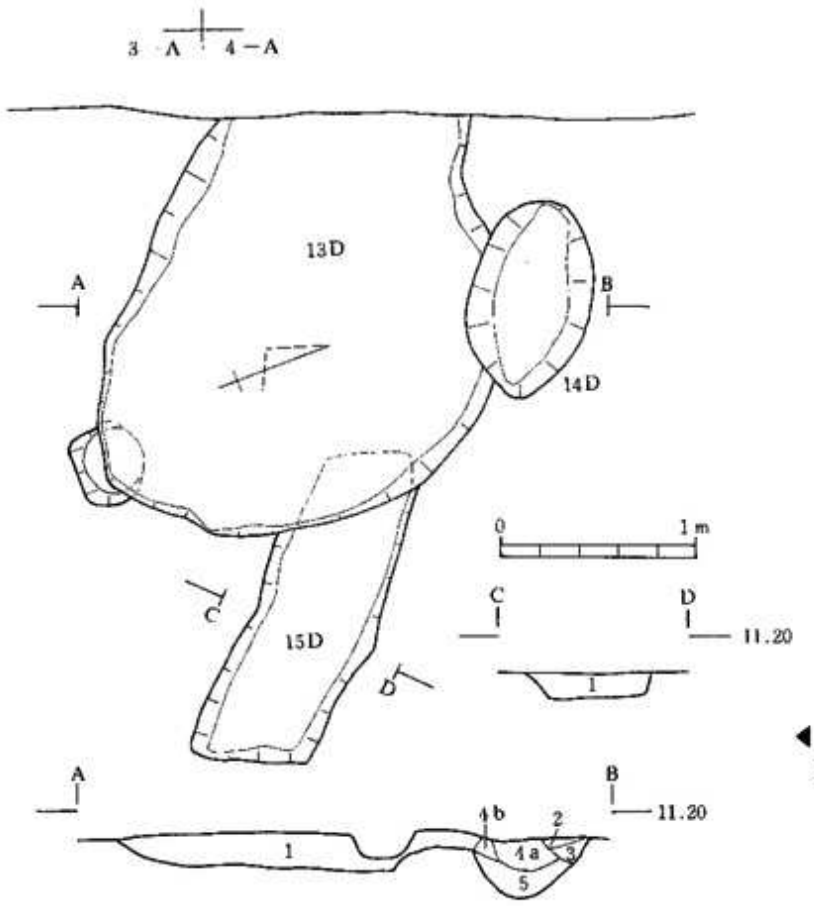
調査区西側4－A区に存在する。13号土壙に切られる。規模は長軸1.01m、短軸0.61mを測り深さ約30cmである。形態は楕円形を呈する。埋土は4層で構成され、1層（図2層）は黄褐色砂質シルト、2層（図3層）はにぶい黄褐色砂質シルト、3層（図4層）は2層に細分され、aは黒色シルト、bは黒褐色シルトである。4層（図5層）は灰黄褐色シルトである。このうち1、2層は土壙と無関係のものであろう。遺物は土師器の細片が出土しているが、時期は明らかではない。埋土中に黒色シルトの堆積が認められ、3号建物跡で述べた理由から中世のものと推定される。およそ44号溝と前後する時期と理解したい。

第15号土壙（第56図）

調査区西側4－A区に存在する。13号土壙に切られ、20号住居跡を切る。規模は長軸1.71m短軸0.61mを測り、深さ13cmである。形態は長方形を呈する。埋土は黒色粘質シルトの単層である。遺物は、土師器、須恵器の細片が出土するが、時期は明らかではない。20号住居跡を切ることや埋土が黒色を呈する点で、14号土壙と同様の時期と推定される。

第16号土壙（第57図）

調査区西側2－A、2－B区付近に存在する。2号建物跡を切る。規模は長軸2.70m、短軸1.92m、深さ約24cmである。形態は不整楕円形で南側にピットが接する。埋土は黄褐色砂質シルトの単層である。直接時期を決定する遺物はない。この土壙は、47号溝の西端と2号土倉跡の西壁を結ぶラインより東側が一段下がり、これと土壙の西壁が一致する点や調査時に土倉跡



◀ 第56図
第13、14、15号土壙
平、断面図

A～B

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	しまりあり、にぶい黄褐色土斑状に含む、土師器片含む
2	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	しまりあり
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	しまりあり
4a	黒色 (10YR3/1)	シルト	しまりあり
4b	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	しまりあり、にぶい黄褐色土ブロック状に含む
5	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	しまりあり

C～D

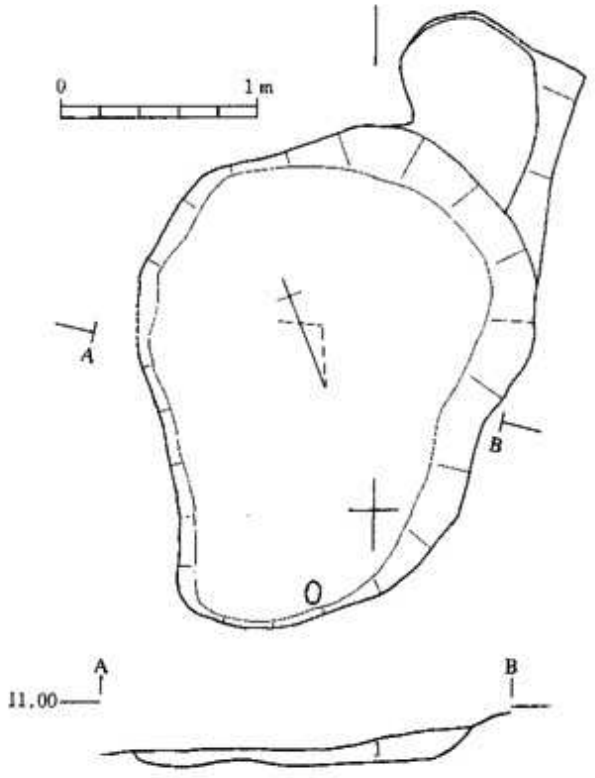
層	土色	土性	備考
1	黒色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまりあり、炭化物、須恵器、土師器片含む、褐色土ブロック状に含む

の検出と層位的に同じ条件で検出されたことから、1号、2号土倉跡、47号溝と同時期と考えられる。

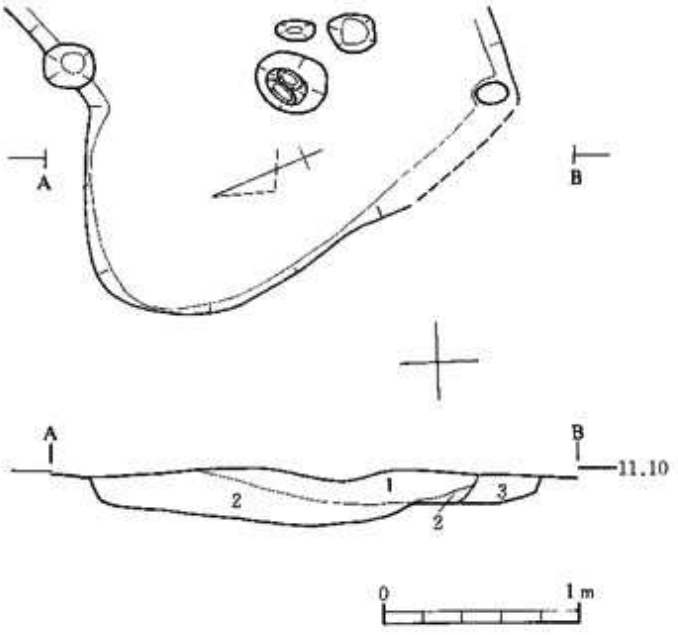
第23号土壙（第58図）

調査区東側3－E区に存在する。46号溝、22号住居跡を切る。3号建物跡と同時か、これを切るものと考えられる。規模は東西1.6m以上、南北2.4m、深さ26cmである。形態は土壙がさらに東側の調査以外に続くため不明であるが、およそ不定形のものとなろう。埋土は3層で構成され、1層は暗褐色シルト、2層、3層は褐色シルトである。このうち、1、2層からは

第57図
第16号土壙平・断面図



層	土色	土性	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	しまりなし、にぶい黄褐色粘質シルトをブロック状に含む、酸化鉄を含む



◀第58図
第23号土壙平・断面図

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化物と炭化物を含む、土器片も含む
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化物と炭化物を含む、土器片も含む
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物を含む

弥生土器や古墳時代の土師器の細片が比較的多く出土している。またセクションにはないが、土壙の東寄りには黒色シルトの堆積（最上層）が認められた。直接時期を決定する遺物はないが、3号建物跡との関係から中世の時期と考えられる。

第1号墓壙（第59図）

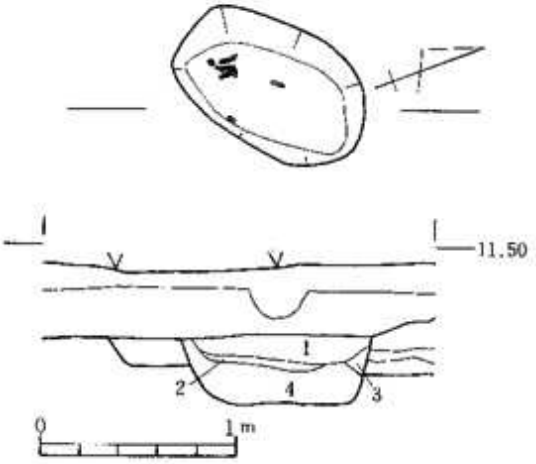
調査区南西側1－A区及びその西側拡張区に存在する。24号住居跡を切る。検出面の規模では長軸1.0m、短軸65cm（底面では85cm×45cm）、深さ35cmである。深さは削平を受けたと考えられることから、本来もう少し深かったと考えられる。墓壙の方向はおよそN－55°－Eで、頭位は土壙南東部、すなわち南枕となろう。

埋土は4層で構成され、埋1層は褐色シルト、埋2層褐色粘質シルト（白濁）、埋3層、黄褐色粘質シルト、埋4層は黄褐色砂質シルトである。このうち、骨片、歯は1層下部から2層上面にかけて検出された。2層は白濁しており、被葬者の脂肪分であろうか。

3層は埋葬時に敷きつめた土と考えられ、壁周囲はさらに検出面まで認められる。

壙内からは、頭骨片、下顎骨、歯、中国銭7枚が出土した。中国銭は副葬品であり、開元通宝（真書）1枚、政和通宝（真書と篆書）2枚、皇宋通宝（真書）1枚の計4枚が判読できた（第60図1～4）。骨の残存状況は極めて悪いが、ほぼ解剖学的位置を留めているものと判断され、歯などの出土状況から、南向きの横臥屈葬と推定される。

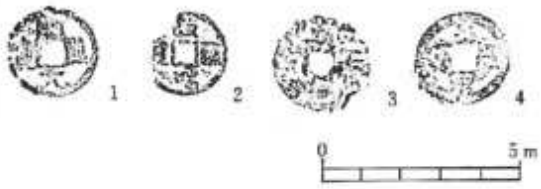
年代は明確ではないが、中国銭の出土や層位的所見から、中世の墓壙と考えられる。また墓壙の位置から考えて、47号溝跡より古い時期と推定される。骨の鑑定結果は後述する。



◀第59図
第1号墓壙平、断面図

層	土色	土性	備考
1	褐色（10YR⅘）	シルト	しまりあり、炭化物、土師器片少量含む 暗褐色土をまだら状に含む、人骨とその歯を含む
2	褐色（10YR⅘）	粘質シルト	しまりなし、炭化物を少量含む（脂肪分を含む）
3	黄褐色（10YR⅝）	粘質シルト	しまりあり、鉄分を含む
4	黄褐色（10YR⅝）	砂質シルト	しまりあり

図番	種別	層位	備考
60－1	洞窟出土(古墳)	埋1層	開元通宝(真書)唐初鋳年621年
60－2	〃	〃	政和通宝(篆書)北宋〃 1111年
60－3	〃	〃	政和通宝(真書)北宋〃 1111年
60－4	〃	〃	皇宋通宝(真書)北宋〃 1039年



第60図　第1号墓壙出土遺物　▶

（4）第1次調査区補遺

今回都市計画街路の最終年度にあたり、過去の1次～3次調査区の再検討を行った。その結果、1次調査区において以下に述べるような建物跡が存在する事が理解できたので改めて報告する（第61図）。

第6号掘立柱建物跡

調査区中央Ⅲの1－d、1－e区を中心に存在する。古墳、平安時代の1号、3号、4号、7号住居跡を切る。規模は柱穴がそろっておらず明確ではないが、3間×2間半（東西8.20m 南北5.0m）で北面に廂が付く建物跡と理解した。梁行は一定ではないが、およそ27尺3寸×17尺の東西棟になろう。柱穴は直径20～30cmでほぼ一定している。また西側にはこの建物の梁と平行する柱列が存在する。廂や他の建物跡の可能性もあるが、風よけのため塀が想定できないであろうか。この建物跡に関連する遺物はない。後述する9号建物跡と棟方向がほぼ一致ししかも切り合いがないことを考え合わせると、9号建物跡の付属屋と推定される。

第7号掘立柱建物跡

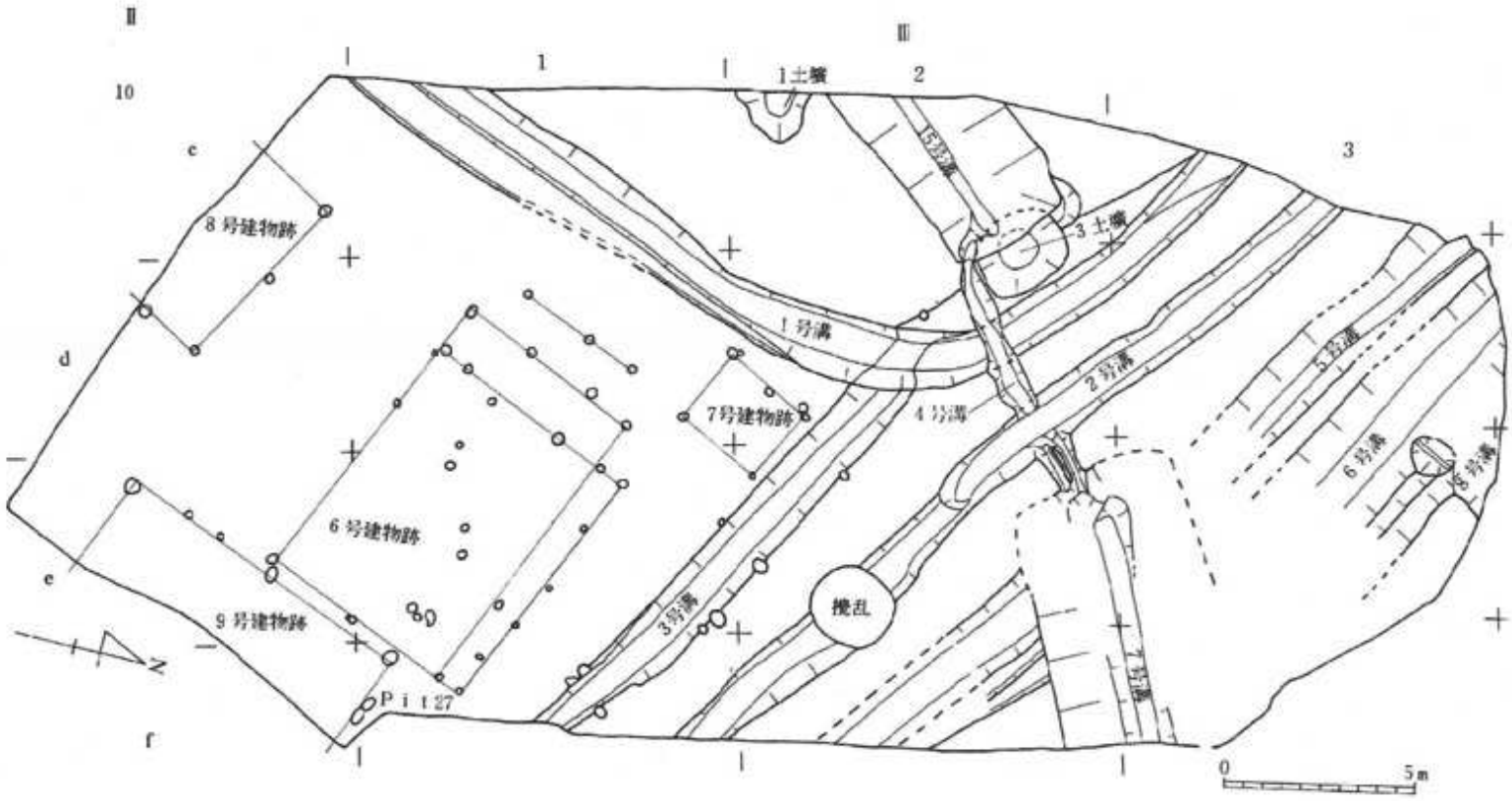
調査区中央Ⅲの1－d、2－d区にかけて存在する。切り合い関係はない。規模は1間×1間（東西2.1m、南北2.4m）と考えられるが2間×1間の可能性もある。柱穴も直径20cm前後で揃っている。和尺でみるとちょうど7尺×8尺の建物になる。時期決定できる遺物はない。
規模から推定して倉や納屋のような性格が考えられる。

第8号掘立柱建物跡

調査区南側Ⅱの10－C、10－d区に存在する。16号住居跡を切る。規模は、建物が調査区外に伸びているため不明であるが、2間×1間以上（東西5.0m、南北2.3m以上）である。柱穴は直径20～30cmである。時期決定できる遺物はない。

第9号掘立柱建物跡

調査区南側Ⅱ、10－e、10－f区に存在する。6号住居跡を切る。6号建物跡に平行し接するように建つ。規模は柱穴が不規則で間取りを充分に理解できないが、1間以上×2間（東西2.0m以上、南北8.1m）と考えられる。柱穴は直径40～50cmを測り、他の建物跡の柱穴を大きく上回る。1次調査時においてピット27と報告された柱穴は、この建物跡と関連するものと考えら



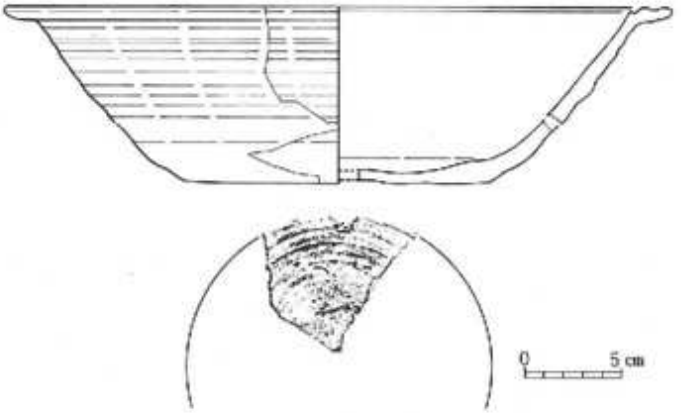
第61図　第1次調査区掘立柱建物跡

れる。時期決定できる遺物はない。

1次調査区の建物跡群について

今回、再検討した結果、6号～9号の4棟の建物跡を確認することができた。これらの建物跡は、切り合いがなく、また、建物の方向を6号建物跡を基準として比較した場合、南北辺は最大7°のふれ幅に納まり、ほぼ揃っていると言えよう。こうした特徴から、同時期に存在したことが充分に考えられる。このような見方が正しいとすれば、建物の性格は、絵巻物などを参考にして考えた場合、9号建物跡が柱穴の規模から、主屋と考えられ、6号建物跡はその付属屋であろう。8号建物跡は下人が居住した下屋と考えられよう。7号建物跡はその規模から倉や納屋が考えられる。

年代については、これを直接に証明するものがない。しかしピット27が9号建物跡と関連するものと考えられ、ここからはすでに報告したように、洪武通宝、永楽通宝を含む50枚の中国銭が出土している。したがって、これらの建物群は、およそ室町時代の所産と考えることができよう。ところで、今回遺物の検討を行った結果、これらの建物群の北側に存在する2号・4号・7号・15号の各溝跡は、美濃（？）灰釉大平鉢（第62図）の出土から15世紀代と考えられる。年代的にも矛盾はなく、これらの建物群に対応するもので、このうち7号、15号溝は建物群を区画する堀と考えることが可能である。また、7号、15号溝の空間は門と考えられよう。



種別	器種	層位	特徴	口径	底径	器高	備考
陶器	大平鉢（三足付?）	埋1	内面・外面上半に施釉（灰釉） 折縁 口縁、糸切底でケズリ調整 底部外面に重ね焼み痕あり	34.2	15.6	9.1	美濃(?) 底部内面 磨耗

第62図　第4、15号溝跡出土灰釉陶器

V．まとめと考察

（1）古墳時代～平安時代の南小泉遺跡

南小泉遺跡出土の土師器、須恵器は古墳時代から平安時代のものである。集成図(1)、(2)には、その主な器種、器形のものを集めたが、それらは発掘調査で出土したものの中から選び出したものであり、かつて東北大学、東北学院大学で採集していたものは含まれていない。それらの主なものは、仙台市文化財調査報告書第13集「南小泉遺跡－範囲確認調査報告書－」に図化されているので参照してほしい。

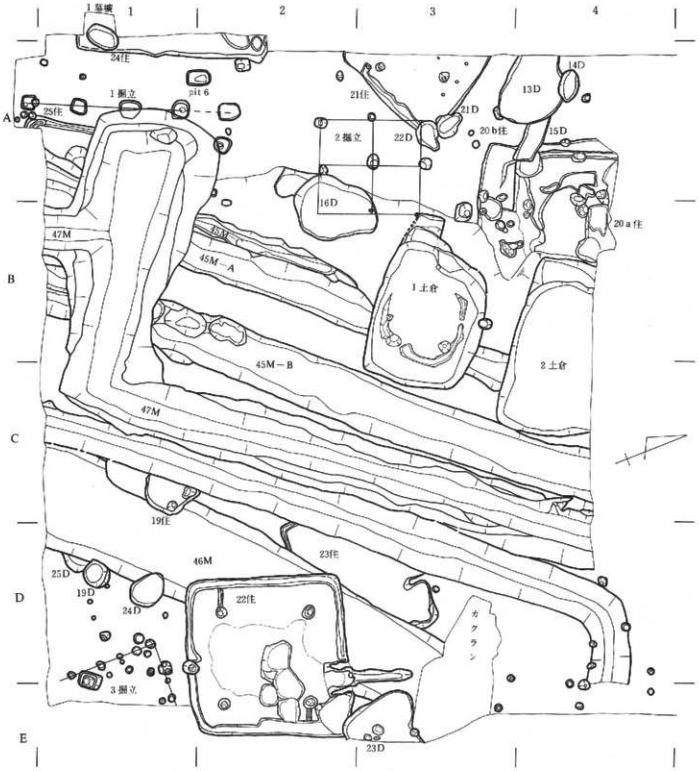
集成図（1）（第64図）

Ⅰ期　1～11は遠見塚古墳出土の土師器であり、1、2、3、9、10、11は第12トレンチ第Ⅰ土器群、4～8は小形の手捏ね土器で第12トレンチ第Ⅱ土器群一括出土のものである（結城、工藤：1979)。塩釜式の土師器であり、遠見塚古墳の造営年代のものと考えられ、ほぼ5世紀初頭と見られる。よって1期は塩釜式期と考えられる4世紀末から5世紀初頭までとしたい。現在までの調査結果及び表採資料から、この時期は遠見塚古墳と霞ノ目飛行場付近に集落跡の存在が考えられる。

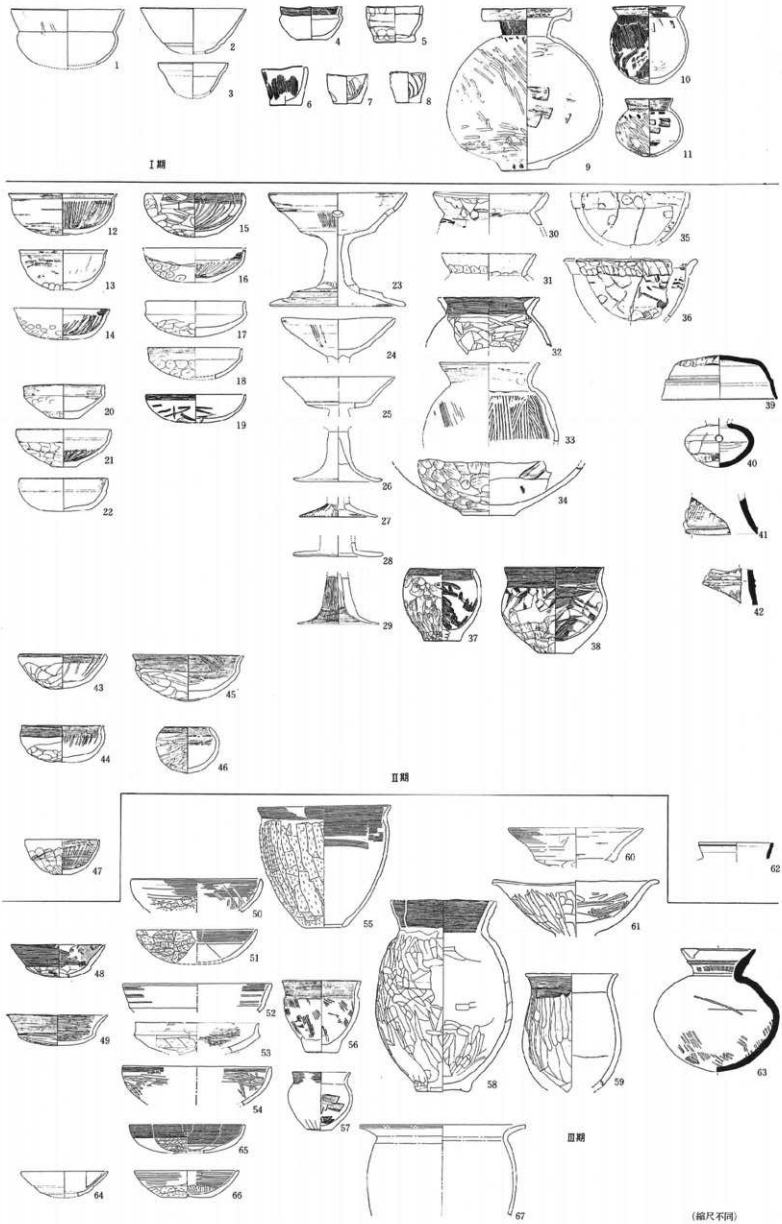
Ⅱ期（一）　12、13の坏及び35の甕は南小泉式の土師器であり、都市計画街路に伴う調査で検出された第5号住居跡から出土したものである（結城：1982)。15、32は仙台バイパス隣接地の倉庫建築に伴う調査で発見された第3号住居跡から出土したものである（加藤：1983)。
これらも南小泉式の土師器に分類されるものと思われ、5世紀中葉から後半の年代が考えられる。29の高坏脚部片、31の土師器甕を出土したのは、道路第7号住居跡出土であり、13類似の坏と共伴するので同期のものと考えられる。

（二）　14、16、17の土師器坏、36の甕、39の須恵器の盤、41の器台片（ＴＫ－216類似）は都市計画街路の調査の際の第16号住居跡から出土している。また、40の須恵器甕（ＴＫ－216かＯＮ－46に類似）は同調査の第1号住居跡、42は同調査のⅢ－２ｃ土壙出土の器台片である。これらのものは、須恵器が大蓮寺窯跡の発見（渡辺、結城：1976）から5世紀後半からの出現と考えられること、また、14、16、17のタイプの異なる土師器坏が共伴することから5世紀後半から末の年代を与えておきたい。

（三）　18の土師器坏、23の器台・30の甕は道路調査時のⅢ－２ｆ土壙から一括出土している。20は同調査によるⅢ－２ａ区1号溝壁から、22はⅢ－２ｅ区の検出面出土のものである。19の坏、38の甕はバイパス隣接の倉庫建築に伴って発見された第2号住居跡から出土したものである。37の鉢は同調査の第1号住居跡から出土した。21の坏、24～28の高坏、33の壺は道路調査時の第3号住居跡から出土している。



第63図　遺構配置図（古墳時代～近世）



第64図　南小泉遺跡出土土器集成（1）

これらを見ると南小泉式～引田式の範ちゅうに入いる土師器であり、これらに類似しているものは、埴輪を焼成した高沢窯跡からも出土している（渡辺、結城ほか：1974）。この窯跡は、裏町古墳と埴輪の需給関係も考慮されるものであり（註1）、5世紀末から6世紀初頭の年代が与えられるものと思われる。

(四) 43～46の土師器は遠見塚古墳調査時の第12トレンチ第Ⅲ土器群のものであり、石製模造品を多量に伴ったものである（結城、工藤：1979）。47、62は道路調査時の9号溝出土のものである。これらは、引田式と見られるものであり、6世紀前半と考えられる。

南小泉遺跡内では、Ⅱ期に入いる土師器が多く、そのうちでもⅡ期（三）の段階での量が多くなる。古墳時代のうち、後期が集落跡としての規模が最大になったものと考えられる。関東でいえば和泉式から鬼高式への過渡期として把えられるし引田式とされるものは、その影響を多大に受けた土器群と考えられる。

南小泉遺跡内においてⅡ期の集落跡はⅠ期より南へ伸び、当遺跡南限付近に達している。仙台バイパスに沿った南北に長い集落跡を構成していたと見られる。

Ⅲ期 住社式から国分寺下層式の段階であるが、当遺跡出土の資料は非常にとぼしい。年代的には、6世紀中葉から8世紀前半におよぶ長期であるが、南小泉遺跡における希薄期ともいえる。ただし、ここで特徴付けられるのが、50～54、65、66の坏、55の甑、60、61の高坏であり、これらは関東でいう鬼高Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ式の土師器に比定出来るものと思われる。これらのほとんどは、黒色処理されてなく、丸底であり、体部外面ヘラケズリ、内面ヨコナデされているものである。これら関東系土器は近くでは、名取市清水遺跡（丹羽ほか：1981）、仙台市郡山遺跡（木村ほか：1981～83）、栗遺跡（註2）でも出土しているが、6世紀後半から特に関東地方との交流が顕著化した表われとも考えられる。

48の坏はバイパス沿いの倉庫建築にともなう調査の際、第4号住居跡から出土したものであり、58、59の甕を共伴する。甕が長胴化する傾向がみられ、やや下方に最大径をもつこと、体部外面調整が、ヘラケズリ及びナデであることから、住社式とも考えられる。49の坏は遠見塚古墳第11トレンチ出土のもので、56、57の土師器甕と共伴する。甕の調整などから、住社式ないし栗囲式と考えられるものである。50～54の坏、61の高坏、63の須恵器の壺は、道路調査時の第46号溝から出土したものであり、関東系の鬼高Ⅰ～Ⅱ式の土師器と思われ、6世紀中葉に比定出来る。55の甑と60の高坏も関東系と見られ同時期が考えられる。同調査の第21号住居跡出土のものである。64の坏は同調査の第14号住居跡、65、66の坏、67の甕は第22号住居跡出土のものであり、65、66の坏は関東系の鬼高Ⅲ式の土師器と類似する。図示しなかったが、国分寺下層式の土師器坏小片と共伴することなども考え合わせると、7世紀末から8世紀初頭の年代が考えられる。

Ⅲ期に分類される住居跡は、今のところ、今回調査した箇所に限定されている。

集成図（2）（第65図）

Ⅳ期　この期間、当遺跡北方約1.5キロのところに陸奥国分寺、尼寺が造営される。8世紀前半から9世紀初頭にかけての約1世紀は、これまでの調査では空白期である。

Ⅴ期（一）　1～33まではほぼ同一時期と考えられるものである。ここの特徴はロクロ使用の土器群ということである。ただ非ロクロのものとしては、道路調査の際の第17号住居跡出土の底部に木葉痕をもつ土師器甕（19、20）、同調査で検出された第12号住居跡出土の甕（22）がある。（注3）

坏で特徴を述べると、回転糸切り、回転ヘラ切りもあり、無調整のものと手持ちのヘラケズリ調整のものがあることである。1、2の坏及び8、9の高台付皿、12、13の須恵器坏、25、27、28の甕は青葉女子学園新営工事にともなう調査の際発見された第3号住居跡の出土で、遠方が共伴することから9世紀前半と考えられている（渡部：1983）。3、4の坏、30の須恵器甕は東北少年院工事に伴う調査の際に発見された第2号住居跡のものである（菊地：1983）。5、6、7の坏、10、11の高台付皿、16、17の須恵器坏、26の土師器甕、31の須恵器の甕、32の須恵器の蓋、33の須恵器甕は青葉学園調査の際の第1号溝出土である。

14、15の須恵器坏、21、23、24の土師器甕は、バイパス沿いの社屋建設の際に発見された住居跡出土のものである（結城：1981）。

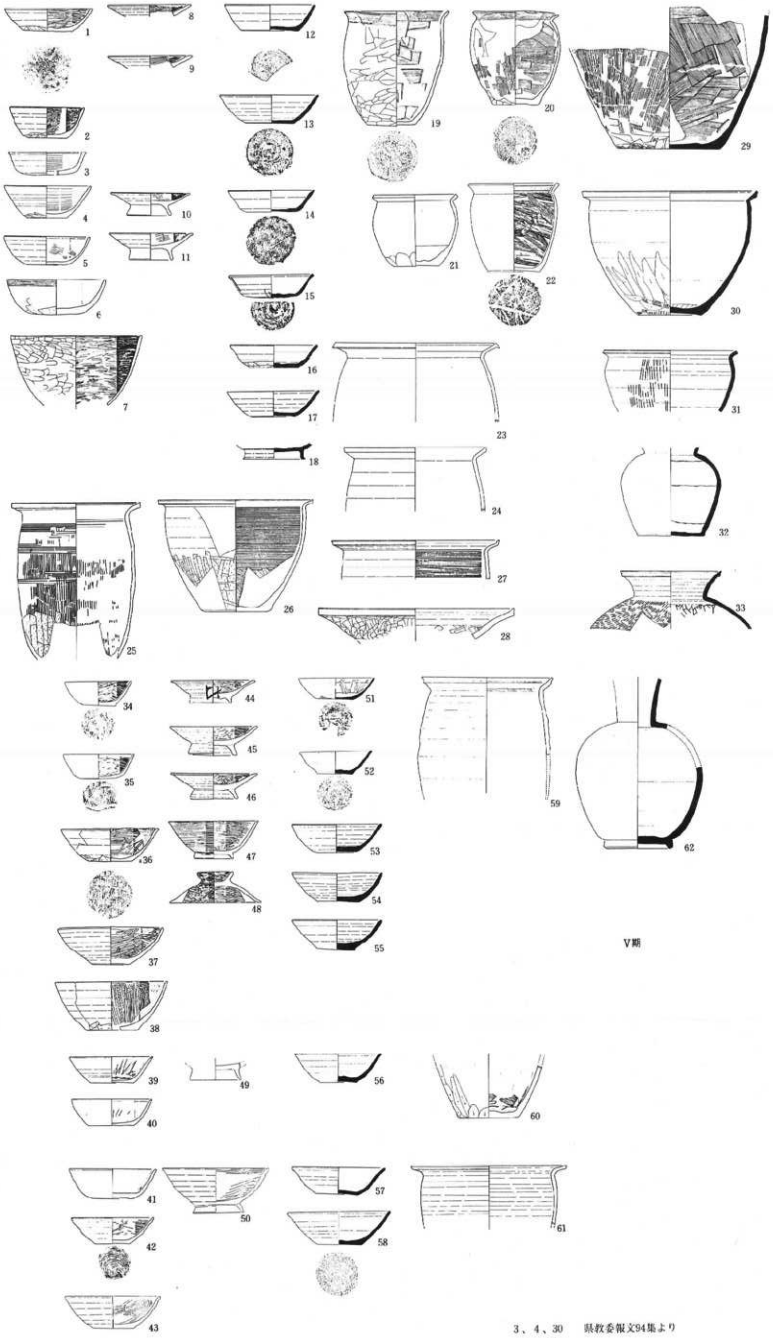
18の高台付坏は道路の調査で今回発見された第19号住居跡のものである。

（二）　34～38の土師器坏、44～48の高台付皿、坏、蓋、51～55の須恵器坏、59の土師器甕、62の須恵器蓋のグループである。このグループの特徴は、坏の底部技法が、回転ヘラ切りもあるが、回転糸切りが主体で、調整痕があるものでは、手持ちのヘラケズリ調整されているものが多いものである。時期は、9世紀後半が考えられる。

34、35、51、52、59、62は都市計画街路の第4号住居跡出土のものである。36、37、38、44～48、53～55は青葉学園の第1号住居跡出土のものである。

（三）　39、40の土師器坏、49の土師器高台付坏、56の須恵器坏、60の須恵器甕は、都市計画街路第9号住居跡出土で（結城：1982）、回転糸切り未調整か、回転ヘラケズリ調整されているものが多く、9世紀末の年代が考えられる。

（四）　41、57は都市計画街路の第6号住居跡出土の土師器と須恵器の坏である。42は同第13号住居跡出土の土師器坏である。43、50、58は同第28号土壙一括出土のものである。61は同第18号住居跡出土の土師器甕である。これらに共通の特徴は坏底部が回転糸切りで無調整のものであり、安養寺中囲瓦窯跡で出土した須恵器坏のセットと類似し、9世紀末から10世紀前葉の年代が与えられる。



V期

3、4、30　県教委報文94集より
（縮尺不同）

第65図　南小泉遺跡出土土器集成（2）

調査箇所の関係もあると思われるが、Ⅳ期の住居跡等の発見は南小泉遺跡南辺付近に展開しているようである。しかしながら、当遺跡内からは、この期の遺物が全般に渡って表採されること、北方に国分寺、尼寺跡があることなどから考えれば、遺跡内微高地には、この期の住居跡が存在することが予想される。

これ以降のものは、10世紀前半と見られている降下火山灰との関係を明瞭に示す資料がなく現在のところ空白である。

今後とも問題視していくべきものには、引田式の位置付けがある。この土器は南小泉式の明確なものと共伴することが多く、また、単独で存在することもある。このタイプを見ると、関東でいう和泉、鬼高Ⅰ式の土師器と類似している。この在り方から引田式という型式を東北地方南部で独立させるには少々無理があり、5世紀後半～末に関東地方との交流が増し、関東の土師器そのもの及び、その形体、技法が人の移動とともに東北地方にも導入され、在地型式の土器と並行して存在した結果と理解した方がスムーズであると思われる。

このことは、それ以後、住社式、栗囲式、国分寺下層式に伴って鬼高Ⅰ式から、真間式の関東系土器が発見されていることとも無縁ではなく、ロクロを使用した土師器坏が出現するまで共存関係にあったと言える。ただし、ロクロ使用の坏の出現から関係がとだえたのではなく、国分寺下層式期の段階から、両地方の特徴が均一化されてきて、奈良～平安時代初期において、須恵器のようにより均一になったと指摘できる。

また、このことは引田式と言われている土師器の年代観、それに後続する住社式、栗囲式、国分寺下層式の年代観を今後くり上げらせることになるものと思われる。

(注1) 未公表であるが、奈良教育大学の三辻氏の胎土分析では高沢窯跡と裏町古墳の埴輪の胎土は一致しないとのこと。

(注2)(工藤哲司：1882) 報告者では特に関東系という指摘はないが、Ⅲa期と分類された土師器群を中心に、関東系と見られる土器が散見される。

(注3) 工藤 (1982－P51) が指摘するように、底部に回転糸切り痕を有する土師器坏と共伴しているものもある。

また、八王子中田遺跡では、鬼高Ⅲ式の底部に木葉痕をもつものが最多になることが指摘されている (服部、岡田：1968－P105～P120)。ここに取り上げた資料には、共伴するものがないが、Ⅴ期の (一) にも回転糸切りの坏があること、鬼高Ⅲ式に木葉痕が多いことなど考慮して、Ⅴ期でも一番古いものとして位置付けた。

（2）関東系土器出土の意義とその問題点

最近、宮城県内において、古墳時代終末から奈良時代初期に関東系土器の出土が盛んに報告されるようになった。ここでは、紙数の関係上細部にわたって言及できないが、現在までの成果を素描し、あわせてその意義にふれ、今後の研究の見通しをたてておきたい。

まずここでいう関東系土器とは、関東地方の特徴をもつ古墳時代終末か奈良時代初期にかけて存在した土師器、つまり、鬼高期～真間期の土師器ということになろう。具体的にみると、坏形土器はおよそ須恵器を模倣した丸底で稜をもち、口縁部が内傾するタイプと丸みの強い椀状のタイプになろうか。これらは、種々のバラエティを生みながらしだいに平底化の傾向を示し、盤状坏の出現はその最も典型的な例であろう。また甕は、およそ丸みの強い器形から長胴化の傾向を強めていくという変遷が確認されている。

では在地の土器はどうであろうか。この時期の坏は体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部が大きく外反する形態が最も基本的である。やがて稜のつく位置が下って平底坏の出現に至る。甕は、下ぶくれの体部が最も特徴的であって、やはり、長胴化の傾向を示すようになる。甑は大型、小型に分けられ、前者は単孔、後者は多孔のものが多い。形態は関東地方のものと大きな差異はない。

器面調整を比較してみると、坏は、関東地方のものは、横ナデとケズリ調整が主流を占め、内面にミガキ及び放射状の暗文がみられる。一部に内外の赤色塗彩が施される。在地のものは、外面ケズリ調整と口縁部横ナデ、内面を黒色処理、ミガキ調整を施こす。しだいに内外面はミガキ調整が主流を占めるようになる。甕、甑は、関東地方のものはヘラケズリ調整を特徴とし、在地のものは、刷毛目調整やナデ調整が本来の基本的な調整方法である。もちろんケズリ調整を施すものも存在するが、関東地方の影響によるものかどうか再検討する必要があろう。今後在地における各器種ごとの基本となる形態及び器面調整を認識し、関東地方の土器の特徴と比較すれば、明確な区別あるいは影響の度合も明確になってこよう。

また関東系と認識された土器がどのような経過をたどって遺跡にもたらされたかも問題となる。この問題は、理論上以下の３つの場合が想定される。

１．人々が移動し、かれらが移動先で製作する。

２．人々の移動に伴って土器も搬入される。

３．人々の移動は伴わず、在地において他の地域のものを模倣する。

本遺跡の場合、胎土の観察から１の場合が最も有力であると考えられる。もちろん胎土分析によってより客観的データのもとに証明される必要がある。さらに、今回の調査区から検出された遺構からは、在地の特徴をもつ土器はほとんど出土せず、いずれも関東系の土器で占められている。たとえば刷毛目調整の甕が皆無である点などは、その最も良い事例であろう。関東系

の土器は鬼高Ⅰ～Ⅱ式の特徴を持つ土器が主体であり、これに栗囲式の古い段階の坏が伴う。この時期の標式遺跡である栗遺跡では、関東系の土器を伴っているようであるが、主体とはならず、本遺跡とは極めて好対象を示している。

さて関東系の土器群が主体をなす集落跡をどのように理解したらよいであろうか。この問題についてまず周辺の遺跡をみることにしたい。本遺跡周辺では、名取市清水遺跡の第Ⅴ群土器を伴う集落跡（丹羽ほか：1981）や前述の栗遺跡（工藤ほか：1982）では客体的存在ではあるが、関東系の土器が伴う。また、仙台市郡山遺跡（木村ほか：1981～83）は、官衙遺跡として把えられているが、官衙形成直前の第Ⅱ段階の集落跡から初期官衙が形成された第Ⅲ段階にかけて、関東系（鬼高式後半～真間式）の土器が伴う。しかもこの遺跡では、畿内系（飛鳥Ⅲ期）の坏が共伴している。県北部では、田尻町日向前横穴古墳群（早坂：1981）、色麻町色麻古墳群（古川：1983）、古川市朽木橋横穴古墳群（佐々木ほか：1983）、名生館跡（後藤：1984）、三本木町山畑横穴古墳群（氏家：1973）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川ほか：1982）などがある。このうち玉造柵の有力な擬定地とみられる名生館跡は、官衙形成直前から形成期にかけて（7c末～8c初）関東系の土器が伴出している。これは、先の郡山遺跡と極めて共通した現象である。現在県南部や東部については明らかではない。今後さらに関東系の土器を伴う遺跡は必然的に増加すると考えられる。過去に調査された遺跡の土器群を再検討すれば、さらに増加することが予想される。

このように見てくると、現在関東系の土器を伴う遺跡は、宮城野平野から名取平野北部の地域と大崎平野の二つの地域に濃密に分布することが理解できる。二つの地域の核となりうる遺跡は、前者では郡山遺跡、後者では名生館跡であろう。この2遺跡は多賀城造営以前の官衙跡として最近注目されている遺跡である。日本全体をみた場合には、まさに大和政権から律令国家へ発展する変革期と把えることができ、大宝律令の制定後一応の確立をみる。このような社会的状況下において、関東系の土器を伴う遺跡が比較的短期間のうちに増加する原因は、必然的に明確になってこよう。またこのような現象の背後には国家的要請があったことが予想される。そうだとすれば本遺跡のように関東系の土器が主体をなす遺跡は、計画的に集落が形成されたのではないかと考えることも可能となってくる。また、土器そのものも関東地方と土器の分布圏が接する地域とは、自ずと土器のもつ意義が異なるものと考えられる。この時期の集落の全容は不明であるが、関東系土器の出土する意義とこのような特徴をもつ集落跡の研究における問題点の一端を素描してみた。このような問題を扱うには、なお時期早尚との誇りは免れないが今後の研究の方向性あるいは問題の所在が明らかになれば幸いである。

（3）中世の南小泉遺跡について

中世における南小泉遺跡は、これまで1次～4次調査区において報告してきた遺構群（第3表）が存在し、それに伴って、量は少なく細片が多いが、鎌倉～江戸初期までの遺物が出土している。これらの遺物から判断して大きく3時期の変遷が考えられる。

Ⅰ期：およそ鎌倉時代から南北町時代（13ｃ～14ｃ）

Ⅱ期：室町時代（15ｃ～16ｃ）

Ⅲ期：桃山時代～江戸時代初期（16ｃ末～17ｃ初期）

Ⅰ期の遺構は、1次や4次調査区において集中する傾向が認められ、特に、44号溝の検出によって、この時期の城館を区画する堀が明確になってきた。44号溝の東側に掘立柱建物群が展開しており、城館の中心部は1次調査区の北側、4次調査区の東側に存在するものと予想される。また、45号溝では2～3回の切り合い、瀬戸灰釉瓶子（？）が出土していることから、さらに幾度かの変遷が考えられる。Ⅰ期の終末は、44号溝の最上層（1層）から15ｃ前半ころの瀬戸天目茶碗が出土し、また1次調査区の4号溝（Ⅱ期）からやはり15ｃ代と考えられる灰釉大平鉢（第62図）が出土していることから、15ｃ以前の時期に求め得ると考えられる。この時期の遺物は県内産無釉陶器（甕、擂鉢）、常滑甕が主流を占め、これにわずかに中国製青磁（片

表3　南小泉遺跡（都計街路）中世遺構一覧

	調査区	遺構名	特徴（単位m）	時期	備考
1	1次	6号建物跡	3間×2間半（東西8.20×南北5.0）北面扉	Ⅱ期？	主屋の付属屋（西側に厨か）
2	〃	7号　〃	1間×1間（東西2.1×南北2.4）	〃	（2間×1間か）倉 or 納屋
3	〃	8号　〃	2間×1間以上（東西5.0×南北1.8以上）	〃	下屋？
4	〃	9号　〃	1間以上×3間？（東西2.0以上×南北8.1）	〃	上屋
5	〃	1号溝跡	14号住を切り4号溝に切られる。	Ⅰ期	常滑甕・県内産甕
6	〃	2号　〃	4号溝と同時期か若干新しい	Ⅱ期	
7	〃	3号　〃	3号住を切り1号溝に切られる		平安～Ⅰ期
8	〃	4号　〃	7号・15号溝と同時期	Ⅱ期	美濃灰釉大平鉢
9	〃	5号　〃	7号溝に切られる。逆台形	Ⅰ期	青磁劃花文碗・県内産甕
10	〃	6号　〃	鍋底形（両側に段をもつ）	〃	県内産甕
11	〃	7号　〃	ゆるいV字形	Ⅱ期	
12	〃	8号　〃	V字形？　6号溝に続く	Ⅰ期	
13	〃	15号　〃	ゆるいV字形	Ⅱ期	県内産甕・美濃（？）灰釉大平鉢
14	〃	1号土壙	15号溝に切られる	Ⅰ期	青磁劃花文碗
15	〃	3号　〃	〃　3号溝を切る	〃	県内産擂鉢
16	〃	pit 27	中国銭50枚（唐～明）	Ⅱ期？	9号建物跡と関連
17	3次	SK6井戸跡	円形素掘り	Ⅲ期	御深井粒丸皿　瓦質擂鉢
18	4次	1号建物跡	南北3間以上（身延4.74以上）		平安～Ⅱ期
19	〃	2号　〃	2間×2間（総柱）（東西2.92×南北3.12）		〃　倉か
20	〃	3号　〃	2間×2間（東西4.46×南北5.0）＋2間×1間（東西3.46×南北2.8）	Ⅰ期	
21	〃	4号　〃	1間以上×3間以上（東西1.9以上×南北2.6以上）	〃	
22	〃	5号　〃	1間×2間（東西2.4×南北4.4）	〃	倉or 納屋
23	〃	1号土倉跡	西側に階段　45号溝を切る	Ⅲ期	銅製小型箱　刀子
24	〃	2号　〃	〃	〃	
25	〃	1号墓壙	頭骨・歯（少年期）	Ⅰ～Ⅱ期	中国銭7枚
26	〃	44号溝跡	V字形	Ⅰ期	常滑甕、県内産甕、擂鉢、天目茶碗
27	〃	45号　〃	a・b・cの溝に分かれる（時期差あり）	〃	灰釉瓶子（？）、常滑甕、県内産甕
28	〃	47号　〃	V字形（先端部は鍋底で2段）	Ⅲ期	染付唐草文碗（明）、煙管
29	〃	13号土壙	14・15号土壙を切る	Ⅰ期？	
30	〃	14号　〃	13号土壙に切られる	〃？	
31	〃	15号　〃	13号土壙に切られ、20号住を切る	〃？	
32	〃	16号　〃	2号建物跡を切る	Ⅲ期	
33	〃	23号　〃	3号建物跡と同時期か新しい	Ⅰ期	
34	〃	pit 6		Ⅲ期	門柱か

切彫の劃花文碗）や瀬戸灰釉瓶子（？）が伴出する。

Ⅱ期の遺構は、今回の調査では検出できない。この時期の遺構は１次調査区において検出されている。２号、４号、７号、15号の各溝や古銭50枚を出土したPit 27で構成される。また、６～９号掘立柱建物跡はすでに述べたように、この時期の建物である可能性が考えられる。７号及び15号溝は４号溝で連結しており、館を区画する堀と考えられる。また、７号溝と15号溝の間は入口北門となろうか。４号溝は、先の堀の水量調整用の溝であろうか。ここから前述したように15ｃ代の美濃系灰釉大平鉢が出土している。２号溝は４号溝と同時期か若干新しい時期のものである。城館内部の建物の構成単位が理解できる。Ⅱ期に伴なう遺物は、前述の灰釉鉢、また遺構に伴なわないが、今泉城跡21号溝出土品と同様の瀬戸灰釉袴腰香炉（１次調査区）破片が出土している。Pit 27の中国銭もこの時期に属するものであろう。中世を通じてこの時期が、最も遺物が少なく、特に15ｃ後半から16ｃ後半と考えられる遺物はほとんど皆無といってよい。したがって、Ⅱ期の後半の遺構の存在もよく把握できない。

Ⅲ期は、今回の調査（４次調査区）においてその主要な部分を調査することができた。47号溝は、この時期の館を区画する堀と考えられ、１－Ａ区、２－Ａ区付近に入口が存在すると考えられる。溝の先端にあるPit ６は周囲の他の柱穴とは、大きさや深さにおいて上回っており、門柱の一部である可能性が考えられる。また、２－Ｂ区にある47号溝から南側に伸びる溝は、内部に入る通路の側溝と考えることができよう。入口から入って右手、すなわち２－Ｂ区や３－Ｂ区などは、47号溝に向ってゆるく下っており、ここには１号、２号の各土倉跡と16号土壙が存在する。また、第３次調査区のＳＫ６井戸跡もこの時期のものである。Ⅲ期の遺物には、47号溝から出土した染付唐草文碗、青磁細線蓮弁文碗、銅製煙管、１号土倉跡から出土した銅製小型箱、ＳＫ６井戸跡から出土した御深井釉丸皿、瓦質擂鉢、瓦などがある。これらの遺物からⅢ期の年代は16ｃ末から17ｃ前半と考えられる。

都市計画街路に関連する調査においては、遺物量は総じて少ないが、その中でⅠ期とⅢ期が比較的多い。これは遺構数とも対応する。こうした傾向は、県教委が調査した南小泉遺跡の南西地区においても同様の傾向が指摘できる（菊地逸夫：1983）。ただ、ここではⅡ期とした時期の遺構は確認されていない。また、このような時期的傾向性は、近接する今泉城跡においても認め得るところである（佐藤洋：1983）。つまり、平地においては、ほぼ戦国期の様相が把握できない状況にある。これは山城の存在と無関係ではないであろう。しかし、仙台周辺における山城の調査例はなくどのような補完関係あるいは変遷があったのかその実体が摑めない。

本遺跡において、中世から近世初期にかけて、およそ３時期の変遷が理解できた。文献との比較はどうであろうか。延宝五（1677）年に仙台藩が幕府に提出した「仙台領古城書上」には

小泉邑

平　古城　同（東西 四十　間 / 南北 三十八間）　結城七郎朝光末葉結城七郎。天文年中迄。末孫国分能登守盛氏居城

平　古城　同（東西 五十八間 / 南北 三十八間）　城上堀江伊勢。国分彦九郎盛重公モ此城ニ居住。伊勢曾孫惣九郎末孫堀江平九郎。　（　）は筆者。

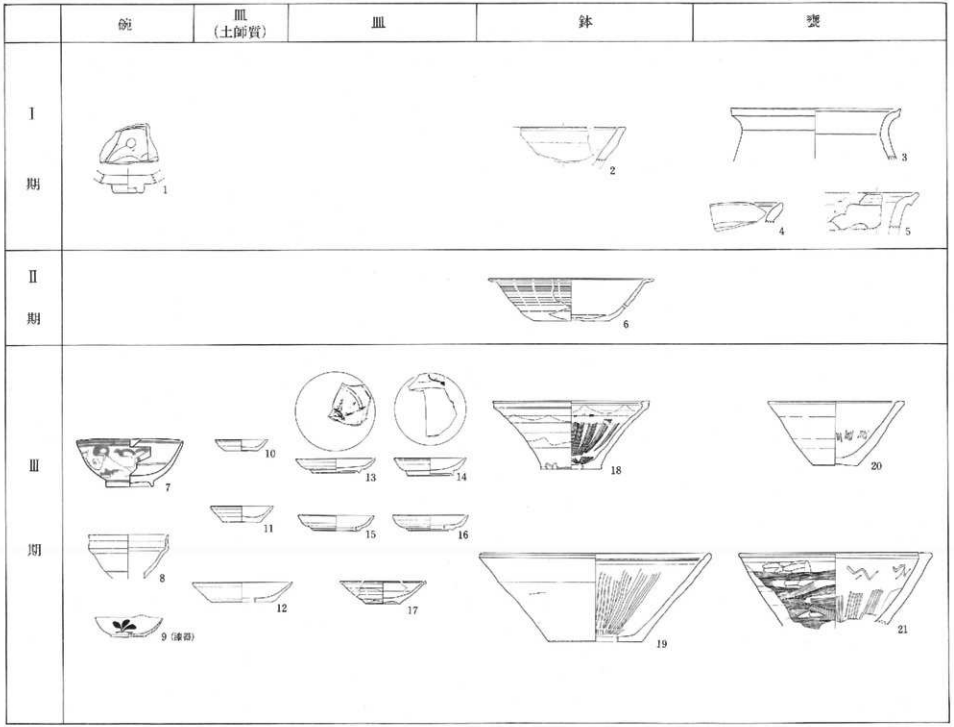
と記されている。このうち、上段にある結城氏は、奥州合戦において源頼朝に従軍した鎌倉御家人武士で、その後、白河、岩瀬、名取の3郡に所領をもらっている(白河古事考)。「天文中」という記載が正確かどうか判断できないが、概ねⅠ、Ⅱ期の時期がこれに対応するものと考えられる。奥州における結城氏の本所は福島県白河であって、名取郡はその一部に所領があったと考えられる。しかし、文献資料がほとんどなく、鎌倉時代以降の名取郡における結城氏の動行は不明な点が多い。南北朝時代には、結城氏は南朝方に属していたが、興国四（1343）年に北朝に降りて、多賀国府周辺における状勢は、北朝方が優勢となった。その後の足利氏の内紛においては、岩切城合戦に参戦し、また、再び南朝北朝の抗争の1つである、広瀬川の戦い（正平六年）に参戦している。『白河文書』観応三（1351）年十月二十九日吉良貞家状に

結城参河守朝常申恩賞事、申状一通譴令進覧候、去年宇津峯宮
伊達飛弾前司、田村庄司一族及宮城郡山村宮以下凶徒、寄一来名取
郡之時、差一進代官結城又七兵衛尉幷軍勢、同十一月廿二日、
於同郡広瀬川、致軍忠之処、郎徒被疵候（後略）

とある。南朝方の宇津峯宮以下と広瀬川（仙台市）で戦い、結城又七兵衛尉の軍勢がこれを撃破というものである。この「代官結城又七兵衛尉」がどのような人物であるかは不明であるが、本遺跡との関連も予想される。

しかし、この時、仙台周辺に本所のあった国分氏（もとは鎌倉御家人千葉氏の系譜をひく）も北朝方について参戦しているが、すでに建武三（1336）年に本遺跡の南方、名取郡飯田、日辺、今泉（現在は仙台市）を所領としている（国分系図）。したがって、南北朝時代の結城氏の名取郡における所領は明確ではない。さらに室町時代以後はまったく不明である。どうやら、その後の小泉村は国分氏の所領になったらしい。「国分系図」によれば、国分盛行が寛正年間に寺を建立したことがみえ、また文明十二（1480）年に小泉村に居住したと伝えている。その後、国分盛氏も永禄九（1566）年に小泉に移り住んだと伝えている。したがって先の『仙台領古城書上』に記載された「天文中迄」が正しいとすれば、小泉村には、結城氏と国分氏が居住したことになる。はたしてこのような状況が可能であったかはなはだ疑問である。この間の事情は充分に理解できない。本遺跡の中世のⅠ、Ⅱ期がおよそこの時期に対応する。

下段の堀江伊勢については、やはり詳細は不明である。堀江氏は国分氏の家臣で家老職につ



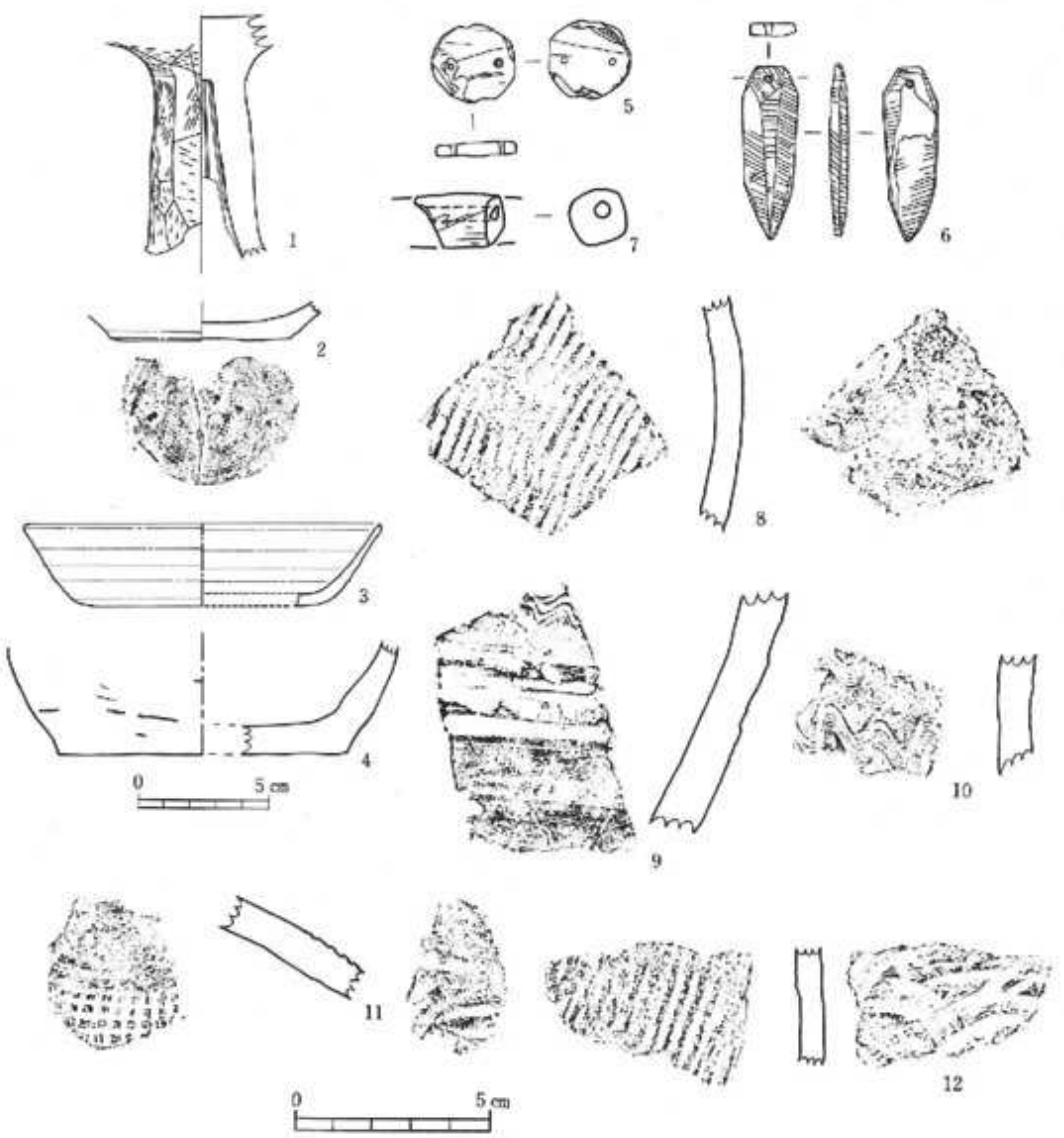
3～5、8、9、11～13、16、18、19、　県教委報文94集より
(縮尺不同)

第66図　南小泉遺跡出土の中近世陶磁器

いた家柄である。しかし、堀江伊勢なる人物が家老であったかは不明である。一時国分盛重(伊達晴宗の五男政重)が居住したとあることから、堀江伊勢はおよそ天正～慶長年間頃の人物であろう。さらに惣九郎、平九郎らが居住していたことがわかる。また国分氏は盛重の代（慶長元年）で没落し、その一部は伊達氏の家臣となった。

その後、伊達政宗による仙台開府後、この地に若林城（現在宮城刑務所）が建てられた。政宗は晩年この城に居住した。その時期は、寛永四（1627）年から同十三年の約八年間で政宗の死後取り壊された。若林城存続期間中には、その周辺に侍屋敷・足軽屋敷ができ、小規模な城下町が形成されたという(仙台武鑑)。若林城は、先の堀江伊勢らが居住した古城を改築したというのが現在の一般的な見方であるが、その詳細は明らかではない。国分盛重や伊達政宗の居住した時期は、およそⅢ期とした時期に対応する。さらに、若林城の築城時期（寛永四年）を境に国分氏の所領時期と若林城の時期の２時期に細分することが可能である。しかし考古資料からは、現在これを明らかにすることができない。

今回報告した、Ⅲ期に属する遺構群も明確に細分できない。今後、Ⅲ期の細分を考古学的に区別するには、17ｃ初頭の肥前磁器や古寛永などを伴う遺構が検出されれば明確となろう。また、文献上の細分も考古学的に裏付けることが可能となろう。現在までに、仙台市教育委員会及び宮城県教育委員会による数ヶ所の調査においては報告例がない。仙台市教委が行った昭和56年～57年にかけての調査において、検出された14号土壙から、国産の染付磁器が鹿の骨等と共に出土している（渡部：1983)。しかし、この土壙は、Ⅲ期より新しい時期のものであって区別される。



図版	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
67－1	土師器	高杯	撹乱	手持ちヘラ削り	シボリ	—	—	—	
67－2	土師質土器	灯明皿	1－AB撹乱	ロクロ調整　底部一回転糸切り	ロクロ調整	—	6.8	—	内外面カーボン付着
67－3	須恵器	坏	表土	ロクロ調整	ロクロ調整	13.8	8.0	3.2	
67－4	須恵器	甕	1－C黒1層	手持ち削り後ナデ	ナデ	—	11.2	—	
65－5	石製模造品	有孔円盤	4－A検出面	径2.1　厚さ0.3					
67－6	石製模造品	剣形	1－D 撹乱	長さ4.4　幅1.4　厚さ0.3					
67－7	土製品	土錘	1－A Pit 4	表面がきれいになでられている	径1.4				
67－8	須恵器	甕	撹乱	平行タタキ	青海波文後ナデ	—	—	—	
67－9	須恵器	鉢台	4－C 撹乱	ナデ後帯状波状文	ナデ	—	—	—	
67－10	須恵器	甕	表土	ナデ後帯状波状文	ナデ	—	—	—	
67－11	須恵器	甕	表土	平行タタキ〔クロス〕	青海波文	—	—	—	
67－12	須恵器	甕	4－B 撹乱	平行タタキ	青海波文	—	—	—	

第67図　遺構外出土遺物

引用・参考文献

伊東信雄　「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史３』・1950

氏家和典　「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』14・1957

「山畑装飾横穴古墳群発掘調査報告書」宮城県教育委員会・1973

岡田・服部ほか　「八王子中田遺跡」八王子市中山遺跡調査会・1968

奥津春生　「大仙台圏の地盤・地下水」宝文堂・1973

小野政敏　「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.２』・1982

柿沼幹夫　「甕形土器に関する一考察」『埼玉考古第15号』・1976

加藤正範ほか　「南小泉遺跡」仙台市教育委員会・1983

加藤道男　「青木畑遺跡」宮城県教育委員会・1982

菊地逸夫　「南小泉遺跡」宮城県教育委員会・1983

菊地勝之助　「宮城県地名考」・1970

木村・青沼ほか　「郡山遺跡Ⅰ」仙台市教育委員会・1981

「郡山遺跡Ⅱ」　〃　・1982

木村・金森ほか　「郡山遺跡Ⅲ」　〃　・1983

興野・遠藤　「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史下巻、付録Ⅰ』・1970

桐生直彦　「古墳・奈良・平安時代」『東寺方遺跡』多摩市遺跡調査会・1983

工藤哲司ほか　「栗遺跡」仙台市教育委員会・1982

「南小泉遺跡」仙台市教育委員会・1983

工藤・桑原　「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌57－３』・1972

國平健三　「相模国の奈良・平安時代集落構造（上）」『神奈川考古第12号』・1981

小井川・小川　「御駒堂遺跡」『自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県教育委員会・1982

小井川・高橋　「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』・1977

後藤・中橋・片倉　「薬師堂遺跡」『白石市史・別巻』・1976

後藤秀一　「宮城県名生館遺跡の調査」『第10回古代東北城柵官衙遺跡検討会資料』・1984

佐久間豊　「千葉県における奈良、平安時代土器の様相（１）」『史館14号』・1983

佐々木和博　「下総国古代土器編年試論（１）」『史館13号』・1981

佐々木慶一　「古代・中世の仙台地方」『仙台市史３』・1950

佐々木・阿部　「杉木橋横穴古墳群」宮城県教育委員会・1983

佐藤信行　「東北南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化－弥生式土器への移行過程の認識－（上）」『考古風土記第５号』・1980

「同　上　下」『考古風土記第６号』・1981

佐藤洋ほか　「今泉城跡」仙台市教育委員会・1982

志間泰治　「鎧沼遺跡」・1971

白鳥良一　「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城跡調査研究所・1980

白鳥・加藤　「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県教育委員会・1974

須藤隆　「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究23－２』・1976

「東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式－」『考古学雑誌68－３』・1983

田辺一郎　「仙台市の風土」『仙台市史4』・1951

山辺昭三　「須恵器大成」角川書店・1981

大川　一郎　「舞台」福島県岩瀬郡天栄村教育委員会・1981

東京天文台編纂　「理科年表」・1978

内藤昌　「日本古代村落史序説」塙書房・1980

中村五郎　「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』・1976

中村浩　「和泉陶邑窯の研究」柏書房・1981

井羽・小野寺・河部　「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書（5）』宮城県教育委員会・1981

早坂春一　「日向前横穴古墳」『東北新幹線関係遺跡調査報告書（5）』宮城県教育委員会・1981

林謙作　「杉の堂遺跡－第4次発掘調査概報－」水沢市教育委員会・1982

福田健司　「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌64－3』・1978

古川一明　「(1)色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和57年度）』宮城県教育委員会・1983

山下歳信　「天神風呂遺跡」群馬県勢多郡大胡町教育委員会・1981

結城慎一　「南小泉遺跡」仙台市教育委員会・1982

「南小泉遺跡試掘調査報告」『年報2』仙台市教育委員会・1981

結城・工藤　「南小泉遺跡」仙台市教育委員会・1978

「史跡遠見塚古墳」仙台市教育委員会・1979

「史跡遠見塚古墳」仙台市教育委員会・1983

渡部弘美　「南小泉遺跡」仙台市教育委員会・1983

渡辺泰伸　「東北古墳時代須恵器の様相と編年」『考古学雑誌65－4』・1980

渡辺・結城　「陸奥国官窯跡群Ⅱ」古窯跡研究会・1976

渡辺・結城ほか　「陸奥国官窯跡群」古窯跡研究会・1973

「窯沢窯跡」古窯跡研究会・1974

南小泉遺跡出土の中世人骨

獨協医科大学第一解剖学教室　茂原信生、馬場悠男

仙台市教育委員会による第３次南小泉遺跡発掘調査（昭和58年）の際に、中世の墓壙から人骨が出土した。この人骨は、頭骨片２つと歯からなり、量も少く、骨の保存状態は悪い。焼かれた形跡はない。

頭骨

左側頭骨錐体の一部と、左下顎骨の一部が出土している（図－１、１′、１″、２）。

左錐体には、頭蓋内面の前庭水管外口と弓下窩が、外面には外耳道の一部と鼓室がみられる。錐体上縁は鋭く、残存部には上錐体洞溝はみられない。

下顎骨は、左の第１小臼歯歯槽から第２大臼歯歯槽にかけての体部が残っている。骨体は厚く頑丈である。歯槽内に残っている第２大臼歯の歯髄の髄室床の高さや歯槽縁がやや低いことからすると、この第２大臼歯は萌出中だったと考えられる。

歯

歯冠だけが出土している。歯種の判定が可能なものは、破損しているものも含めて24本である。すなわち、上顎歯は、左右とも中切歯から第２大臼歯までの計14本、下顎歯は、右は中切歯と側切歯、左は中切歯から第２大臼歯までで計９本、他に部位不明の小さな結節歯（？）が１本出土している（図１－３）。

a、上顎歯

中、側切歯ともに辺縁隆線がよく発達し、舌側面の凹んだシャベル型である。唇側面は凹んでいない。

犬歯の辺縁隆線はよく発達している。左右ともに基底結節の遠心に軽度の斜切痕様の溝があるが、歯頸には達していない。

左第２小臼歯の近心頬側隅角部に、歯の形成時の異常と考えられる長さ約４㎜の、歯頸線に平行な溝がある。形成異常は、他の歯にはみられないし、部分的なものにすぎないので、形成時期の全身的疾患によるものではなかろう。

第１大臼歯は、左右ともに遠心頬側咬頭（メタコーン）のやや小さな、４咬頭性である。右の第２大臼歯の頬側面には、臼旁結節があるが、左第２大臼歯にはない。第２大臼歯の遠心面には、隣接歯（第３大臼歯）の存在を示す摩耗面がみられないので、第３大臼歯は未萌出であったと考えられる。

b、下顎歯

右側切歯は、ごく軽度のシャベル型である。他の切歯は破損していて、形状は不明である。

犬歯の舌側面の浮彫は弱い。

第1小臼歯の中心隆線はよく発達し、中心溝は近心と遠心に分断されている。

第1、第2大臼歯とも5咬頭性であるが、遠心咬頭（ハイポコヌリッド）は小さい。第1大臼歯の溝は、近心舌側咬頭（メタコニッド）と遠心頬側咬頭（ハイポコニッド）が接する×型で、現代人によくみられる型である。第2大臼歯の咬合面は、中央部が欠けているが、これはう触によるものであろう。上顎の第2大臼歯と同様に、この第2大臼歯の遠心面にも隣接歯との磨耗痕はない。

c、結節歯

この歯がどの位置にはえていたかは不明であるが、この個体は、前歯の発達に比して大臼歯の退化的傾向が強いこと、また円錐形ではなく不規則な小結節をもつこと、歯冠に磨耗がないこと、などから考えて、臼旁歯もしくは第3大臼歯である可能性が高い。

d、大きさおよび咬耗

歯の大きさは、藤田（1949）にしたがって計測した（表1）。現代日本人の歯の大きさ横田(1959）とくらべてみると、女性の平均値を下まわるものは少い。(31計測値中8）が、男性の平均値を上まわるものも必ずしも多いとは言えない（¼）。しかし、女性の平均値を上まわるものが多い（¾）ので、男性の可能性は高い。

咬耗は、全体にごく軽度で、下顎の第1大臼歯に小さな点状の象牙質の露出がみられる（Molnar;1971の3度）。他は、いずれの歯もMolnar の咬耗度が2で象牙質は露出していない。上顎の切歯の切縁にはほとんど咬耗がなく、舌側面に咬耗がみられるので、この個体の咬合様式は現代人と同じ鋏状咬合であったと推測される。

まとめ

出土したものには重複する部分がなく、歯も同一歯種は左右で似た形をしているので、これらは同一個体に属するものと考えて矛盾はない。年令は、第2大臼歯が萌出中であり咬耗も少いことから11才前後と思われる。歯だけでは性判定はむずかしいが、下顎骨の頑丈なことを考え合せると、男性の可能性が高い。したがって、この人骨は、やや進歩的な歯をもった11才前後の少年のものと考えられる。なお、年代を推測させるような特別な形質はみられなかった。

本稿をまとめるにあたり、写真撮影などで当教室の阿部修二、桜井秀雄両氏のお世話になった。謝意を表したい。

参考文献

藤田恒太郎 (1949), 歯の計測規準について。 人類学雑誌 61：1～6

橿田和良 (1959), 歯の大きさの性差について。 人類学雑誌 67：151～163

Molnar, S.(1971), Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability., Amer. Jour. Phys. Anthrop., 34;175－190

図の説明

図1、南小泉遺跡出土人骨。1、1'、1"：左下顎骨（第1小臼歯～第2大臼歯部）の外面観、歯槽面、内面観、いずれも上が前方である。2：左側頭骨の錐体の後面、左が外方で上端が錐体上縁である。矢印は前庭水管外口。3：出土した歯の咬合面観、記号はそれぞれの歯種を示している。七は結節歯で萌出位置は不明である。

表1 南小泉遺跡出土人骨の歯の大きさと比較資料

				I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	南小泉	近遠心径	右	—	8.4	8.2	7.7	7.2	10.5	9.3	—
			左	—	—	7.9	7.7	6.6	10.1	9.3	—
		頬舌径	右	—	6.8	—	9.6	9.3	12.2	11.5	—
			左	7.2	—	—	—	9.7	12.2	11.5	—
	現代日本人（橿田、1959）	男性	近遠心径	8.67	7.13	7.94	7.38	7.02	10.68	9.91	8.94
			頬舌径	7.35	6.62	8.52	9.59	9.41	11.75	11.85	10.79
		女性	近遠心径	8.55	7.05	7.71	7.37	6.94	10.47	9.74	8.86
			頬舌径	7.28	6.51	8.13	9.43	9.23	11.40	11.31	10.50
下顎	南小泉	近遠心径	右	—	—	—	—	—	—	—	—
			左	—	—	7.2	7.1	7.2	11.4	10.8	—
		頬舌径	右	—	—	—	—	—	—	—	—
			左	—	—	7.6	8.1	8.3	11.2	10.4	—
	現代日本人（橿田、1959）	男性	近遠心径	5.48	6.20	7.07	7.31	7.42	11.72	11.30	10.96
			頬舌径	5.88	6.43	8.14	8.06	8.53	10.89	10.53	10.28
		女性	近遠心径	5.47	6.11	6.68	7.19	7.29	11.32	10.89	10.65
			頬舌径	5.77	6.30	7.50	7.77	8.26	10.55	10.20	10.02

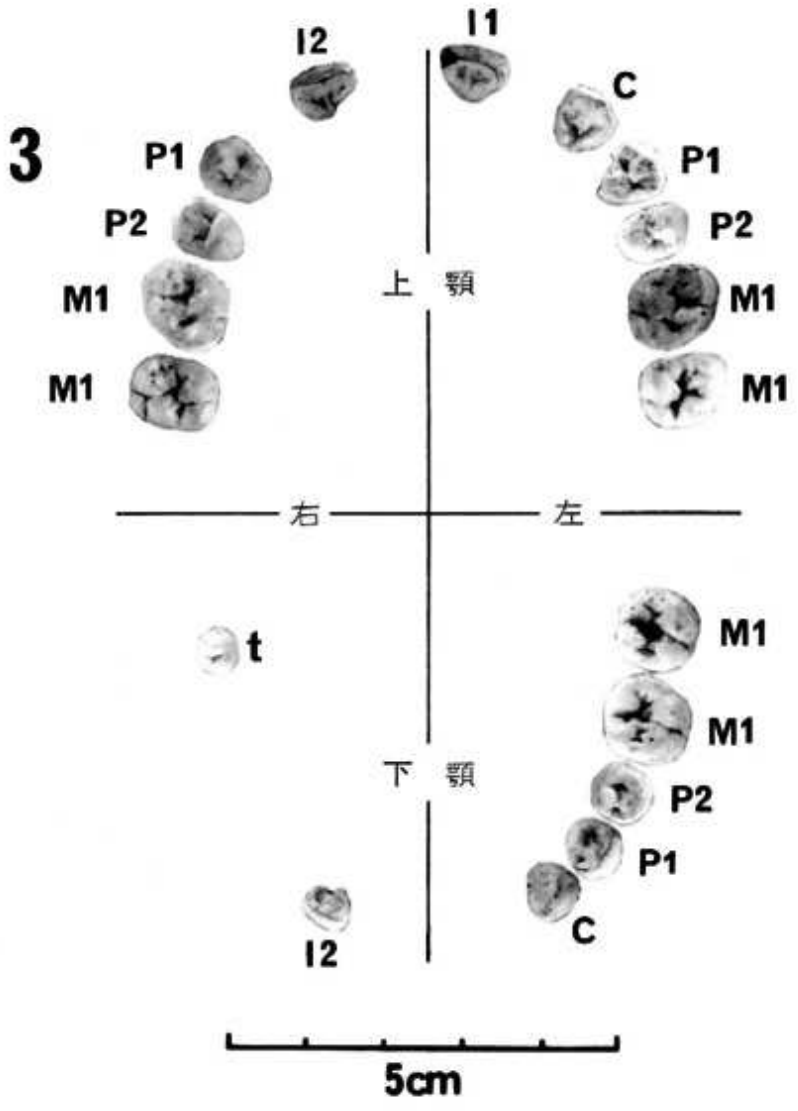


図1　南小泉遺跡出土の人骨の歯

調査前全景 ▶
（S→N）

調査後全景 ▶
（N→S）

1－D．E区 ▶
基本層位状況
（N→S）

図版1　第3次調査区全景と基本層位

◀ 21号住居跡
（E→W）

◀22号住居跡カマド
煙出し部遺物出土状況
（S→N）

◀ 22号住居跡
（S→N）

図版２　古墳時代遺構（１）

23号住居跡遺物出土状況 ▶
（S→N）

25号住居跡 ▶
（S→W）

46 号 溝 ▶
（N→S）

図版３　古墳時代遺構（２）

◀ 46号溝断面
(N→S)

◀ 21．22号土壙
(N→S)

◀ 24号土壙
(E→W)

図版4　古墳時代遺構（3）

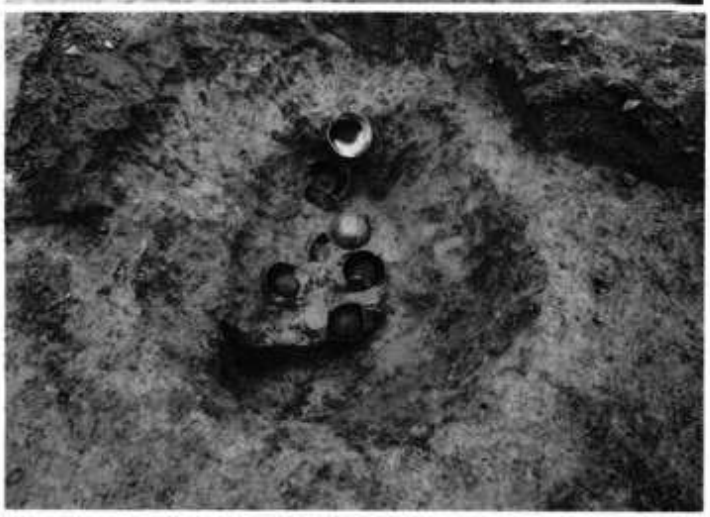
25号土壙と19号土壙(一部) ▶
(E→W)

19号住居跡 ▶
(N→S)

44号溝
(19号住居跡崩落遺物出土状況) ▶
(N→S)

図版5　古墳時代・平安時代遺構

◀ 20号住居跡
(N→S)



◀ 28号土壙遺物出土状況
(W→E)

◀ 28号土壙断面
(W→E)

図版6　平安時代遺構

▲ 東側柱穴群（3～5号掘立柱建物跡）
（N→S）

▲ 西側柱穴群（1・2号掘立柱建物跡）
（N→S）

▲ 1号土倉跡
（E→W）

図版7　中近世遺構（1）

◀ 1号土倉跡断面
(W→E)

◀ 2号土倉跡
(W→E)

◀ 2号土倉跡断面
(W→E)

図版8　中近世遺構（2）

遺跡全景（溝掘上げ状況）▶
（N→S）

44号溝断面 ▶
（W→E）

45号溝断面 ▶
（S→N）

図版9　中近世遺構（3）

◀1−A，1−B区南壁断面
(N→S)

◀ 47号溝
(S→N)

◀ 47号溝断面
(S→N)

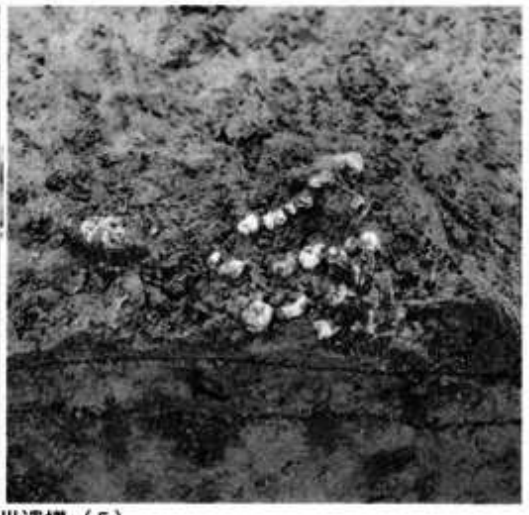
図版10　中近世遺構（4）

13. 14号土壙 ▶
(E→W)

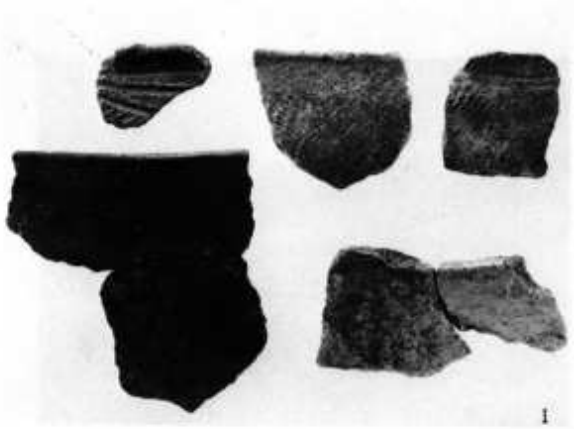
23号土壙 ▶
(W→E)

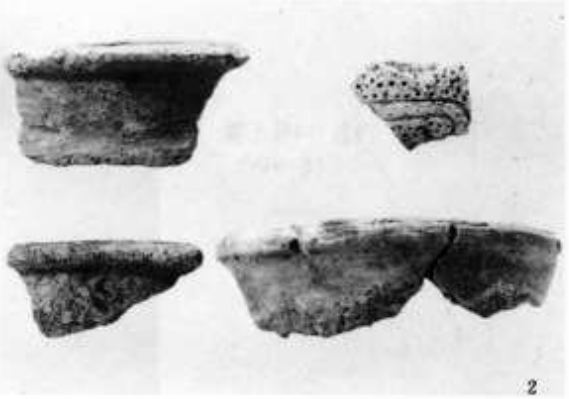
▼ 1号墓壙（E→W）

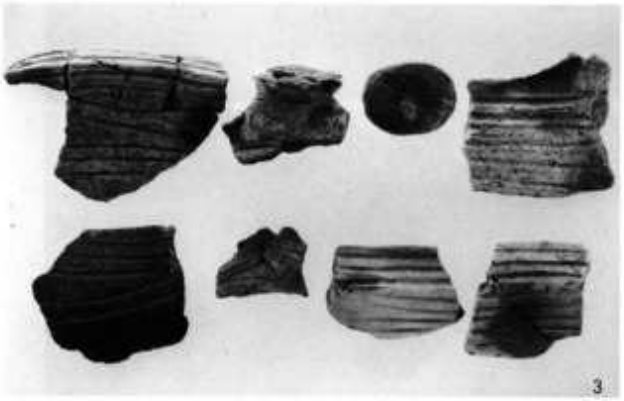
▼ 1号墓壙歯出土状況

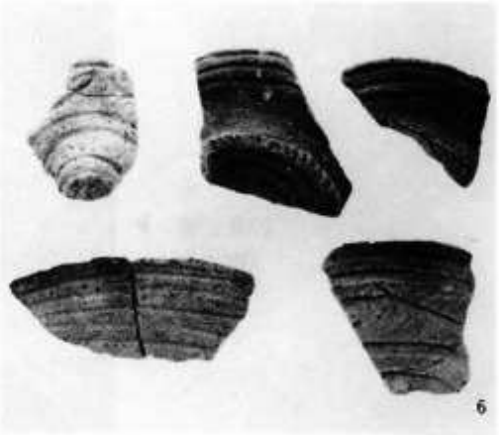


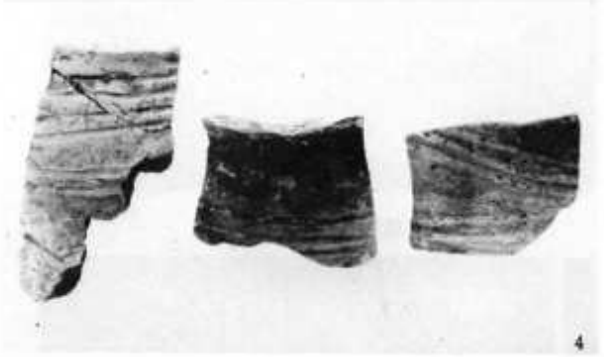
図版11　中近世遺構（5）

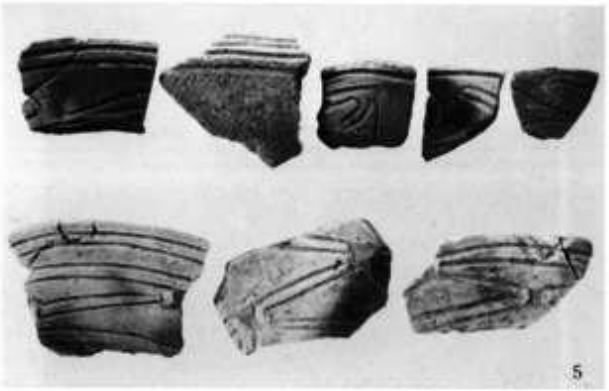






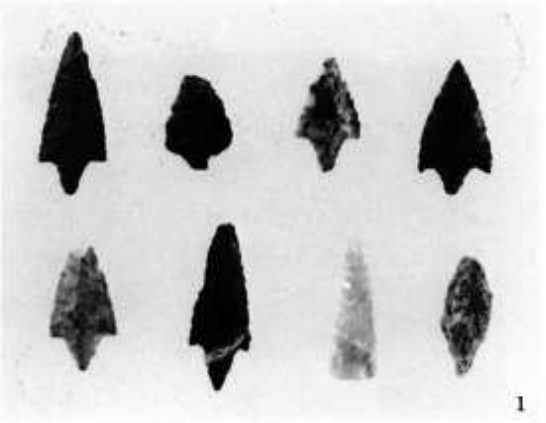




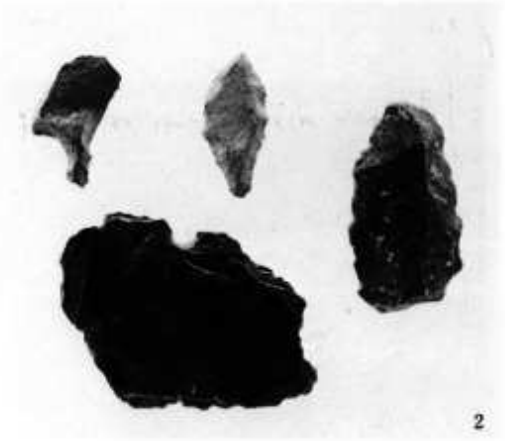


1．一甕
2．一壺
3．4．一高坏
5．一鉢
6．一蓋
7．一手捏ね土器

図版12　弥生時代遺物（1）



1



2

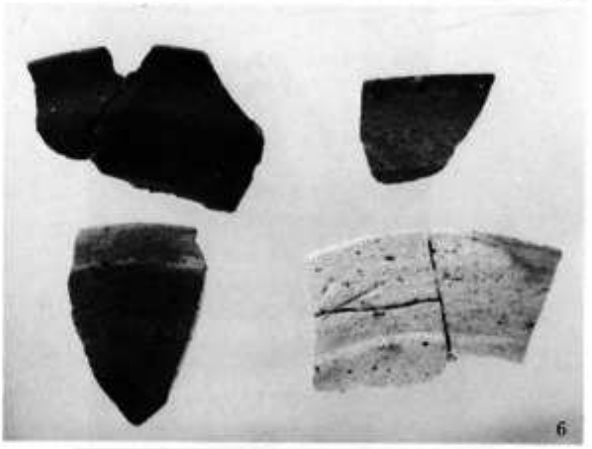
3

4

5

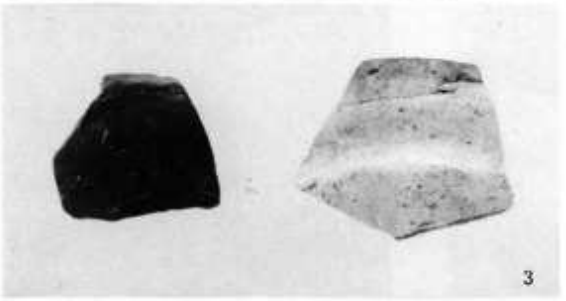
図版13　弥生時代遺物(2)

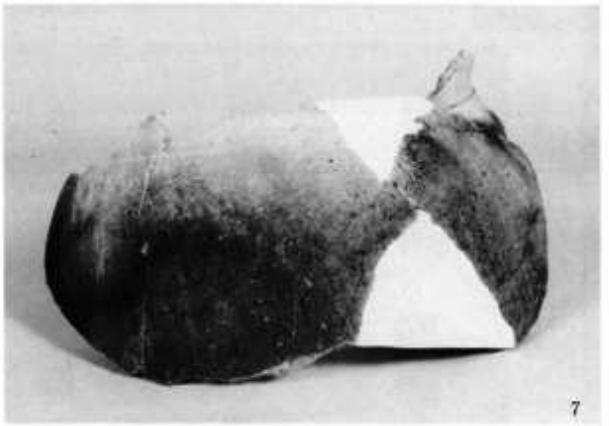
1．石鏃　2．石錐、石篦．石包丁　3．石核(47号溝)　4．石核(45号溝)　5．石核(表採)



図版14　古墳時代遺物(1)

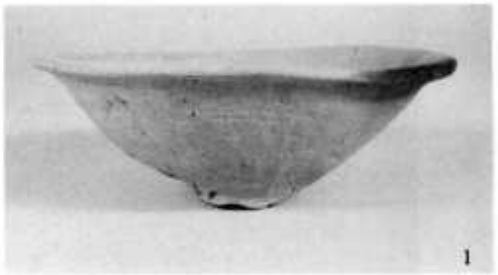
1－21号住居跡(土師器高杯)　2．3－23号住居跡(土師器甕)　4－23号住居跡(土師器甕)
5－22号住居跡(土師器甕)　6－22号住居跡(土師器杯)　7－22号住居跡(土師器杯)　8－23号住居跡(土師器甕)

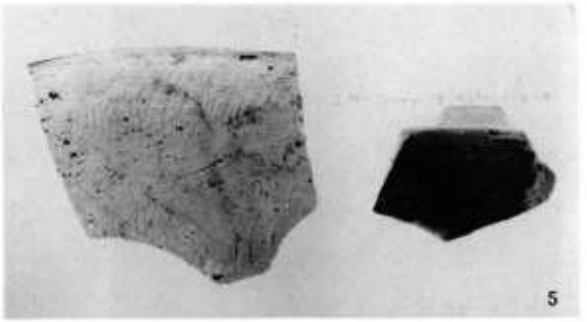


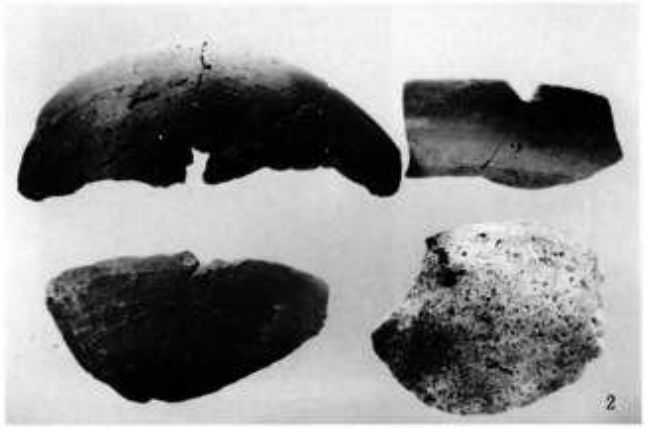


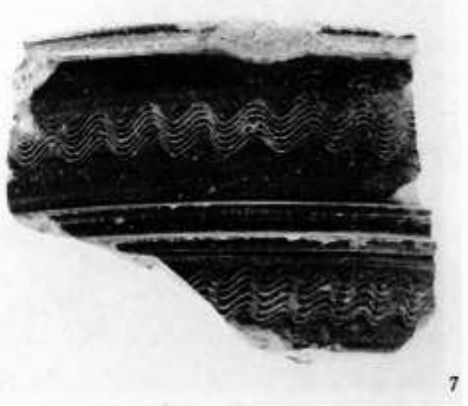
図版15　古墳時代遺物(2)

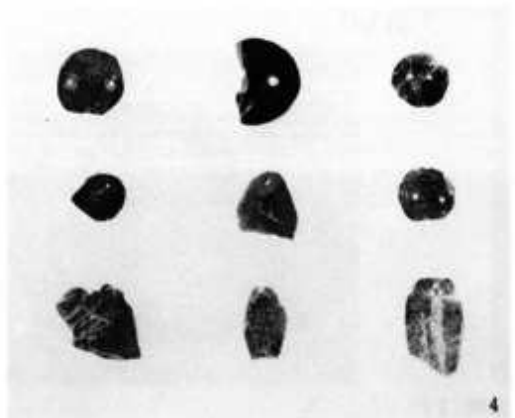
1－23号住居跡(土師器甕)　2－23号住居跡(土師器鉢)　3－23号住居跡(土師器杯)　4－23号住居跡(支脚)
5－46号溝(須恵器横瓶)　6・7－46号溝(土師器甕)　8－46号溝(土師器高杯)





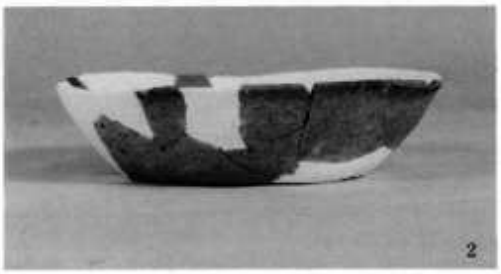


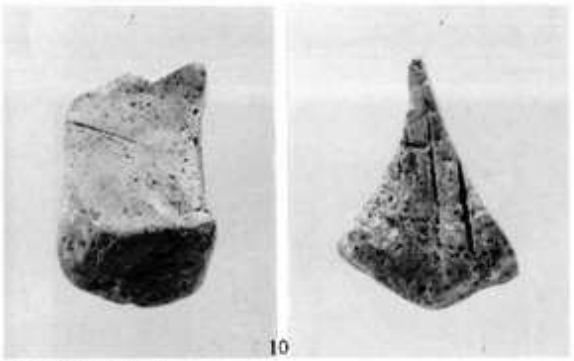




図版16　古墳時代遺物(3)

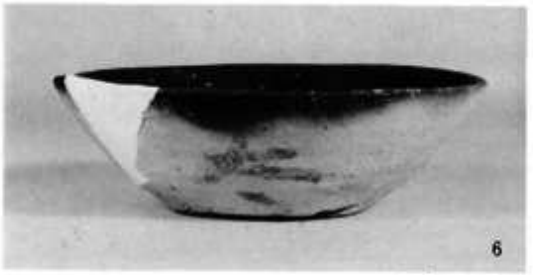
1 —46号溝(土師器高坏)　　2．3 —46号溝(土師器坏)　　4 —44．45．47号溝(石製模造品)
5 —25号住居跡、18号土壙(土師器坏)　　6 —西側トレンチ(土師器高坏)　　7 —47号溝(須恵器器台)
8 —47号溝、20．22．25号住居跡、25号土壙、1D区(石製模造品)

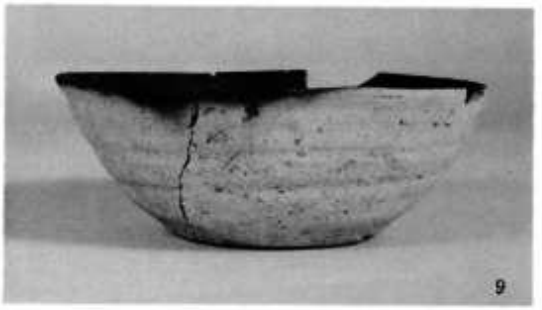


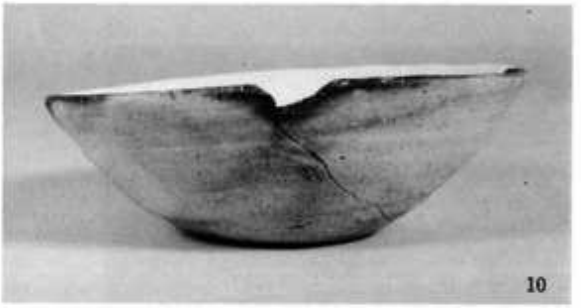


図版17　平安時代遺物（1）

1－19号住居跡（土師器甕）　2～5－19号住居跡（須恵器杯）　6－19．20号住居跡（土師器甕）
7～9－20号住居跡（須恵器杯）　10－20号住居跡（砥石）







図版18　平安時代遺物(2)

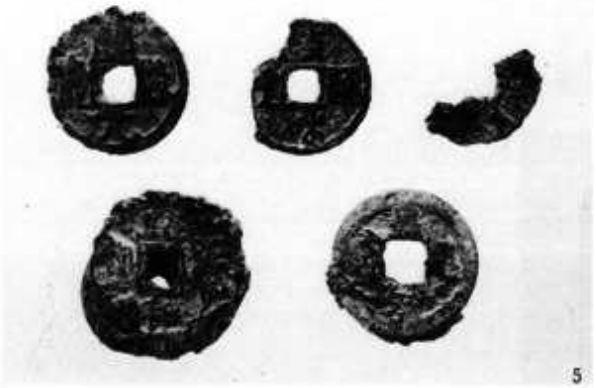
1－19号住居跡(須恵器坏)　2～6，8－28号土壙(土師器坏、墨書)　7－28号土壙(土師器甕)
9，10－28号土壙(土師器坏)　11－28号土壙(土師器高台付坏)

1

2

3

4

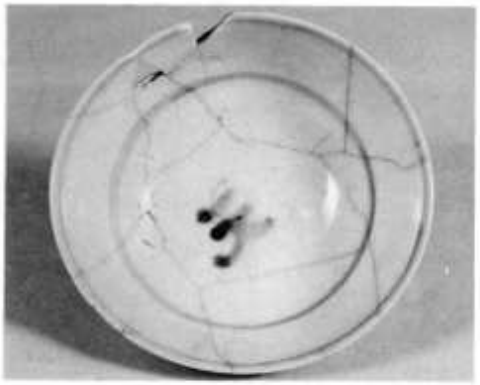


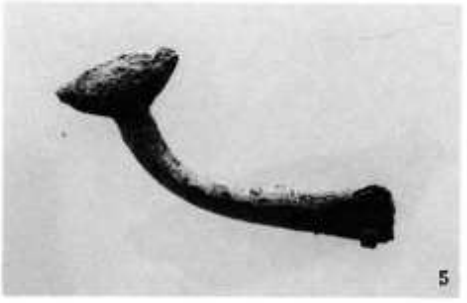
5

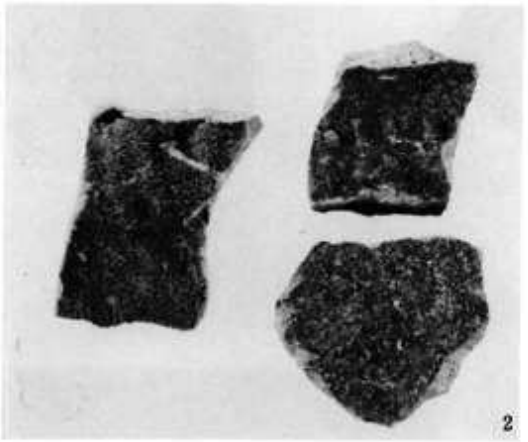
6

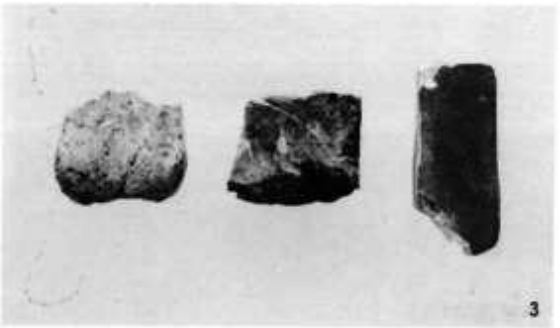
図版19　中世遺物(1)

1－44号溝(中世陶器)　2－44号溝(古銭)　3－45号溝(中世陶器)　4－45号溝(板碑)
5－1号墓壙(古銭)　6－1号土倉(銅製小箱)







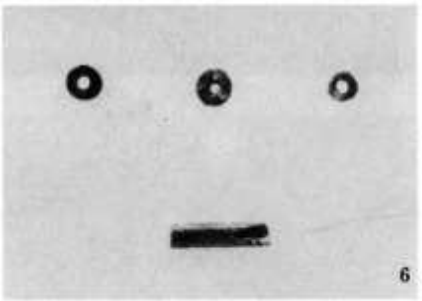


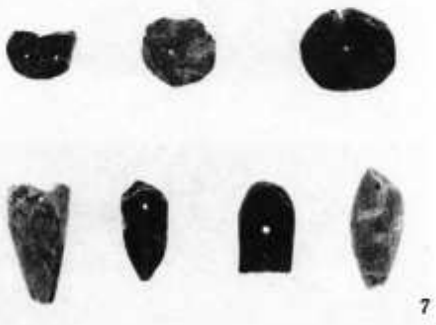
図版20　中世遺物(2)

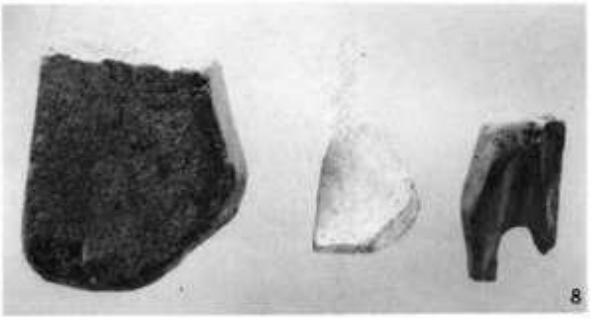
1 —47号溝(染付碗)　2 —47号溝(中世陶器)　3 —44，45，47号溝(砥石)
4 —47号溝(灯明皿)　5 —47号溝(煙管)　6 —47号溝(灯明皿)

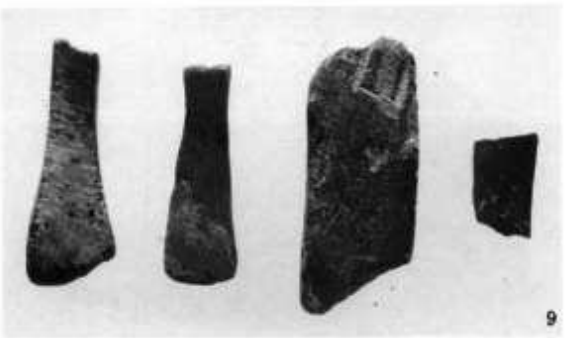
図版21　古墳時代遺物(第1次調査)

1－7号住居跡　2．6－3号住居跡　3－Ⅲ－2e区　4．7－Ⅲ－2f区土壙　5．8－16号住居跡
9－1号住居跡　(1～5－土師器杯、6．7－土師器甕、8－須恵器蓋、9－須恵器壺)









図版22　古墳時代～中世遺物(第1次調査)

1－Ⅲ－2f区土壙(器台)　　2．3．4－3号住居跡(土師器高坏)　　5－9号溝(石製紡錘車)
6－Ⅲ－2f土壙、16号、1号住居跡(小玉)、16号住居跡(管玉)
7－表採、Ⅲ－1C、Ⅲ－2f土壙、11．1号住居跡(石製模造品)　　8－4．14．3号住居跡(砥石)
9－3号土壙、P127、1．4溝(砥石)

仙台市文化財調査報告書第68集

南　小　泉　遺　跡

都市計画街路建設工事関係第3次調査報告

昭和59年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント

仙台市立町24　24　TEL63－1166